



下町聚楽住宅の再生
コレクティブハウジング
 の
実現に向けて

コレクティブハウジング事業推進応援団

1996年3月

コレクティブハウジング事業推進応援団
—世話人—

団長

石東直子／石東・都市環境研究室

奥井容子／環境意匠計画・奥井研究室

小林郁雄／(株)コー・プラン

鈴木洋子／コープこうべ

中川俱子／(株)アルプラン

野崎瑠美／遊空間工房

平山洋介／神戸大学

安原 秀／(株)ヘキサ

目 次

1.	被災地にコレクティブハウジングを！	1
2.	コレクティブハウジングとは、こんな住まい、住まい方	1
3.	海外事例	4
	(1) 新しい住空間	
	(2) 海外事例	
	a. フェルドクネッペン (スウェーデン)	
	b. プレストゴースハーゲン (スウェーデン)	
	c. レインボー (スウェーデン)	
	d. コモンズ (オランダ)	
	e. ホールハウス (オランダ)	
	f. ヴェイカント・ロッツ (アメリカ)	
	g. ゲスト・ポケット・コミュニティ (アメリカ)	
	h. リー・ゲット・ウィン・リジデンス (アメリカ)	
4.	国内事例	12
	a. 岡山県ひとり暮らし老人共同生活支援事業	
	b. シニアハウス江坂 (大阪府吹田市)	
5.	仮設住宅とコレクティブハウジング	15
	仮設住宅からコレクティブハウジングへ	
	呉川町ケア付き仮設住宅 (芦屋市)	
	一般仮設住宅における協同利用の事例 (新聞記事)	
6.	住宅復興とコレクティブハウジング	19
<参考資料>		
i.	コレクティブハウジング事業推進応援団 定期ミーティング議事録	20
ii.	きんもくせい 連載記事 (被災地にコレクティブハウジングを！)	25
iii.	コレクティブハウジング関連 新聞記事	35
iv.	コレクティブハウジング事業推進応援団	
	定期ミーティング出席者	37

1. 被災地にコレクティブハウジングを！

被災地での仮設住宅住まいが始まってから1年を迎えてようとしており、仮設住宅には今なお8万人強の人が住んでおり、そのうち高齢者やひとり暮らしが約半数を占める。そして、仮設住宅での高齢者の独居死や中高年者の震災苦による自殺者が後を断たない。一日中誰とも触れ合わずに、部屋のなかで孤立して過ごしては、明日への気力が沸いてこない。

安全で安心して住み、生きる気力を取り戻せるような住宅供給が、今、最緊急課題である。今後、多くの人が仮設住宅から災害公営住宅に移り住むことになる。その後にもまた、同じような悲劇が繰り返し続かないように、復興住宅に“コレクティブハウジング”の提案をし、その事業推進に向けての応援活動を展開している。

“コレクティブハウジング”とは、

—— いつでも誰かと会えるし、いつでもひとりになれる ——

—— ひとりで食事をするよりは、たまには大家族のように集まって食べよう ——

という住まい方の「協同居住型集合住宅」であり、日常生活の中で自然なかたちで人とふれ合うことができる。

すなわち、コンパクトであるが、それぞれが独立した複数の住戸（住宅）と、その延長としての共有スペース（共同室）が組込まれた集合住宅であり、共有スペースを核に協同生活が開かれる。

なお、被災地での復興住宅では、本格的なコレクティブハウジングの実現に先駆けて、コレクティブハウジングの協同性（相互扶助）に着目したハウスシェアリング、グループホーム、簡易型コレクティブハウジングの供給が望まれる。そこから本格型コレクティブハウジングが育つであろう。

2. コレクティブハウジングとは、こんな住まい、住まい方

コレクティブハウジングの先進事例地である北ヨーロッパ諸国の collective とは、「団体の、集団の、協同の」という意味で、コレクティブ・ハウジングとは、通常は食事、保育、洗濯等の日常生活のかなりの部分を協同化するというライフスタイルである。従って、コレクティブという言葉はコーポラティブとは異なり、「生活の協同化」を意味しており、供給方式や所有形態とは関係が薄い。

コレクティブハウジングの基本理念である生活協同型の住宅は、日本ではまだ事例がないようであるが、高齢者の夜間の安全性と安心感の確保を主たる目的として供給された「岡山県ひとりぐらし老人共同生活支援施設」は、協同型（協働型）の生活が営まれており、簡易型のコレクティブハウジングに近いものである。また、芦屋市、尼崎市などで震災後供給された高齢者・障害者向けケア付き仮設住宅は、グループホームとしての形態と内容を持ち、これも簡易型コレクティブハウジングの事例といえる。

ライフスタイルのひとつの選択肢としてのコレクティブハウジングは、わが国ではまだよく知られていないが、高齢者にかぎらず単親世帯、男女協業世帯、単身世帯等の中には、共に住まうことの安全性、安心感、合理性を高く評価し、さらに共に住まう楽しさをもつライフスタイルを求める層が近年でてきた。被災地においてはその傾向がとくに大きい。

コレクティブハウジングの住まい・住まい方と、モデル型のイメージは下に示すようなものである。

なお、コレクティブハウジングの居住理念である協同（協働）居住の運営は、共同スペースをもった住宅の建設というハード面の充実だけでは稼働しない。的確なソフトシステムの構築が必要であるが、ここ（この冊子）では、ソフトシステムの構築については触れていない。

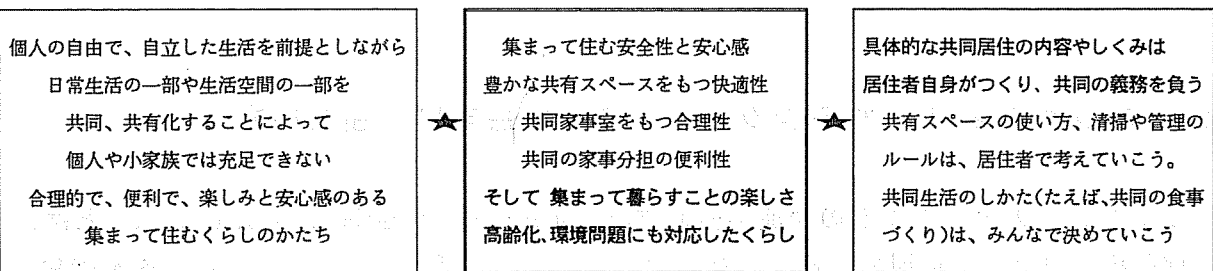
《コレクティブハウジングの住まい、住まい方》

ひとりで食事をするよりも、時には大家族のように集まって食べよう！

大家族のように みんなが集う場所をもつ住宅 ・ 共に住む 共に生きる 共に創る 相互扶助の暮らし

おしゃべりしながら洗濯機をまわす 一緒に住む人たちの日常的なふれあいを通して、

食事をしながら おしゃべりする 共に生きる楽しさがわく



共有スペース
個人の住宅の面積を少しづつ出しあって(コンパクトにして)共有スペースをもつ。どんな共同室をもつかは、いろんなタイプが考えられる。

共有スペース(共同室)の内容

本格型(理想型)	厨房、食堂、談話室、洗濯室、浴室、トランクルーム、多目的室(趣味室)、ゲストルーム、サンルーム、その他。	住戸は単身用から多人数世帯用まで多様なタイプを含む
簡易型	厨房、食堂=多目的室、洗濯室、トランクルーム、(浴室)など。	住戸は上記と同じ
超簡易型	多目的室(厨房付き)、洗濯室、(浴室)など。	住戸は主として単身用と二世帯用

《被災地でのコレクティブハウジングのモデル型》

タイプ	住戸・共有室の内容	主たる入居対象者像	供給主体	単位規模等
A 本格型(理想型) 協同生活型	住戸→単身世帯から多人数世帯 までの多様なタイプを内 包する 共有室→厨房、食堂、談話室、洗濯 室、浴室、トランクルー ム、多目的室、客室、テラ ス、その他	主旨に賛同する人 多世代が棲み合う	住・都公団 住宅供給公社 コープこうべ等の市 民生活協同組合	日本的付き合い文 化から考えると、 10戸未満は不適 最小→15戸前後 最適→20～30戸 最大→40戸前後 が望しいと思える
B 簡易型 セルフワーク (最少の共同施設 共有型)	住戸→単身世帯から多人数世帯 までの多様なタイプを内 包する 共有室→厨房、食堂=多目的室、 洗濯室、トランクルーム (浴室)	主旨に賛同する人 多世代が棲み合う	住・都公団 住宅供給公社 自治体 コープこうべ等の市 民生活協同組合 民間アパート経営者	
C 超簡易型 軽度のケアサー ビス付き	住戸→単身および二人世帯用 共有室→多目的室(厨房付き)、洗 濯室、事務室	シニア層 (特に仮設住宅の移り 住みとして)	住・都公団 自治体 福祉施設関係の法人	
<シルバーハウジング・プロジェクトよりも居住者の相互扶助を推進し、転機は近接の福祉施設からの派遣>				
D ネットワーク型				
a. クラスタ型→近接した小規模単位の共同住宅を、ひとつのコレクティブハウジングとし、共有施設の機能分担をする。 ex. 浴室(風呂屋)をもつクラスタ 食堂(レストラン)をもつクラスタ 洗濯室(コインランドリー)をもつクラスタ 各クラスタは談話室をもつ			従前木賃経営者 (カッコ内は従前木賃 経営者と地元の風呂 屋等経営者の合築)	数戸～15戸程度の 小規模も対応
b. 地元復興施設の付加型→市場復興と小規模コレクティブハウジング 風呂屋復興と小規模コレクティブハウジング			施設経営者 施設経営者と市また は居住者組合等	
c. 地域の福祉施設の付加型→特別養護老人ホームとシニアコレクティブ etc.				

3.海外事例

(1) 新しい住空間

——協同住宅の生成と類型

“標準住宅”の解体

世界の多数の地域に成長した“マス・ハウジング”のシステムは、“標準世帯”を対象に据えて画一的な“標準住宅”を大量に生産してきた。この“標準世帯”は雇用された夫、専業主婦、子どもの「夫婦と子」として想定されている。“標準住宅”は規格化されたワン・セットの要素から構成され、どれもこれも同じような内容をもつ。“標準世帯”と“標準住宅”の結合を基礎とする住宅供給のスタイルは自動的に多く地域に侵入し、住宅のあり方に対する人びとのイメージを極端に固定化してきた。

ところが、世帯の内容は劇的な変化を示している。単身者、高齢者世帯、共稼ぎ世帯、母子世帯などが急速に増大した。出生率の低下、初婚年齢の上昇、結婚を選ばない人びとの増加、人口の高齢化、女性就労率の上昇など、これらすべては世帯の変化を加速してきた。“標準世帯”は一貫して減少し、現実にはもはや“標準”とは呼べない位置にまで比重が低下している。

こうした世帯の変化は住空間へのニーズの変化をともしなう。“標準住宅”とは、“標準世帯”の専業主婦の存在を前提として、生活上のほとんどのニーズを住戸内で完結して私的に処理するものと仮定した空間である。住機能に特化した専用住宅地をつくり、近隣からは切り離された孤立性を帯びている。この“標準住宅”は変化していく世帯の新しいニーズに反応できそうもない。アメリカの建築学者であるドロレス・ハイデンは、現代のすべての住宅は固定された世帯のイメージにもとづく「極度に私的」な「孤立した住宅」であり、「日用品を詰め込んだ箱」にすぎないと述べている。

協同住宅の生成

住空間を組み替える試みがはじまった。スウェーデンのコレクティブ・ハウジング、デンマークのコ・ハウジング、オランダのセントラル・リ

ビング、アメリカのシェアド・ハウジングなど、多彩な類型の新しい住空間が発達しはじめた。住宅の固定概念をひとまず壊し、現代の世帯にもっと忠実な空間を編成するための試みである。

これらの新しい住空間はさまざまなバリエーションがあり、型ごとに独自の性格と意図が認められる。しかし、そこに共通する特徴は、単純化していえば、複数の世帯が集まって住み、一定の空間を共用する“協同住宅”として編成されている点にある。

この共用空間は空間の構成それ自体の特徴をつくるだけでなく、多面的な意味を含んでいる。

- ①生活の協同。日常的な助け合いを育成する。家事、だんらんを協同化する。単身者、高齢者、母子世帯などは生活上のニーズを私的に充足する機能は弱い。専業主婦の家事は期待できない。
- ②コミュニティづくり。共用空間を基点に親密な社会関係の生成を促す。
- ③複合性の重視。住機能に限定せずに、各種の施設・サービスを“オン・サイト”、すなわち敷地内、住棟内に組み入れる。
- ④近隣との密接な関係。共用空間を外に向かって開き、近隣を含めたコミュニティをつくる。“オン・サイト”の施設・サービスを近隣に解放する。
- ⑤アフォーダブル住宅。空間の共用化は1戸当たりのコストを引き下げる。世帯の変化につれて、単身者、高齢者世帯など、住居費負担能力が低い世帯が増えていく。

協同住宅の類型

協同住宅の多様性を理解するための指標としては、さしあたり次の8点が重要だろう。これらの指標は互いに関連し合っている。ただし、ここでの指標は“即物的”なものに限っている。実際には歴史的な経緯、思想的な背景などが類型の生成に深く影響を及ぼしている。

- ①共用空間—この部分にどのような機能を組み込んでいるのか。
- ②専用空間—“標準住宅”が備えていた機能のすべてを専用空間に取り入れたうえで、さらに共用空間をつくっているのか。あるいは“標準住宅”の要素の一定部分を共用化しているのか。
- ③居住世帯—多様な世帯が複合して住むのか。単身者、高齢者、母子世帯、ホームレスなど、特別

のニーズをもつ特定の型の世帯に限定して、それに
応じた空間をつくっているのか。

④居住階層—中産階級のための住宅なのか。低所得層、
貧困層の問題を意識したアフォーダブル住宅なのか。

⑤テニユア—持家、賃貸、協同所有のコープなど、
多様なテニユアの住宅がある。これは居住世帯、
階層に関連している。

⑥生活様式—日常生活をどこまで協同化している
のか。とくに食事の様式がどうなっているのか。

⑦サービス—ソフト・サービスをどのように組み
込んでいるのか。

⑧自律性—居住者が自発的にプロジェクトを手が
け、建設から管理、コミュニティの運営にいたる
過程に自律性を発揮しているのか。あるいはスポン
サーが主導してプロジェクトを行っているのか。

協同住宅の典型

こうした指標を踏まえて、協同住宅の代表的な
類型を簡単に示しておく。

①コレクティブ・ハウジング（スウェーデン）

もともとは社会主義、ユートピア運動、フェミ
ニズムなどの思想的背景から生じてきた協同住宅
である。多様な型の世帯が集まって住んでいる場
合が多い。専用空間は独立した住宅としての機能
をもち、そのうえで充実した共用空間を備える。
食事を含めた生活の協同性が強い。居住者の自律
的なプロジェクトであるケースが多い。近年では、
高齢者のためのコレクティブが試されている。

②コ・ハウジング（デンマーク）

空間と生活様式の面ではコレクティブに近い。
ただし、コレクティブは社会思想の空間的な実践
として現れてきたのに比べ、コ・ハウジングは生
活様式それ自体を目標にして生まれてきている。
低層・低密のタウンハウスのプロジェクトが多い。
一般的に10～20戸程度のクラスターに分節され、
クラスターごとに共用のコモン・ハウスをもっ
ている。居住者の自律性が高い。高齢者のための
コ・ハウジングが増えている点が近年の特徴。当初
は持家が多かったのに対し、最近ではコープが主
流である。

③セントラル・リビング（オランダ）

低所得の単身者、母子世帯をターゲットにした

非営利組織のプロジェクトが多い。アフォーダブル
な賃貸住宅として供給される。コレクティブ、
コ・ハウジングに比べて、より“アーバン”な集
合住宅であるケースが一般的である。専用空間は
小さく、“標準住宅”の一定の要素が共用化され
ていることがある。空間設計はクラスター方式を
採用し、クラスターごとに生活の協同化の単位を
つくっている。

④シェアド・ハウジング（アメリカ）

“同居”に近い協同住宅。主に高齢者への対応
に狙いがある。既存の一戸建住宅のストックを活
用したハウスメイト・マッチでは非営利組織など
が同居者をアレンジしている。高齢者と若年世帯
の“同居”が多い。高齢者どうしの“同居”とな
る場合もある。“同居”を成功させるために、非
営利組織はあらかじめカウンセリングを行って
いる。グループ・レジデンスは複数の高齢者が“同
居”するためのシェアド・ハウジングである。専
用空間は限定され、キッチン、ダイニング、リビ
ングなどは共用化される。非営利組織のプロジェ
クトとして実施される場合が多い。

⑤トランジショナル・ハウジング（アメリカ）

ホームレスであった母子世帯を対象とした非営
利組織のプロジェクト。居住期間は約2年に限定
され、その間に母子世帯が生活再建の準備を整
える点に狙いがある。このため、保育所、ジョブ
・トレーニング、家庭教師、クラス・ルーム、カ
ウンセリングなどの多彩な施設・サービスが“オ
ン・サイト”で設置されている。専用空間は小さ
く、共用空間の比重が大きい。

⑥SROハウジング（アメリカ）

非営利組織による単身のホームレスのための賃
貸住宅。低所得層の簡易ホテルであった建築を修
復してコンバートしたものが一般的。SROは
Single Room Occupancyの略称で、居住者が占
有するのは文字どおり1室である。キッチン、ダ
イニング、リビング、バス・トイレなどはすべて
共用。専用空間の切り詰めによってアフォーダブル
住宅を実現している。ホームレスの生活再建を
支援するために、ジョブ・トレーニング、カウ
ンセリングなどのサービスが結合されている。

(2) 海外事例

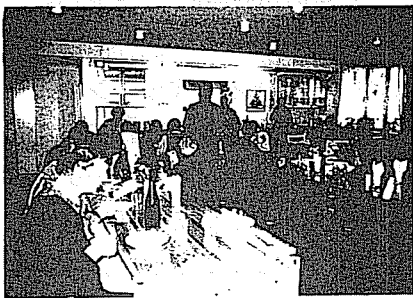
a. スウェーデン
フェルドクネッペン

フェルドクネッペンは、スウェーデン国鉄ストックホルム南駅周辺の住居を中心として再開発された新市街と、100～200年前の建物が残る旧市街のエッジに位置するコレクティブハウジング。1993年6月に完成した最も新しいタイプである。

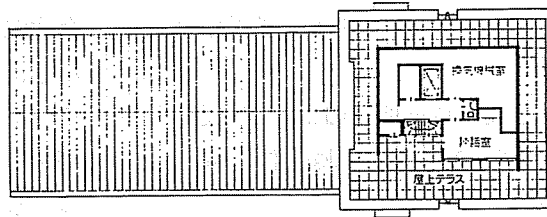
特徴は、公共の賃貸住宅であるにもかかわらず、明快なコンセプトを持つ有志によって計画が始動し、企画から設計まで、将来の入居者も主体的に参加して6年がかりで実現したことだ。コンセプトを要約すると、「子供たちが成長して独立をした後は、それまで住んでいた大きな家をお子たちの世代に譲る。親世代は、コンパクトで便利で社会的コンタクトと相互扶助のあるもう一つの家を、まだ十分エネルギーのあるうちに、自分たちが主体となってつくろう」というもの。50歳代を中心とする数人が、賛同する仲間を集めた。その際、40歳以上で同居する学童期の子供がいないことを入居資格とした。

居住者自らが物理的・人間的環境づくりに関わることによって、可能な限り自由で、自己決定に基づいた自立した老後を実現したい—という考え方は、高福祉国のスウェーデンでは十分社会的に説得力を持つものである。ストックホルム市の住宅公社の一つが、供給を引き受けることになった。

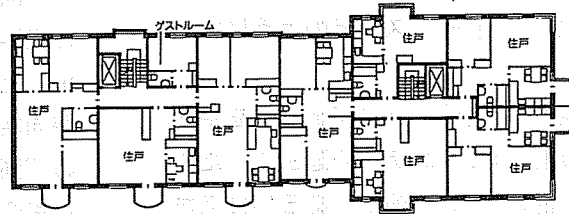
住戸は36～76m²と比較的小さくし、各居住者が賃貸面積の約13%ずつを供出する形で生み出したスペース約500m²を使い、共同の厨房や食堂をはじめとする各種の共有室を計画した。その内容や配置、性能に関しては、かなり居住者のいこうが反映された。また住戸についても、公共住宅の枠内とはいえ、間仕切りの位置や設備内容、仕上材料、色彩などの選択が居住者にゆだねられた。



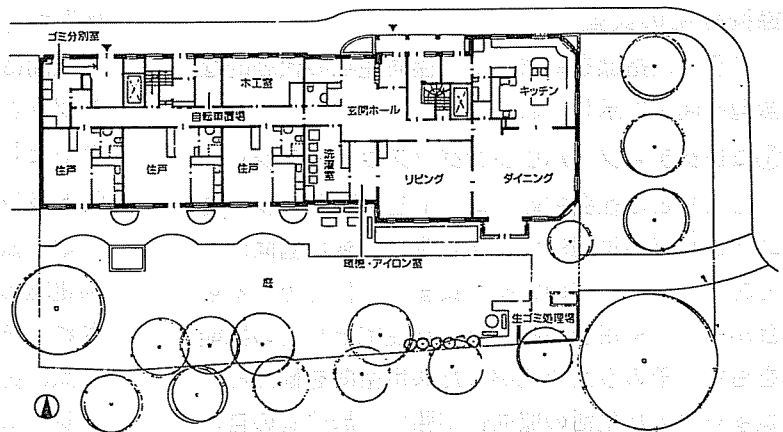
共同で食事をするコモンダイニング。アルコールは各自持参する。ゲストも予約すれば食事できる。食事チームが一週間のメニューを立て、栄養学のプロである居住者がレシピを作ってくれる。



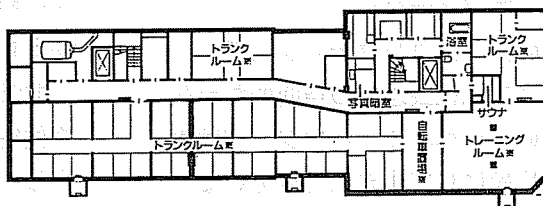
7階平面図



基準階平面図(住戸標準プラン)

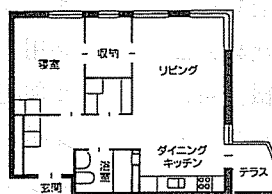


1階平面図



地下1階平面図

※印はシャッター位置になっている。

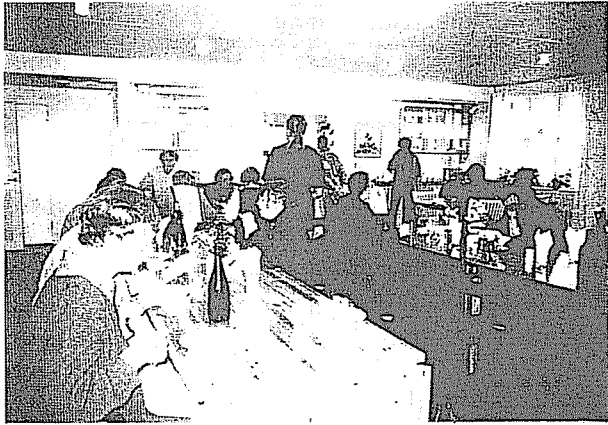


代表的な1住戸平面図(55.5m²)

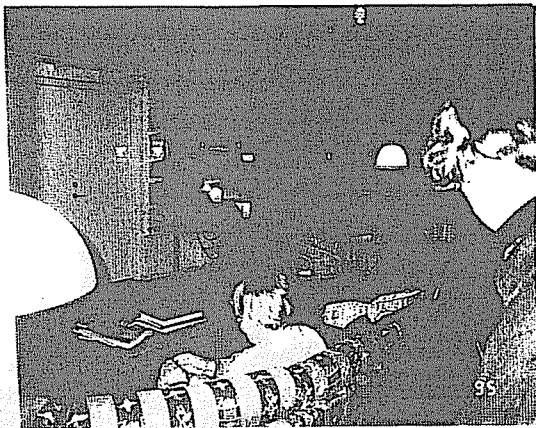
●建築概要

- 供給主体——ストックホルム市住宅公社ファミリエオシュターダ
- 設計者——ヤン・ルンクヴィスト建築設計事務所
- 所有形態——賃貸
- 階数——地下1階・地上5階(一部7階)
- 住戸数——43戸(36～76m²)
- 共有室——厨房、食堂、多目的室、木工室、洗濯室、写真暗室、サウナ、ルーフトラス、密室、トランクルーム、事務室、コンポスト
- 運営主体——居住者組合フェルドクネッペン

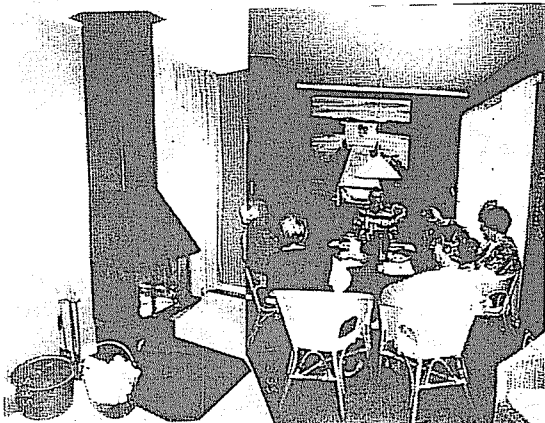
a. スウェーデン
フェルドクネッペン



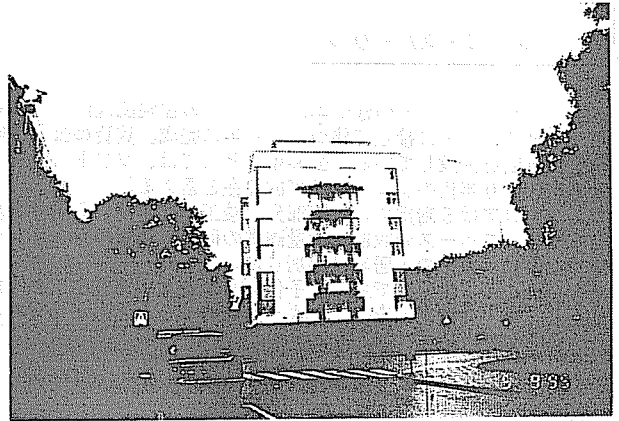
共同の食堂での食事風景



夕食の後は共同の居間でくつろぐ



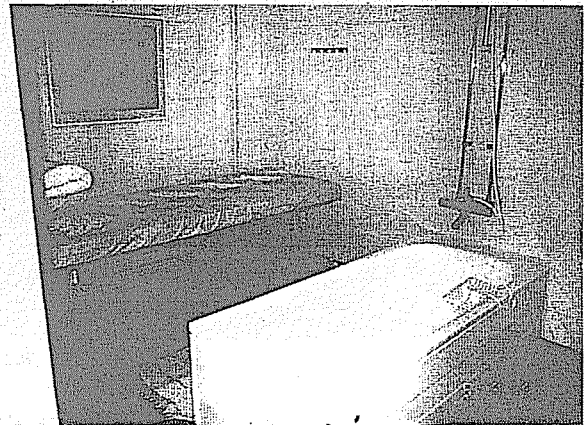
7階談話室での団らん



外観



設備の整った厨房



共同の浴室 - 介護を要する人も入浴ができる

洗濯室



写真提供：石東直子

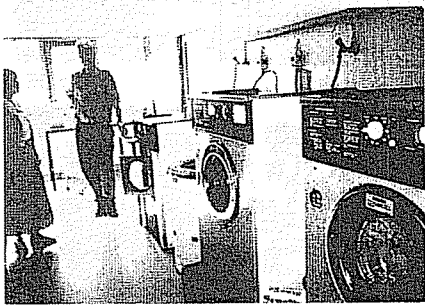
b. スウェーデン

プレストゴースハーゲン

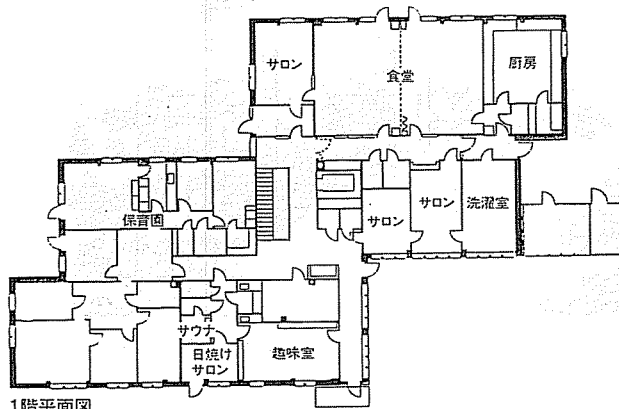
ストックホルムメッセの建つエルフシェーの住宅団地内に、高齢者用サービスハウスに接して建つ。84年に完成。賃貸型公共住宅で、地区保育園を併設している。公共事業としては、ソフト、ハード面ともに、80年代のプロトタイプ的存在と言える。コモンフロアは5階建ての1階部分。竣工の2年前に入居者を募集し、コモンスペースの設計や大量調理の研修、運営のシュミレーションなどに、将来の入居者は参加した。また、ここは子供天国である。子供たちが遊戯室で自由に遊んだりサービスハウスの老人を友達のように訪ねている光景が見られる。

●建築概要

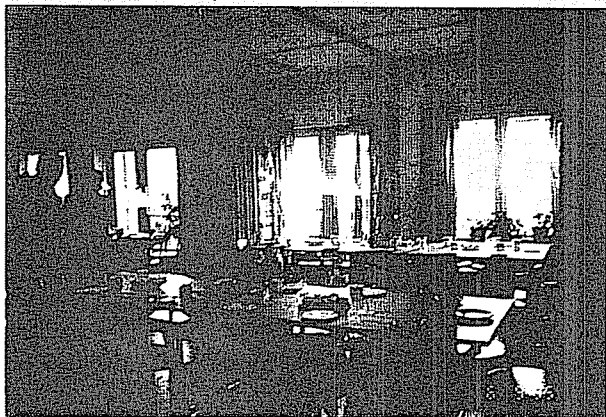
- 供給主体——ストックホルム市住宅公社ファミリーエポシュターダ
- コーディネーター——グニル・スコグ&アンデルシュ・ティベリ
- 所有形態——賃貸
- 階数——地下1階・地上5階
- 住戸数——31戸(39~79㎡)
- 共有室——厨房、食堂、だんらん室、織物室、木工室、陶芸室、写真暗室、サウナ、音楽室、洗濯室、子供遊戯室、菜園
- 地区施設——保育園
- 運営主体——居住者組合プレストゴースハーゲン



ランドリー。ここは井戸端会議の場所になる



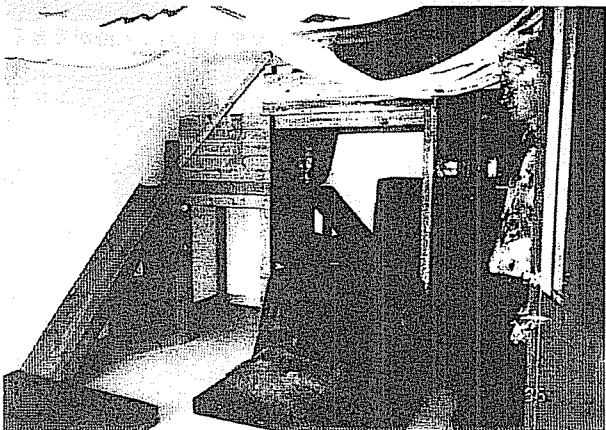
1階平面図



食堂



外観



プレイルーム — 子供が多数入居

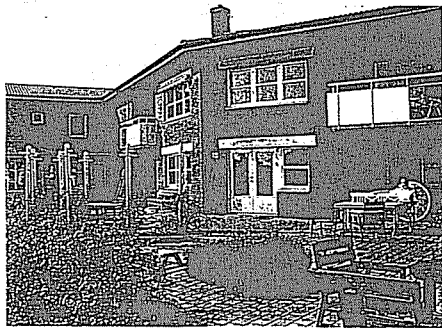
木工室



資料出典：日経7-キチク71994.7-4
写真提供：石東直子

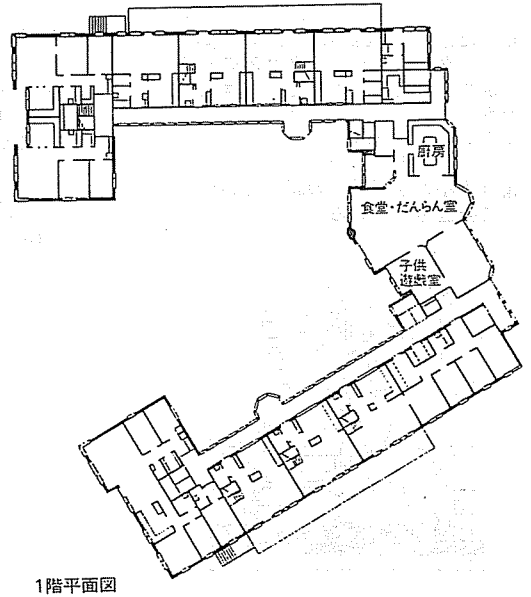
C. スウェーデン
レインボー

大学都市ルンド郊外にある、スウェーデンには珍しい郊外型のコレクティブハウジング。竣工は89年。規模は比較的小さく、92年時点で大人20人と子供30人が住む。高齢者から子供までの多世代のコミュニティー形成を意図的に目指している。自然との直接的な触れ合いがテーマで、各住戸の接地性を重視している。そのため一部の共用室は地下に配置された。住戸への入口は中庭に面したガラス張りの廊下側にあり、中庭と反対側にプライベートな庭がある。大人の人数が少ないこともあり、ここでは1週間のうち3日だけ、夕食を共同運営している。担当者は3人で、ショッピング、料理、片付けを行う。4週に1度の割合で食事づくりが回ってくる。厨房と食堂はエントランスに近く、明るく中心的な位置にあるので計画された共同食事以外の自主的な共同利用がかなり活発である。



外観。コの字形の中央に当たる部分に、コモンキッチンなどが配置されている

- ◎建築概要
 供給主体——ルンド市住宅公社
 設計者——ロルフ・リンドストロム/HLAD
 所有形態——賃貸
 階数——地下1階・地上2階
 住戸数——19戸+貸家3戸
 共有室——厨房、食堂、だんらん室、木工室、音楽室、サウナ、洗濯室、AV室、子供遊戯室、卓球室、客室、菜園、コンポスト
 運営主体——居住者組合レインボー

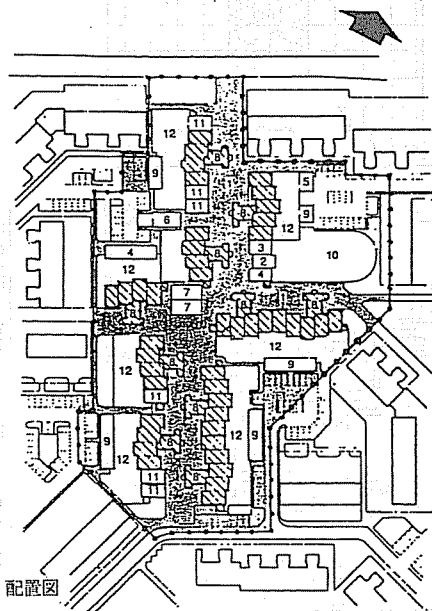


1階平面図

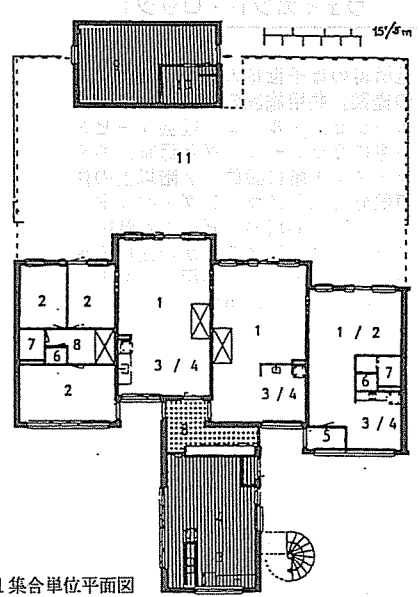
資料出典：日経7-キチキチ1994.7-4

d. オランダ
コモンス

全54戸、2～3層の集合住宅。4～5戸を単位とした”クローズドクラスター”を採用。クラスターごとに共用のキッチン、ダイニング、リビング、ランドリー、倉庫、クラスターガーデンがある。”クローズド”なので固定メンバー。居住世帯の65%は単身、及び母子。固定メンバーの関係がうまくいかないときがある点が欠点。



配置図



1集合単位平面図

1. 歩行者通路
2. 図書館
3. 会議室
4. バー、喫茶室
5. サウナ
6. 工作室
7. スタジオ
8. 共用台所・食堂
9. 共用洗濯室・倉庫
10. 共用庭
11. 独立街（非共同台所）
12. 専用庭

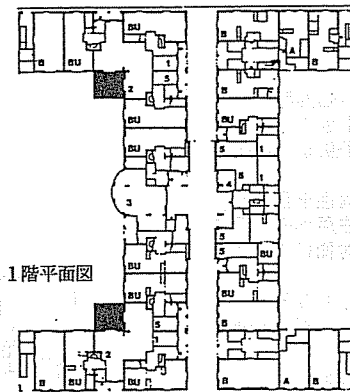
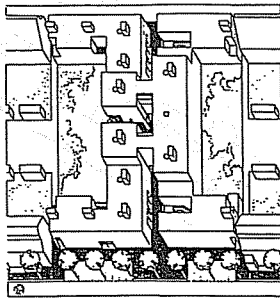
1. 居間
2. 寝室
3. 台所
4. 食室
5. 玄関
6. 便所
7. シャワー室
8. ホール
9. 共用倉庫
10. 共用洗濯室
11. 専用庭

資料提供：平山洋介

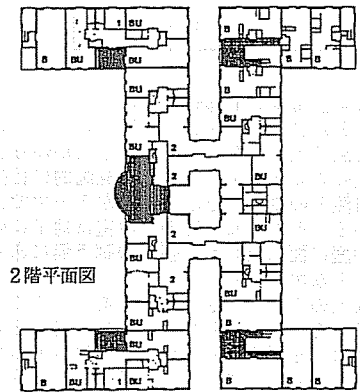
e. オランダ

ホールハウス

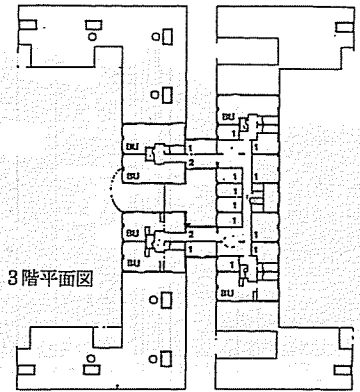
3層の集合住宅。3つのクラスター。クラスターごとに共用のキッチン、ダイニング。ただし、“オープンクラスター”なのでメンバーは非固定。居住世帯は61%が単身、36%が母子。このプロジェクトは、(1)独立住宅：クラスターには加わらない完結した住戸、住棟の端に配置、(2)ベーシック・ユニット：クラスターに参加する世帯のための住戸、専用の簡易キッチン、小さなリビング、寝室を備える、(3)ルーム：ベーシック・ユニットの世帯が必要に応じて借りる小さな部屋、の組み合わせとして計画されている。



1階平面図



2階平面図



3階平面図

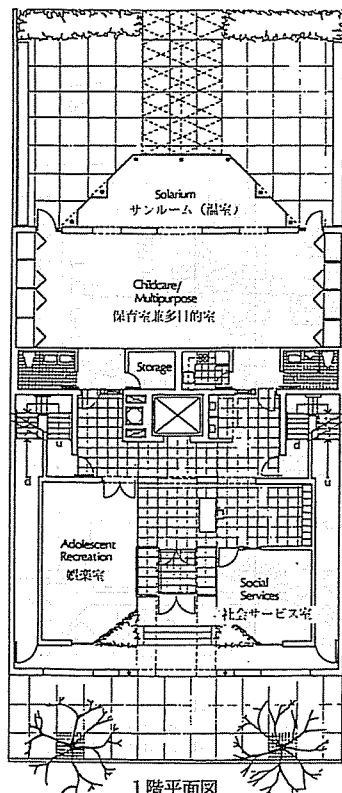
- A. 2人用独立住戸
- B. 1人または2人用独立住戸
- BU. 基本型住戸
- 1. 個室 2. 共用台所・食室 3. 喫茶室 4. 洗濯室 5. 倉庫

資料提供：平山洋介

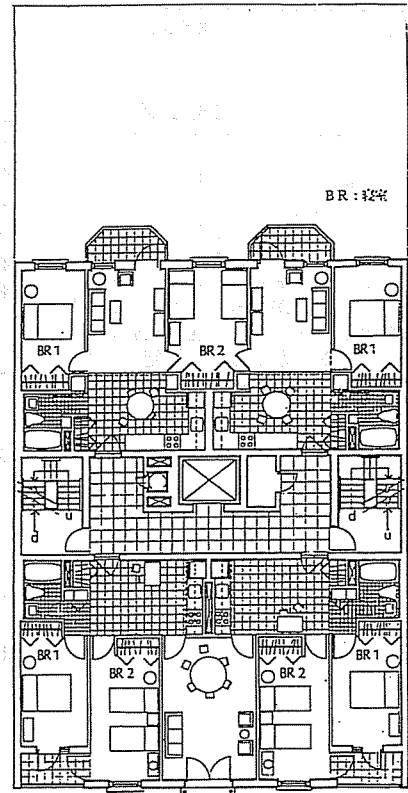
f. アメリカ

ヴェイカント・ロッツ

低所得の母子世帯のための集合住宅の提案。共用施設の保育所、レクリエーション・ルーム、社会サービス（主にカウンセリングと保育）のオフィスを1階に設置。2階以上の住戸部分では“スウィング・ベッド・ルーム”と共用のリビングが特徴。“スウィング”はどちらかの住戸の専用にしてもよいし、共用してもよい。互助関係の育成に狙い。



1階平面図



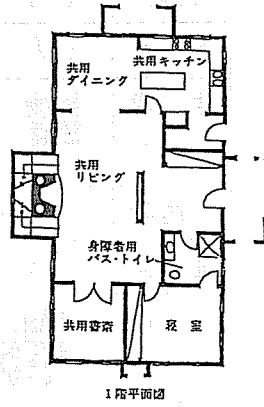
2階以上平面図

資料提供：平山洋介

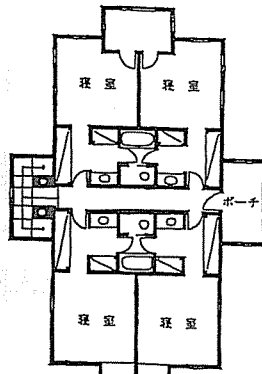
g. アメリカ

ヴェスト・ポケット・コミュニティー

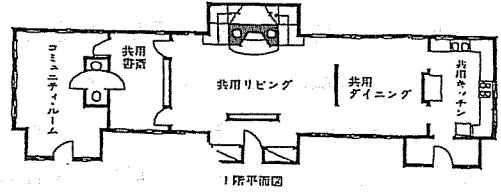
全体で7戸から構成され、30名が居住できる。各戸は2階建、4ないし5の寝室、共用のキッチン、ダイニング、リビング、書斎を備える。寝室はプライバシーを保つために2階に配置され、バス・トイレは2寝室で共用する。身障者を対象としたバリア・フリー設計の寝室、バス・トイレは1階にある。7戸のうちの2戸はコミュニティー・ルームをもち、これは居住者全員が利用できる。共用空間の管理、食事は、居住者が協同して行うことになる。



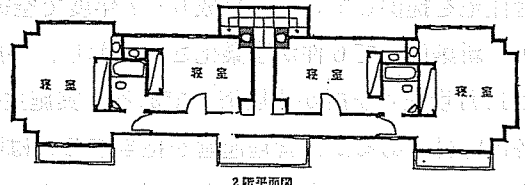
1階平面図



2階平面図



1階平面図



2階平面図

資料提供：平山洋介

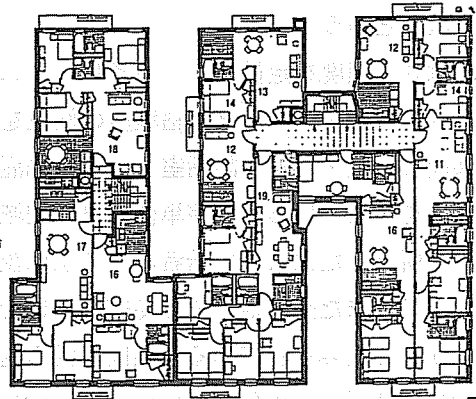
h. アメリカ

リー・グッドウィン・レジデンス

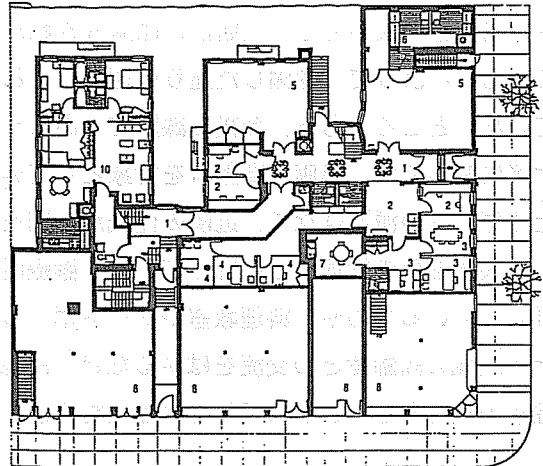
母子世帯のトラジショナル・ハウジングと恒久住宅。ニューヨーク、ブロンクス。非営利組織のプロジェクト。1階に店舗。歯医者、薬局、美容院、花屋がテナント。母子世帯の住宅をつくと同時に、荒廃した(ブロンクスはメチャクチャになっている)地域に商業施設を供給して、経済を刺激する点に狙い。"オン・サイト"の社会サービスとして、保育、カウンセリング、コンピューター訓練(就労能力開発)、調理実習、子供の家庭教師がある。これに応じた共用施設が1階に豊富に設置されている。マネージャーが住み込み。社会サービスのスタッフは通い。2階以上は独立住戸とシェアド住宅のミックス。"スウィング・ベッド・ルーム"の技法がみられる。

1. 玄関
2. 受付
3. 事務室
4. 相談室
5. 保育室
6. 調理実習室
7. スタッフ室
8. 店舗
9. 倉庫
10. 管理人室
11. 2または3寝室住戸
12. 1または2寝室住戸
13. 1寝室または1寝室住戸
14. スイング寝室
(両側からの利用可能)
15. 1寝室
16. 1寝室住戸
17. 2寝室住戸
18. 3寝室住戸
19. 分割利用住戸

1階平面図



2階以上平面図



資料提供：平山洋介

4. 国内事例

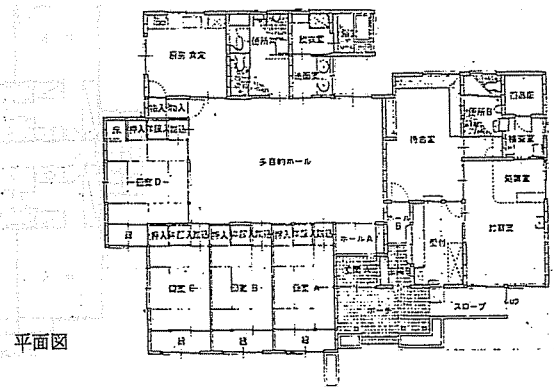
a. 岡山県ひとり暮らし老人共同生活

支援事業

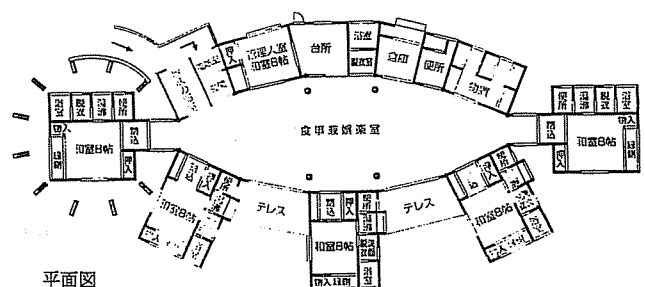
岡山県では、高齢者福祉対策の一つとして、平成6年度から県独自の推進事業である「ひとり暮らし老人共同生活支援事業」を行っている。これは、孤独から来る日常生活の不安や、身体機能の低下に伴う家事負担の増大、また緊急時の不安などを、共同生活とその中での相互扶助によって解消しようとするもので、満65歳以上の独居老人を対象に コレクティブハウジングの形をもつ集合住宅を提供している。平成6・7年度で空家利用、新築併せて6件が事業化されており、平成7年11月現在4ヶ所が入居済みである。実施主体は各市町村であるが、管理運営を担当するのは町直営、社会福祉協議会、老人クラブ、地域主導型とさまざま、入居者の選定にあたっては、各施設ごとに地域の実情に照らして行われている。入居者は以前からの知り合いであることが多く、共同部分の管理運営方法についても入居前から話し合いがもたれたという。

各施設は6人程度を定員とし、トイレ・ミニキッチン・押入・広縁のついた6帖程度の個室を基本に、共同の食堂・台所・談話室・浴室・洗濯室・倉庫などを備えている。大字単位を対象地域とし、自宅を所有したままの入居者もいて主に夜間の利用が多く、また豪雪地帯では冬季に特にそのメリットがあるとみられている。共同生活の基本である調理や清掃などの分担については、仕事量や担当人数の決め方など入居前には掴みきれないこともあるようで、意図した通りの運営が行われていないところもある。今後の課題でもあろう。ケアに関しては、健康な高齢者を対象としているため専門家の派遣はなく、近隣の住民が時間を限って共同部分の管理などを行っている。診療所を併設しているものや、料理教室やゲートボールなどで地域の高齢者との交流をはかるなど、高齢者福祉の核であることを目指していると言えよう。

施設名 (所在地)	大塚和ひとり暮らし老人共同生活支援施設 (中央町大塚和西地内)
定員	5人
規模	建物：150㎡ 設備：居室 4室(個室 3, 2人部屋 1), 食堂, 厨房, 浴室, 便所, 多目的ホール, 緊急通報装置
入居者	3人(女3) 年齢：67歳～85歳
運営	平成7年5月29日運営開始
特色	<ul style="list-style-type: none"> ・診療所と一つの建物として整備 ・旧大塚和村の中心地で、役場支所、駐在所、郵便局に近接 ・両山寺の参拝客等を対象に特産品の生産、販売、観光案内



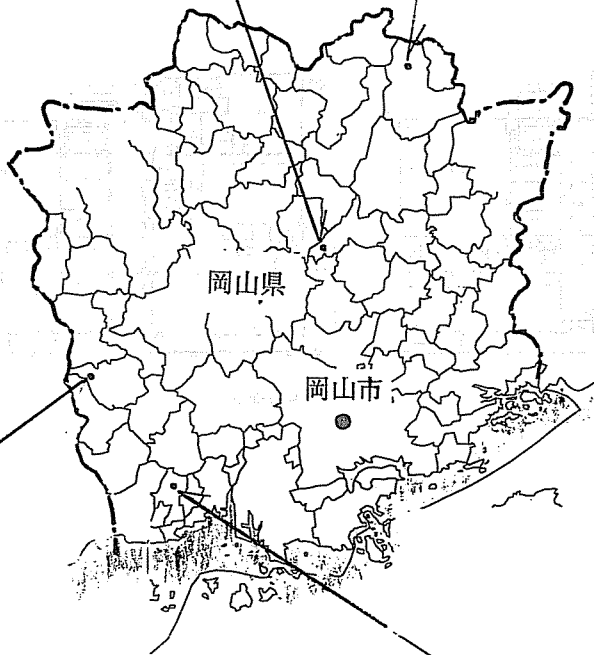
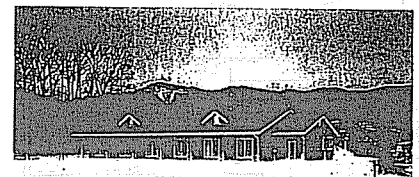
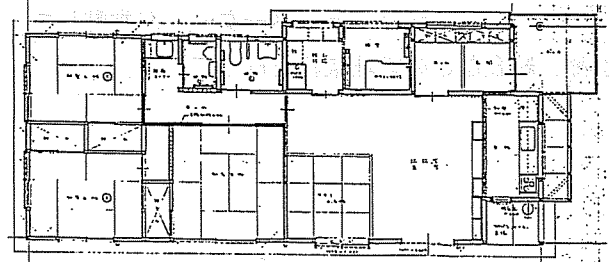
施設名 (所在地)	川上町ひとり暮らし老人等共同生活住宅 しあわせ荘 (川上町高山市地内)
定員	5人
規模	建物：400㎡ 設備：居室 5室(個室 5), 厨房, 浴室, 便所, 倉庫, 趣味室, ホール(食堂, 娯楽室), 管理人室, 緊急通報装置
入居者	5人(男2, 女3) 年齢：68歳～89歳
運営	平成7年4月20日運営開始
特色	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者福祉のむらづくり事業の一環として取り組み、入居者を地域ぐるみで支援 ・生活しやすい明るい建物 ・ゲートボール場や家庭菜園を一体的に整備する予定



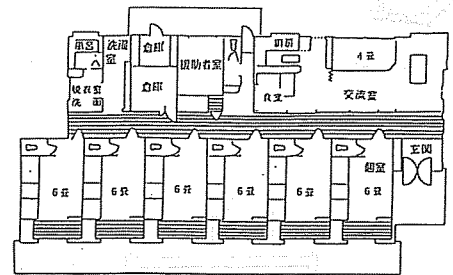


施設名 (所在地)	加茂町ひとり暮らし老人の家 (加茂町倉見地内)
定員	4人
規模	建物：106㎡ 設備：居室 3室(個室 2, 2人部屋 1), 厨房, 浴室, 便所, 交流ルーム(食堂・談話室), 緊急通報装置
入居者	2人(女) 年齢：73歳・75歳
運営	平成7年6月7日運営開始
特色	<ul style="list-style-type: none"> 豪雪地帯であり、特に冬季における共同生活にメリットがある 料理教室等を実施し、地域の高齢者との交流 園芸作物を共同栽培

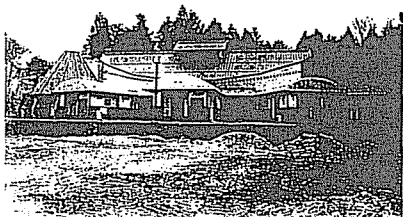
平面図



平面図



施設名 (所在地)	サニハウス鴨方 (鴨方町地頭上地内)
定員	6人
規模	建物：324㎡ 設備：居室 6室(個室 6), 食堂, 厨房, 浴室, 便所, 倉庫, 交流室, 援助者室, 緊急通報装置
入居者	4人(男2, 女2) 年齢70歳～89歳
運営	平成7年4月20日運営開始
特色	<ul style="list-style-type: none"> 都市部におけるひとり暮らし老人に対するモデル施設として整備 地域の高齢者と、座談会、ゲームホール等による交流 野菜の共同栽培



資料提供：岡山県保健福祉部長寿社会対策室

b. シニアハウス江坂

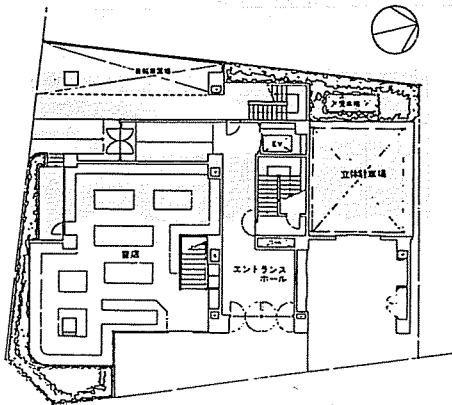
もと法政大学教授の駒尺喜美さんと仲間の「地域に開かれたウーマンズハウス+シニアハウス」の構想を生活科学研究所が具体化したグループハウジングで、1991年2月に完成した。

地主が施主となり、研究所が建物を一括借り上げて、地主と共同で運営している。入居者は終身利用権を買うか、賃貸（家賃+ホールなどの施設利用料）とするかを選択できる。

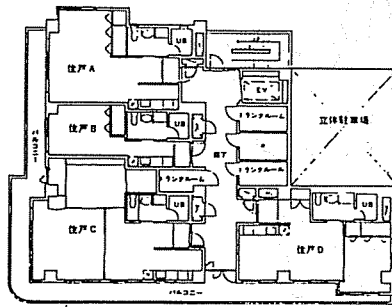
月1回のおしゃべり会以外に居住者の義務や規則はなく、「生活コーディネーター」が常駐して医療、給食などの管理業務を行っている。

建物概要

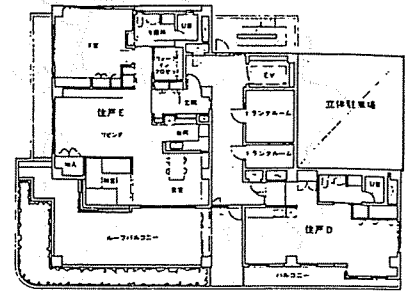
- ・ 建築地 大阪府吹田市
- ・ 構造規模 RC造7階建 一部鉄骨造
- ・ 敷地面積 467.49㎡
- ・ 建築面積 380.21㎡ (建ぺい率 81.33%)
- ・ 延床面積 2,235.36㎡ (容積率 396.46%)
- ・ 住戸数 10戸 (28.99㎡ ~ 108.56㎡)
(ワンルーム4戸、ファミリータイプ6戸)
- ・ 入居者数 15人
(男3人 女12人 内夫婦3組)
(50代1人、60代10人、70代2人、80代2人)
- ・ 共用部分 ロビー、入居者用談話室など



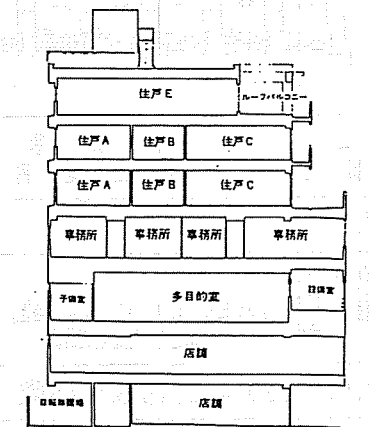
1階平面図



5・6階平面図



7階平面図



断面図

- 住居 10戸 → 住空間
- 女性のためのレンタルオフィス8室 → 職空間
- 多目的ホール「びいどろほおる」165㎡ → 遊・学空間
- 自然食レストラン
- 児童図書専門店

資料出典

『仲間と暮らす家づくり』21世紀の住宅研究会編 日経B P出版センター発行
『建築設計資料34 老人ホーム』建築思潮研究所編 建築資料研究会発行

5. 仮設住宅とコレクティブハウジング

仮設住宅からコレクティブハウジングへ

住宅性能や立地条件等、仮設住宅が住まいとして不十分な機能しかもたない中で、芦屋市、尼崎市の“地域型仮設”と呼ばれる高齢者・障害者用のケア付き仮設住宅では、コミュニティのなかでの生活による高齢者・障害者の身体機能や精神状態の改善などの例が多

く報告されている。また一般仮設住宅の中でも住民やボランティアの手によって“ふれあいセンター”や空室を“協同利用”的に活用したコミュニティも発生してきている。こうした暮らし方の工夫こそが、コレクティブハウジングの芽であり、こうして育ちつつあるコミュニティのあり方を恒久的なコレクティブハウジングに生かしていくことが必要であると思われる。

芦屋市

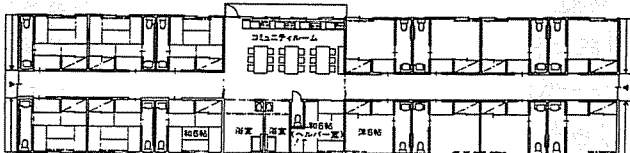
呉川町ケア付き仮設住宅

呉川町には8棟(95戸)の仮設住宅が軒を接して建てられている。その一角の3棟がケア付き仮設住宅で、平屋建ての1棟に14人が共に住まう。

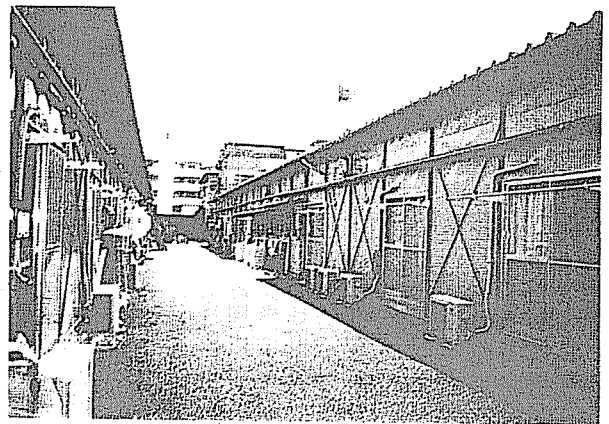
1居室は16m²の広さで、6帖(和室と洋室があり選べる)にトイレと洗面スペース、押し入れ、ゆったりした入口スペースである。それに14人の共同生活のためのダイニングキッチン(約45m²)、2つの浴室と職員詰所がある。一人に一室なので二人世帯の場合は二室が使える。

スタッフ13名が、昼間は各棟に1~2人、夜間は4棟で2人になって、24時間勤務している。

食事は原則として自炊ということだが、希望者には月、水、金の昼食づくりはボランティアの支援があり、居住者やスタッフも一緒になって食事を作る。夕食は31人が芦屋市福祉公社の配食サービスを利用している。



平面図

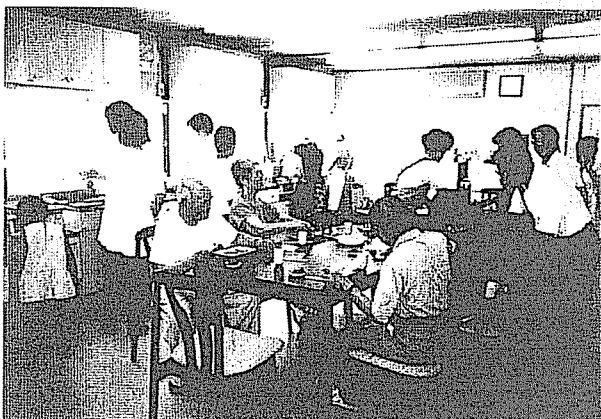


外観

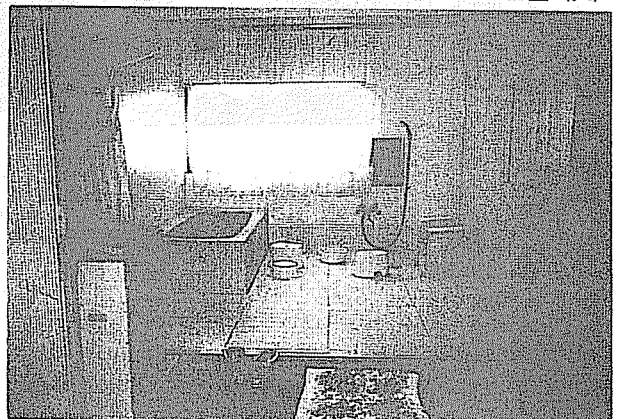


ダイニングキッチン

浴室(大)



ボランティアによる昼食サービス



写真提供：石東直子

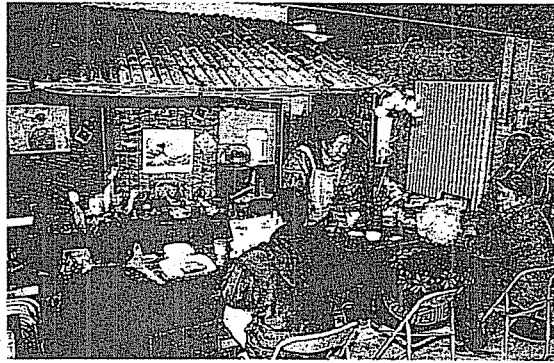
図面：日経7-キクチ71996.3-25

西神第7仮設

うぐいす茶と和風喫茶

竹のカウン
ターで一服 心ほぐすたたずまい

神戸市西区の西神第7仮設住宅のわかれあいセンター内の「喫茶」が、住民の憩いの場としてにぎわっている。竹製のカウンターなど和風の仕立てを施した店内には、年中無休の運営が特徴。今後、ミシサイチの本拠地や日本陸軍など、さまざまなイベントの予定で、遊び心いっぱいのスペースとなりそうだ。



竹製のカウンターが並び、住民の憩いの場としてにぎわっている。西神第7仮設住宅のわかれあいセンター内。

同仮設住宅(六十戸)を受援する「阪神高輪寺」阪神支隊ネットワークが、住民の協力でオープンさせて運営。メニューは、

コーヒー、紅茶、日本茶、昆布茶などあり、料金は無料でカンパを奨励。一日六十九人の客が訪れ、カラオケ喫茶となる月曜日には特に多い。常連客の一人、船渡正人さんは「頭見知りが増え、毎日話をするのが楽しい」という。震災前のように、喫茶店に通えなくなったのが狙い。仮設住宅の住民のわかれあいの場となる喫茶店が各地に広がってほしいと話している。

神戸新聞1996.2.24

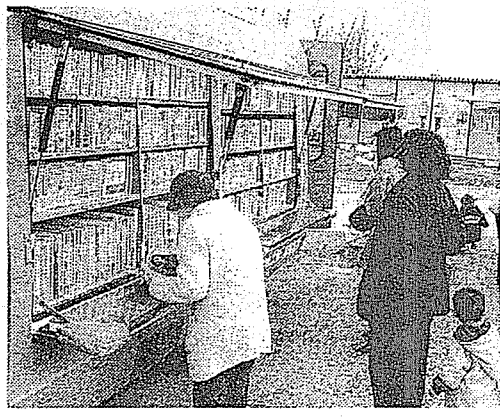
被災者を慰め、励ます

豊中市立岡町図書館が「豊南町南住宅」(百三十七戸)で昨年八月から、市内二カ所の仮設住宅(一部緑地住宅)二カ所を使った「動く図書館」が人気を集めている。

「動く図書館」は同市内六カ所の図書館の中で岡町図書館だけが実施。来館が難しい地域の団地駐車場など市内全域に設けた約五十カ所の「ステーション」にマイクロバスで、毎月一回程度巡回する。巡回の日が楽しみ。

同市服部西町で被災した小学五年男児も「借

岡町図書館 マイクロバス



仮設住宅に本を「出前」

借りる被災者」豊中市の服部緑地住宅で

「動く図書館」で本を借りる被災者

同市立岡町図書館(06・843・455)。

岡町図書館の担当者「震災後、図書館としてできることを考え、十六カ所の被災地に約千二百冊の児童書などを持ち込んだこともある。仮設住宅の巡回は三十分の停車時間だが、読書が心の癒めや励ましになれば」と話している。

問い合わせは岡町図書館(06・843・455)。

パンやお菓子を持ち寄り、コーヒーを味わう住民たち＝神戸市中央区、ポートアイランド第1仮設住宅

モーニングで分かつ安らぎ



ポーアイ第1仮設

「ふれあい喫茶」開店 住民 コーヒーを無料で提供

モーニングコートを隣で築くと、神戸市中央区ポートアイランド第1仮設住宅に七日、住民が運営する「ふれあい喫茶」が開店した。コーヒーを無料で提供する「ふれあい喫茶」は、パンやお菓子を自宅から持ち寄るスタイル。喫茶の専門学校から学びたいす便に、くみかき器や調理器具を揃えている。

喫茶が開かれたのは、入居者の高齢者が多かった同住宅の集会所「ふれあい」で、既に並んで朝食を「センタ」。住民には「長たはうがほしいので

は」と、約一月前から自治会が準備を始めた。本格的な店を「喫茶園の専門学校から震災後に使わなくなった十八畳を借り受け、汚れた床を再生した。コーヒーメーカーで作ったコーヒは無料。今後、持ち寄ったパンを漬くコースターも備え付けたい。

「開業時間」は午前七時から正までで、定休日なし。ウェイトレスはボランティアで、レジ係は住民が担当で、調理はボランティアで担当する。震災前、喫茶店をた

「整備を計画している。要図面による、住宅街に幹線道路を建設することには環境悪化につながる」と、須磨多聞地区の再考、中央幹線、千歳線を沿道の環境に配慮して建設するよう求めている。

また、阪神線などの復興時に、トンネル型運送線や脱線・脱線装置などを設置するほか、大気汚染の風害、千歳線の三線線の建設する予定も示している。

仮設住宅団地に「憩いの場」



仮設住宅の空き室が住民たち念願の「ふれあいセンター」になった＝芦屋市川西町の川西グラウンド仮設住宅で

ふれあいセンター 空き室を衣替え テレビ・電話も設置

朝日960331

仮設住宅の空き室を「ふれあいセンター」に衣替えする工事が進んでいる。仮設住宅団地の敷地に県が「レハブのセンター」を設けたが、敷地の狭い小規模の団地には設置できなかった。入居から二年が過ぎて仮居する人が少しずつ増えてきたため、空き室をセンターに転用することにした。住民は「ようやく憩いの場ができた」と喜んでいる。

仮設住宅の自治会やボラセンター団体などを母体に運営協議会をつくり、十八カ所の団地がセンターの設置を申請した。芦屋が七団地、神戸が六団地、尼崎が三団地、宝塚と明石が各一団地、これで「ふれあいセンター」は、従来型を建設中の団地も含めて、二百一十四カ所になる。改修工事は、隣室との壁に防音パネルをはめ、玄関に手すり付きのスロープを付ける。押し入れやもみろを外して空間を広げたところもある。イベントなどの運営費に補助があり、電話機やファクス、コピー機、テレビなども備わっている。芦屋市では、十一カ所の団地が空き室を自治会の集会所に利用してきた。そのうち、県の条件（五十戸以上）に沿って七団地にセンターができた。川西グラウンド仮設住宅の自治会会長は「ふれあいセンターは、小さな団地ほど住民の『ふれあい』は欠かせない。できれば、五十戸に満たない団地も整備してほしい」と話している。

仮設住宅に小公園



芦屋・高浜町

焼失住宅の跡地を利用

「夏には盆踊りも」

朝日960416

できたばかりの公園で砂遊びをする子どもたち＝芦屋市高浜町で

「場に使えるかも」と住民の期待を集めている。公園は、昨年十一月二十一日、火災にあった高浜町十番仮設住宅（一棟、十三世帯）の跡地にできた。縦四十七メートル、横七メートルの長方形の土地に、七平方メートルの砂場一カ所と花壇四カ所が設けられ、木の切り株の腰

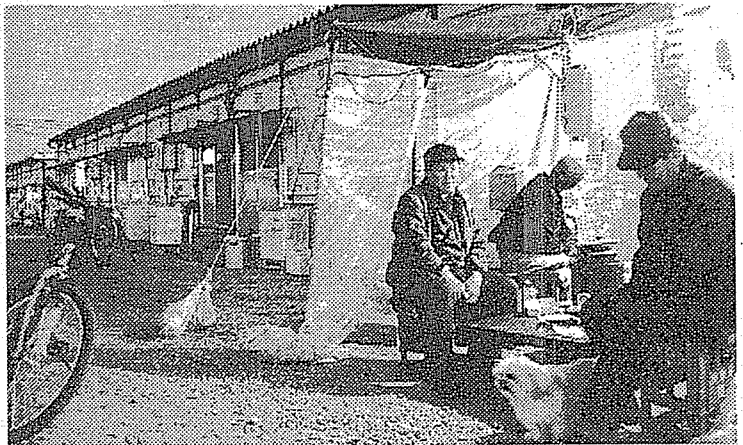
子らは大喜び 住民憩う場に

昨年、火災で焼失した芦屋市高浜町にある被災者用仮設住宅の跡地が、小公園に生まれ変わった。周辺に適当な遊び場がなく、むを得ず車道などで遊んでいた子どもたちは大喜び。親らにも「これで安心」と好評で、「夏の盆踊りの会あり、約六百世帯が入居している。幼児も少なくないが、周辺に公園がなく、仮設住宅の玄関前の砂利道や住宅わきの車道で遊んでいたという。小泉会長は「夏の盆踊りの会場に使用するという案も出ている。花壇に花を植えて、住民みんなの憩いの場にしたい」と話していた。

自由に入れるようになってい。砂遊びをしていた近くの立木舞ちゃんまは「砂場で遊ぶのが山をうけて遊ぶ。さきまかった」といわせき。長男のまを連れて来ていた主婦古塚美千代さん（55）は「これまで子どもを安心して遊ばせる場所がなかったので、よく遊べてくれた」と話していた。

朝日新聞1996.4.16

西神第七仮設住宅にお目見えした仮設店舗。行政は撤去を求め、入居者の憩いの場に
＝神戸市西区で



毎日新聞1995.12.14

6.住宅復興とコレクティブハウジング

震災を契機とした新しい協働居住方式の提案

1.住宅復興の課題

住宅復興の最も大きな課題は、今回大きな被災を受けた「木造賃貸住宅」に居住していた「高齢者世帯の居住の確保」である。①低所得であること ②生活がコミュニティ依存型であること ③施策対象者数が大量であること、など質的にも量的にも困難な課題である。

「神戸市震災復興住宅整備緊急3カ年計画」では ①公営住宅の新規供給戸数を10,000戸と震災前の5～6倍としたこと ②「特定目的借上げ公共賃貸住宅制度」を新たに制度化し被災木賃の再建を推進すること ③住宅市街地総合整備事業による従前居住者用住宅を住宅・都市整備公団、神戸市あわせて7,500戸確保し、特に被災の大きかった地域での低廉な賃貸住宅の供給を図ること、などにより賃貸住宅の戸数の確保を図っているが供給場所・供給時期など、なお大きな課題を残している。特に今後、事業実施段階で「高齢者の大量・高密度居住がもたらす住生活に関する課題」が顕在化してくるものと考えられる。

2.地域型仮設住宅に学ぶ

「協働居住方式」の重要性と有効性

地域型仮設の発想のコンセプトは「学生下宿（土地の有効活用と被災市街地での供給）」と「コレクティブハウジング」（高齢者の集住対応）であった。神戸市の地域型仮設はその供給戸数の多さから「学生下宿」に近いものとならざるを得なかったが、芦屋市のそれは、より「コレクティブハウジング」に近い施設内容となっている。また運営内容も、福祉施設に準じたものであり、居住

者の生活は仮設住宅ではありながら相当落ち着いたものとなっている。少しのハードの違いか適切なソフトのサポートにより非常に大きな生活の違いをもたらしている良い事例である。「協働居住方式」の採用が公的賃貸住宅供給上の多くの課題を解決するキーポイントになる可能性を秘めているのではないだろうか。

3.コレクティブハウジングの導入による

魅力ある都市集住の実現

コレクティブハウジングには2つの効果がある。ひとつは相互扶助によりマイナスの発生をゼロに近づけることであり、2つめは集まって住むことにより「より充実した豊かな生活」を実現できることである。このコレクティブハウジングの特性を活かした取組は、震災対応という緊急避難的な取組からだけではなく、まもなく到来する超高齢社会への基本的・長期的取組としても極めて重要である。現在、日本においてコレクティブハウジング導入の検討は行われつつあるが、本格的に実施されたケースはいまだ聞かない。この段階での公的住宅での先行実施は「モデル事業」にならざるをえないが、反面、モデル事業ならではの取組が可能であるとも言える。実現に向けて各方面からのご支援、ご提案を頂きたい。

(神戸市住宅局住環境整備課鈴木三郎課長)

<参考資料>

i. コレクティブハウジング事業推進 応援団 定期ミーティング議事録

活動経緯概要

◆第1回ミーティング(1995.9.21)

小林氏によるコレクティブハウジングのわが国における実現性、東京都での先進的取り組みや神戸市における研究会の様子などの紹介の後、石東氏により、スウェーデンの現地視察報告(フェルドクネッペン、プレストゴースハーゲン)が行われた。

この後のフリートークで、震災復興まちづくりに関わる人々から、被災地ではコレクティブハウジングがぜひ必要である、手掛けてみたいとの声が多く聞かれた。

◆第2回ミーティング(1995.10.9)

都市計画家以外の考えを聞きたいとの意見を受け、ケア付き仮設住宅の職員ならびに居住者コープ型住宅プランナー、住環境改善のボランティアなどにより、現状報告とコレクティブハウジングに対するコメントを頂いた。また、平山氏より協同住宅の類型化の概説、アメリカ等諸外国のプロジェクト事例紹介があった。

フリートークでは、被災地へのコレクティブハウジング導入に際しての留意点など様々な立場での意見交換がなされた。

◆第3回ミーティング(1995.11.6)

前回に引き続き、医療関係者、仮設住宅支援NGO関係者、大学関係者、プランナー等による活動報告とコメントを頂いた。報告は仮設住宅での被災者の生活実態に重点が置かれた。

フリートークでは、被災者のメンタルケアや福祉制度との関連等が話題となった。

◆第4回ミーティング(1995.12.9)

コレクティブハウジングへの一般への理解と普及を目的として、「防災」国際フォーラムに参加し開催した。パネルディスカッションを使った住まい方紹介と、「応援団」の活動報告を行った。

意見交換では、食事や人間関係など住み手の立場での意見が多く、ソフト面の充実の必要性が示唆された。

◆第5回ミーティング(1996.1.22)

コレクティブハウジング推進の方向性として以下の6項目を掲げるとともに、「応援団」の活動の姿勢として広く訴え続けることを確認した。

1. ライフスタイルの選択肢の1つである。
2. 協同(協働)居住のルールづくりが必要。
3. 食事を核にすることへの検討(賛否)を深める。
4. 同時に食の協同化のメリットについての検討も深める。
5. 被災地ならではの必要性を再認識し、公営住宅での早期実現化を要望する。
6. 「全て失った。でも強く生きよう。」という老人達がコレクティブハウジングを育てる。

◆第6回ミーティング(1996.3.4)

各方面でのコレクティブハウジング実現へ向けての動きを紹介すると共に、ソフト面での取り組みの必要性を再確認し、今後の応援団の活動の方向を確認しあって、第1期応援団活動を終結することとした。

第1回ミーティング 議事録(1995.9.21)

○小林氏のあいさつの要旨

- ・コレクティブハウジングという、ともに住まう居住形態を震災復興にあわせて事業化していきたい。
- ・東京ではすでに事業化への動きが始まっている。
- ・神戸市においても研究会として動き出した。

○石東氏のあいさつの要旨

- ・小谷部育子氏より、この新しい住まい方については前々から聞いていた。
- ・仮設住宅の現状を見ると孤独な生活をされている方々がたくさんおられ、みんなで語らいながら生活すれば生きる希望が湧いてくるのではと感じた。

- ・居住者が、少しずつ面積を出し合って共有ベースを確保し一緒に住まうのがコレクティブハウジングである。
- ・事業の性格から、我々民間では対応が難しいので、ぜひ公的に進めていただきたい。
- ・我々は、様々な面からの検討を進め、事業の実現を早めたい。
- ・コレクティブハウジングは、様々な復興住宅のなかの一つの選択肢として考えている。

○スウェーデンのコレクティブハウジング視察の報告(石東氏)

◇フェルドクネッペン

- ・入居資格は40歳以上、学童期の子供がいないこと。(43戸、50数人が居住)
- ・コーポラティブ方式で5年ぐらいかけて建設、92年より入居開始。
- ・居室は36~76㎡、小さなキッチン、トイレ、浴室が付帯。
- ・共同スペースは、共有ルーム(工作室、図書室等)、厨房、食堂。
- ・夕食のみを一緒にとり、交替で食事当番をする。前日までに食事を注文する。
- ・居住者のなかに栄養士がおり、メニューをチェックする。
- ・メンテナンスも共同で行っており、管理費のなかからペイバックを受けている。
- ・ともに住むメリットは、情報交換、大きな厨房設備が使える、食事の重要性が認識される等である。
- ・年齢層がミックスされていることが重要。

◇プレストゴースハーゲン

- ・賃貸で31世帯が居住。入居資格は特になし。保育所が併設されている。
- ・メリットは、親が忙しくても、子供の食事が必ず供給されること。
- ・1か月に1回の食事当番、1か月に1回の皿洗い当番がある。
- ・共同で住まうことを選んだというより、ライフスタイルの指向からこの住まい方を選んでいる。

◇感想

- ・各戸から少しずつスペースを出し合い、共有のスペースを持つことにより、生活に豊かさをもたらしている。環境負荷の軽減にもつながると思う。
- ・被災地にこのままの形態を持ち込むことは難しい面もあると思う。

◇良いところ

- ・食事を共同化することにより、個人では持ちにくい設備が持てる。
- ・食事の安定的供給。食事を作る楽しみ(みんなに喜んで食べてもらえる)。他人の料理が学べる。共同購入で材料が経済的。男性も料理に興味を持てる。
- ・織物や工作室があることにより、生活が豊かになる。
- ・共同メンテナンスはコミュニティ意識を高める。
- ・水やりや郵便などを気にせず旅行ができるので便利。

○補足(平山氏)

- ・スウェーデンやデンマークなどの事例は、居住者がみな経済的にも豊かであり、神戸に合うのか。居住形態も低密度が基本である。
- ・冬が寒く厳しい環境条件から固まって住文化的土壌があるから成立するのではないか。
- ・北欧は食文化が貧乏な地域だから、共同で食事できるのではないか。
- ・アメリカのホームレス用施設の方が神戸にとって参考になるのでは。

○フリートーク

- ・世代交代はどうするのか。
--視察した施設では希望者が列をなしている状態である。
--日本でもコーポラティブの場合、他の居住者に声をかけてから売却している。
- ・昔の公共住宅は、近所の風呂屋あるいは敷地内に銭湯のあるところもあってコレクティブに近かった。
- ・共同化によるデイケアや保育園等文化的利点をまず考えないと、所有権が前面に出ては事業推進が難しい。
- ・イスラエルのキブツや修道院は、一種のコレクティブハウジングである。京都府の木津町には女子寮と老人談話施設が一体化した施設がある。
- ・高級なタイプと仮設を目的としたケアタイプが必要であ

- る。
 - ・コレクティブハウジングは基本的にはケア無し、あくまでも住宅として捉えるべきである。
 - ・被災者のなかには老人も多いのでケア住宅は必要であるが、コレクティブハウジングとは対応を別にする必要がある。
 - ・相互扶助の精神は、やはり神戸に使えらると思う。
 - ・共同空間はまとまったスペースを確保すれば、使い方は住民の自由でよいのではないか。
 - ・事業化の種はありそうである。地元で説明する紹介パンフが必要。
 - ・ケースワーカー等、建築家・都市計画家以外の意見が欲しい。
- 今回は他業種の人を交えて、もう一度フリーディスカッションを行いたい。

第2回ミーティング議事録 (1995.10.9)

○前回ミーティングの要旨説明

○芦屋市ケア付き仮設住宅の概要説明 (職員：高尾氏)

- ・10/8の神戸新聞に詳しく紹介されたので、興味のある方は読んでいただきたい。
- ・この仮設を施設と見るのか、住宅と見るのかは難しいところであるが、ある人にとっては施設としての対応が必要であるが、そうではなく住宅としての機能だけで生活できる人もいるので、ケース・バイ・ケースで考えた方がよいと思う。
- ・施設の特徴としては、廊下が広いこと、中央に共有スペースであるDK (ガスが使えるのはここだけ) を有していることである。車椅子対応の調理台がある。風呂は大小の2つあるが、脱衣場がやや狭い。
- ・畳の部屋6室に対して洋室が8室あり洋室の方が畳の制限を受けずトイレが広がっているが、畳の方が転がったり這ったり身障者には使い勝手がよいので希望者が多い。
- ・当施設は、単に高齢者用というのではなく、たとえば36才の脳性麻痺の人や軽度の精神疾患の人もおられ、ハンディキャプトの混合型住宅という感じである。
- ・当初入居者間のトラブルはあったが、それほど重大なものではなく相互のコミュニケーションによる理解で解決されている。
- ・欧米のグループホームやシェルタード・ハウジングではこのような混合型のものはほとんど見られない。
- ・ただし、寒暖の問題や音の問題など、今仮設で言われている欠点はそのまま備えている。

○芦屋市ケア付き入居者の感想

- ・入居当初は淋しかったが、長く住むうち快適になってきている。期限がきたらどこへいこうか、隣人と不安を話し合うことがある。
- ・将来仮設を出るとき、同じような形態のところがあればよいと思う。所有のマンションがあるが建て替えを検討中 (時間がかりそう) であり、よい施設があれば権利放棄しようかとも思い迷っている。
- ・食事は、夕食は市福祉公社の給食サービスによる弁当、昼食は月水金に地域のボランティアの方が作ってくれる。便利で栄養面にも配慮されており、一人と違い材料を無駄にしないのがよい。
- ・部屋はベッドの部屋で、震災前の暮らしに比べればよくはないがこんなものと思う。
- ・居住者どうしのつきあいは深くはないが、同じ棟で会えば挨拶する程度には仲良くやっている。料理をしてみんなに配っている人もある。全てを自炊で賅っている人はいないようだ。(高尾氏：市福祉公社の弁当は量が多いので翌日温めたり雑炊にしたりで朝食食べる人も多い)
- ・洗濯は共用の洗濯機を順番に利用している。

○「箕面コレクティブハウス」の概要 (プランナー：伴氏)

- ・「箕面コレクティブハウス」(アルポ---大きな木)は、分譲地におけるコーポラティブ・ハウスとしてできあがった。9世帯のうち11人が女性、3人が男性である。
- ・裕福な女性どうしの高齢者カップルの住まい探しとして始まった。当初シニア・ハウスにいたが不満があり、土地を探したが資金が多いためコーポ形式の話が出た。朝日新聞に取り上げられ、最初60人が集まった。結果

9世帯が残り、厨房等共同施設の話はいろいろ出たが、できあがったのはデッキだけで、老婦人達の施設をみんなが使うことに落ちついた。

- ・コレクティブは分譲では難しいのではないかと思う。賃貸の施設を今計画している。賃貸であればオーナーは住み手に関係なく共有部分をつくれる。また分譲の場合、売却等の将来面で不安を持つ人が多い。
- サービス・アパートについて (ボランティア・ネットワーク：西脇氏)
- ・震災後、住宅に関する応援をいろいろ行ってきたが、実感として人は生きる基盤として住宅がしっかりしていないとだめである。またサービスとは必要とされているものを充足していないとだめである。
 - ・スウェーデン、デンマークのサービス・アパート (所により呼び方は様々で考え方が異なる) を見てきたが、ここには、誰と誰と一緒に住むかから出発するという違いがある。また、多様な年代、身障者と健常者が一緒に住むことがあたりまえである。
 - ・施設の特徴としては、保育、学童保育、役所機能等の社会的サービスとデイケアや高齢者医療等の福祉サービスが複合し、地域の核を形成していることにある。
 - ・北欧でこのようなアパートができた経緯は、サービスの対象者が広いスペースに分散していることなど非効率的なことへの打開策、つまり効率の追求からきているようだ。このような前例から見るかぎり、ケアあるいはサービス抜きにコレクティブは考えられないと思う。
 - ・北欧では公共サービスについて、たとえば住宅は国、医療は県、福祉は市というように責任の所在が明確であり、合理性に根ざした責任所在の明確な土壌がこのようなアパートを成立させる要因になっているのではないか。
 - ・また、たとえばナーシング・ホームであっても日本と違って出入りの自由が保証されており、家族や近隣の人がいとも遊びに来る。サービスが受けやすいことに集合の利点があるのであり、高齢者、身障者、学童、幼児に対するケア・サービス抜きに考えるべきではないと思う。
- 各国のプロジェクト例を紹介 (神戸大学・平山氏)
- ・配布の資料をもとに各施設の特徴を紹介。
 - ・戦前にはいくつかの類型に属するコレクティブのような住まい方があった。海外では宗教やイデオロギーに基づくものがあり、日本では都市において自然発生を見た中廊下型の木賃アパートがこれに近い住まい方である。
 - ・協同住宅の源流
 - ◇宗教ユートピア
 - ◇社会主義ユートピア
 - ◇資本主義ユートピア
 - ◇都市居住様式の自然発生
 - ・協同住宅の類型
 - ◇コレクティブハウジング
 - ▽コレクティブハウジング---建物は組合が所有し居住者は組合の株を持つ。
 - ▽コ・ハウジング---デンマークやノルウェーにあり、前者より規則が緩く思想に基づかない。
 - ▽セントラル・リビング---都市型で高密度な住宅である。(オランダ)
 - ▽コラポラティブ・ハウジング---上記様なものをひっくるめての総称。
 - ◇シェアド・ハウジング---基本的には共用部を持たない。
 - ▽アセサリー・ハウジング、エコ・ハウジング---金持ちの老人が友人に(基本的に)スペースの一部を貸す。本人が離れを建ててそこに住む場合もある。
 - ▽トランジショナル・ハウジング---ホームレスや母子世帯について、居住期限を切って社会復帰を図る。
 - ▽グループ・レジデンス
 - ▽SRO (Single Room Occupancy)ハウジング
 - ホームレス・ホテルを居住用に当てたもの。
- 感想、その他
- ・須磨区・中央区では地域型の福祉住宅は、トイレ、風呂が共同でしかも2階建である。芦屋、西宮がうらやましい。夜はケアする人がなくガードマンのみである。風呂、台所の利用についてソフト面の支援がなく評判も悪い。(垂水福祉施設：服部けいこ氏)
 - ・このような住宅は、復興住宅のモデルとして考えているのか。わたしの実感ではまだまだ個指向が強いように思

われる。(消費デザイン研究所:杉原じゅんこ氏)

- ・長田では高齢者が戻ってこれない現状がある。また、まちの医院はかつての銭湯と同じように住民の情報交換の場であったが、医者も高齢のため帰ってこれない。長田では再開発で高層住宅が計画されているが、1階は店舗にしないでぜひ特養ホームなどにあてて欲しい。(兵庫県保険医協会:柳原ゆきこ氏)
- ・震災の影響やわが国の土壌を勘案した新しいケアを考えると必要ではない。(高尾氏)
- ・住戸は私有財産の頂との考え方が一般的であったが、震災により生活の入れ物としての重要性が再認識された。公共がマンションの一部を買い取り、共用施設として提供してくれるような制度があれば協同居住はより身近になるのでは。(弁護士:長谷川氏)
- ・まず仮設で実験し、本設で実践する事が肝要。いずれにしても急ぐ必要がある。

第3回ミーティング議事録(1995.11.6)

- 長楽地域型仮設の健康・福祉・住宅調査まとめ(神戸協同病院:上田耕蔵氏)
- ・長楽地域型仮設(長田区)におけるアンケート調査結果を基に、入居者の抱える課題を紹介。
- ・寮形式(1室、共同風呂・トイレ)で、相談員1名が平日入居者の世話をしている。
- ・入居者は男性41人、女性60人の計101人で、高齢者・病弱者・低所得者等が多い。
- ・震災後病気の増加や体の不自由さを経験している入居者が、各々3割おり、長期の避難生活が体力を低下させていることがわかる。一部介護の必要なものは一般仮設の2倍である。
- ・気力が起きないなどのうつ症状の人が多く、震災のショックと展望のない避難生活によりなんらかの精神的ダメージを受けている入居者が大半である。
- ・入浴は、手助けを必要とする人もある。ボランティアが手伝える機会をつくっている。入浴頻度の低い人もある。
- ・独居の男性高齢者は、配食サービスが絶対必要である。訪問看護、ヘルパー、デイケアを頼んでいる人が多い。
- ・ほとんどの人は仮設を出るめどが立っていない。元の住居形態は借家が半数近くあり、しかも安い民間賃貸が多かったため、高い家賃への懸念から今後の希望として公共住宅を望む人は少ない。
- ・仮設後支払い可能家賃は3万円以下であり、多少の不満を抱えているものの、4割の入居者が期限(2年)後も仮設に住み続けたいとしている。この中には、持ち家が再建された人も含まれている。
- 仮設住宅の環境について(市川氏:仮設住宅支援連絡会/地元NGO)
- ・内容は、仮設住宅支援ボランティアの連絡会議である。今年5月に結成され、現在30団体が所属している。
- ・現在の課題は、(震災直後もそうであったが)資金面とボランティアをコーディネートする人材がいないうことである。
- ・PRのための全国キャラバンを予定している。震災後の経過が神戸の外に知らされておらず、あたかも過ぎ去って終わったことのようにになっている。継続的な情報の発信が必要である。
- ・仮設住宅は、現在690ヶ所、約5万戸ある。当初は段差、風呂などの使い勝手の問題が多くあった。現在は高齢者世帯への手摺の設置等については申し出れば改善される。少し進展した。
- ・しかし課題はまだ多く残されている。たとえば、欄に手が届かない。同じ形状で自分の家の位置が分からない(凍死した女性がいた)。冬に向けての暖房等(エアコンは全戸ついたが、電気代を考えて使わない人や使い方の分からない人、石袖ストーブの使用、すきま風など)。防音の問題。
- ・コミュニティが崩壊している。第1入居者は高齢者等社会的弱者を優先したために、高齢者が7割の仮設もある。買ひ物が不便なことや近くに知人がいないことから、家に閉じこもりアルコール依存になる人もある。
- ・現在までに孤独死が18件(事故、自殺を加えると23件)出ており、このうち独居の男性が8人いる。

- ・自治会発足の動きが出て、668ヶ所のうち200ヶ所できたが、形だけで必ずしも機能していない。たとえば、車の騒音や駐車の手配が役員に集中する、役員の結束は固いが、構成員以外への配慮に欠けるなど。
- ・神戸市では100戸あるいは50戸に1ヶ所ふれあいセンターを設置するが、運営費(100万円)を自治会の運営に使用したい(仮設の自治会は解散を前提に機能しており、会費の集まりが悪い)。
- ・雲仙の場合は、仮設が解散されるまで4年5か月かかり、島原ではまだある。長引かないよう、公共住宅のビジョンづくりを要望している。
- 小林氏:コー・プラン
- ・1日に仮設とテント村の住民が集まる「市民交流会」が開催される。
- 仮設住宅の環境改善への取り組みについて(大西一嘉氏:神戸大学/志賀咲穂氏:姫路短期大学)
- ・今回の震災における仮設の特徴
- ①大量の住宅が緊急に必要なになった。
- ②郊外や人口島への建設が積極的に行われ、市街地では公共空間が使用された。
- ③高齢者や身障者対象の介護付き専用住宅が設置された。
- ・一般仮設におけるアンケート調査では、全ての人が旧住所市内には入居しているが、近隣への入居は少なく、遠隔地への入居が多い。
- ・仮設住宅に足りない設備としては、エアコン、洋服ダンスなど以前の家から持ち出せなかったものが多い。
- ・周辺に欲しい施設は病院、スーパーなど生活関連施設が多い(郊外の不便などところにあるため)。また、役所からの情報が少ないと言った不安も多い。
- ・施設については、防音や設備の使い勝手などが問題である。
- ・姫路の玉出団地のアンケートでは、遠隔地の仮設は当初否定的な声が多く聞かれたが、実際の入居者はそれほど大きな不満はないようである。(よかった、まあまあ71%、とても不満12%)
- ・玉出団地は、ニュータウン開発地であるが、交通の便が悪く未入居が多いため仮設用地が確保できた。(加古川は徒歩5分であるが、高齢者優先入居で高齢化している。)
- ・生活利便に対しても、こまらぬ42%、しかたない30%であきらめもあるが、大きな不満は少ない。
- ・期限後については、出られる21%、めどがたない47%、いすわりたい10%であり、住居の形態は再建19%、民間賃貸26%、公共住宅41%であった。希望地は、前住地54%、市内23%、市街でもよい23%で、前住地への希望は約半数にとどまっている。
- コレクティブハウジング応援団が仮設住宅の住環境改善を考える(安原秀氏:ヘキサ)
- ・今のままでは、なかなか住環境改善への視点が高まらない。視点を高く保つ必要がある。
- ・仮設は、終の住居になってはならないが、住環境改善の視点は、普通の生活における問題点として考える必要がある。
- ・コレクティブハウジングは、まず仮設等で検証し本設に反映する必要がある。
- ・改善点は、コミュニティの場づくり、住戸改善、ルールづくりであり、他の活動との連携が必要である
- ・応援団の取り組みとしては、可能性の限界の見定めを慎重に行い、進める必要がある。
- 質問コーナー
- Q:(大西氏→上田氏)うつ症状が4割というのは多いように思うが、仮設の中でのコミュニケーションはどうなっているのか。
- A:隣のおばあちゃんにかゆを作ってあげたりなど、交流はあるようだ。
- Q:あちこちから入居しているのか。
- A:よく調べていないが、長田区内の人がほとんどだと思ふ。
- ・(石東氏)何かアイデアとか提案といったものを頂きたい。
- ・(上田氏)福祉施設ということであれば、(地域型)ケアハウスに相当する。条件もケアハウスに近いものである。

- ・民間型も考えられると思うが、地域型では相談員を付けており、その費用は年間500万円になり、負担できるかが問題。
- ・地震のおかげで既成事実ができた。元に戻ることはないと思うが、今後どう発展していくかが問題である。
- ・厚生省も注目しており制度ができていこう（高齢者グループリビング支援事業/来年度から）。
- ミニ・コレクティブハウジングの供給が始まっている（石東氏）
 - ・スライドによる施設紹介（岡山県サニーハウス鴨方/奈良民間グループホーム/芦屋ケア付き地域型仮設住宅）
- 環境改善のスライド（大西一嘉氏：神戸大学）
 - ・一般仮設における環境改善
 - ・メキシコ、アルメニア等外国の仮設住宅の紹介。
 - ・アメリカのトレーラーハウスの紹介。
- 生活クラブ住宅相談室のコレクティブハウス研究会（鈴木洋子氏：コープこうべ）
 - ・経緯の紹介
 - ・事例視察やセミナー、交流会、情報発信など活動報告
 - ・参加者、運営、理念について

第4回ミーティング議事録（1995.12.9）

- くらし再建「いま」見すえて～市民とNGO「防災」国際フォーラム～への参加として開催
- ロビーにコレクティブハウジングの事例と仮設住宅の住環境改善アイデアについてパネルを展示
- 石東氏：コレクティブハウジングとはどんな住宅、住まい方について説明
- 小林氏：これまでのコレクティブハウジング事業推進応援団の活動報告と今後の活動展開について説明。当面の活動としては、普及活動と仮設住宅での住環境改善に取り組もうとしている。
- 鈴木氏：普及活動グループとして一般向けパンフレット（案）を作った。その説明。
- 小林氏：専門的パンフレットの作成を考えており、その目次の説明。
- 出された主な意見
 - ・パンフレットは対象者別のがほしい。事業者対象、木賃住宅の建設事業者対象、住み手対象など。
 - ・コレクティブハウジングとは何かはまだはっきりつかめない。食事の共同化はしんどいのではないか。
 - ・コーポラティブと区別して推進するという意味では賃貸がいいのではないか。
 - ・食事の共同化を要に打ち出すのは日本では難しい。おふくろの味の環境で育ってきた者としては。
 - ・食事の共同化はメニューの多様性がないので、自由が奪われる。
 - ・洗濯機は他人の下着を洗った後ではイヤだと思う人もいる。共同洗濯室は使われないだろう。
 - ・共用部分は自分の家でないので、汚く使う。
 - ・廊下を広くとって、そこに本箱などを置き、共用スペースとするのがいいのではないか。
 - ・面積的に余裕がないのに、そこに共用スペースとしての余裕を作るのは矛盾している。
 - ・コレクティブの究極の概念は相互扶助ではないか。ネーミングもそのような意味を持ったものがいい。
 - ・変則的な家族（例えば、高齢者、母子家庭、独身者など）を対象とした住まい方としてはニーズがあるだろう。
 - ・ソフトのシステムを組み込む必要がある。
 - ・老後に対する不安をどこまで期待できるのか。北欧はベースに福祉が充実しているので相互扶助もできる。日本風にアレンジしていくことが必要。
 - ・食事のメニューも老人から子供にも合うメニューがいる。
 - ・協同生活の義務を負うものはやめた方がいいと思う。自分の生活をプラスするもの（ダンスなどの活潑な動、図書室や編み物などの誰）と生活補完型（住戸面積の補完など）とが望ましい。
 - ・なぜ住棟内だけの共用なのか。下町では地域の中で共用していた。パブリックがあったからこそ住戸の面積が小さくてもすむ。
 - ・コーポラティブの典型的なものだと思う。被災地での災害公営住宅の面積がどんどん小さくなっているが問題で

ある。共用スペースを取っておくことが必要。しかし、実際の機能としてはトランクルームぐらいではないか。共用の厨房を用意しておくことは必要。不特定多数の人がコレクティブにはいるとは考えられない。

- ・仮設住宅は手を入れて（住環境の改善）いいのかどうか、分からない。早く引き払うようなことが必要なのではないかとも思っている。
- ・ゲストルームがあるというのは、いろいろ便利。ロビーがあることも便利。集会所も必要。

○まとめ（石東氏案）

1. コレクティブハウジングはライフスタイルの選択であり、このような住まい方を必要とする人、賛同する人に提供されるのであって賛同しない人が無理に住む（住まわされる）住宅ではない。
従って、本日出された意見の中で、否定的な意見はあまり気にする必要がない。
2. 協同（協働）居住のルールは、居住者同士が決めていくことが大切である。そのための協同居住の学習と協働のトレーニング、協同生活運営の規則づくりなどの期間とアドバイザーが必要であろう。
3. 食事を共同化する事への否定的な意見が多かったが、北欧の事例として食の共同化を核にしたものが紹介されているのが多いが、北欧の場合でも食事は必ずしも中心的な協同生活とはとらえていない事例も多い。ディナークラブを作って、自由に参画しているケース、週2回程度の夕食のみ協働チームでやるケース、レストランなどの外部の食事サービス機構を連携しているケースもある。
4. 「日本的な食文化からみて食事の共同化は難しい」という（否定的）意見があるが、これは実際に食事作りに苦勞していない人（誰かがいつでも用意してくれている人など）であろう。自立して生活するという姿勢ではなくて、誰かに支えてもらって生活する視点である。あるいは、食事にあまり関心を持っていない人、反対に自分の食事にすごくこだわっている人かもしれない。
しかし、ひとり暮らし、小家族、男女協業家族では、週のうち何回かの食事の共同化のメリットは大きい。
5. 今、被災地ではひとりで生活しなければならない人が多い。生活をシンプルにして、相互扶助をしながら安心できる心強い生活を望んでいる人が多い。
《いつでも誰かに会えるし、いつでもひとりになれる》、《集まって住む安全性と安心感、集まって暮らすことの楽しさをもつ》、《共に住む、共に生きる、共に創る、相互扶助の暮らし》というコレクティブハウジングは、高齢者、ひとり暮らし、単親世帯には特に適した暮らし方である。
仮設住宅の多くの高齢者が災害公営住宅に移り住むことになるが、そこでまた、孤独死や生きる気力を取り戻せずに自殺していく人が続出するようなことが繰り返されないために、簡易型コレクティブハウジングであっても、まずは公営住宅での早急な実現が望まれる。そこから本格的なコレクティブハウジングが、公的住宅や民間住宅にも芽生えていくことになるだろう。
6. 被災した人たちは人間が変わった。変わって、新しい生活をしようとしている人が多い。大震災は新しい暮らし、人間関係を考えていく一つの大きなきっかけになった。辛い体験であったが被災地からコレクティブハウジングが育っていく機運がある。（年末に長田区の仮設住宅居住の高齢者との座談会をもった。そこで強かにいきようとする方々に出会い、明るい気分になった。

第5回ミーティング議事録（1996.1.22）

○経過説明（石東氏）

◇本日の資料説明及び第4回を含む最近の活動報告

◇第4回ミーティング等で交換された意見について

- ・否定的な意見が多く、多くの理解を得るために説明（言い訳）に苦慮した。
- ・その後、長田区の仮設の説明会（前向きな意見が多かった）のとき、否定的意見に対するおばあさんの一言「いやなら入らんでエエやんか。」によりコレクティブハウジングの姿勢（全ての人の理解を得る必要はない）を再確認した。
- ・この認識を踏まえて、コレクティブハウジング推進の方

向性として6項目が説明された。

1. ライフスタイルの選択肢の1つである。
2. 協同（協働）居住のルールづくりが必要。
3. 食事を核にすることへの検討（賛否）を深める。
4. 同時に食の協同化のメリットについての検討も深める。
5. 被災地ならではの必要性を再認識し、公営住宅での早期実現化を要望する。
6. 「全て失った。でも強く生きよう。」という老人達がコレクティブハウジングを育てる。

◇他地域の例について

- ・南森町で働く女性たちのためのコレクティブハウジングづくりが進められている。
（保育所の経営者が中心となって、保育所を核に施設を計画している。）

◇コレクティブハウジングの事業化への可能性（天川氏）

- ・芦屋市大原町に住む高齢の女性から、個人住宅を賸い付きの老人住宅に建て替え経営したい意向を伺い、相談を受けた。
（立替は3年後を予定。彼女は今までの経験から自然と、コレクティブハウジングのような住まい方が最適と思ったようで、コレクティブハウジングの可能性に自信を持った。）

○新メンバー自己紹介

◇出席者のひとり

- ・会社を定年退職して約1年、現在ひとり暮らし。震災まではひとり暮らしの気軽さを大事にしていたが、震災により怖さを感じるようになった。当面は元気なので人の役に立ちながら、将来のことも考えられればよいと思う。コレクティブハウジングに対して大きな関心を持っており、これからも活動に参加したい。

○淡路島の事例（小林氏）

- ・淡路島の津名町では、数人の老人が将来一緒に暮らすことを考えている。旅行やこれからの生活の備えとして仲間同士で貯金をしている。
- ・仮設住宅が、集落の中あるいは隣接して建設され、知人が近くにいるため離れたがらない人も多い。埋立地の仮設では商業核も隣接し、神戸の仮設住宅よりもむしろ便利である。
- ・いずれも小規模なものが多い。
（石東氏）

- ・仮設の規模が小さくて問題の所がある。5戸一かたまりぐらいの仮設住宅の場合、住民のつながりは強いが、地域の厄介者にされている事例もある。
（野崎氏）

- ・かといって、大きすぎると仮設内のもめごとが絶えない。

○自由討論

◇コレクティブハウジングの被災地での実現性について（石東氏）

- ・現在のところ難しいようだ。行政側には、研究会等姿勢づくりはできているものの、行動は起こされていない。また、ルールづくりなど解決すべき問題が山積し、行政は需要を計りかねている。

◇補助の問題

- ・共同部分への行政からの補助金をいかに得られるか。これに、例えば集会所を付設することなどして公共性をもたせて補助を得る方法もあるのでは。（石東氏）
- ・優良（一定の戸当たり面積を確保）建築にしか補助がないのがネックである。（小林氏）

◇コレクティブハウジング実現へのソフト面の支援

- ・グループづくりの支援、運営の支援等が必要である。

◇ハード面の支援

- ・長屋等の既存の建物を利用してコレクティブハウジングにすることが考えられる。（小林氏）
- ・仮設住宅をコレクティブハウジングに転換するには、制度上の制約があるようだ。（小林氏）
- ・社宅や寮等も考えられるのではないか。

◇貸す側、借りる側

- ・コレクティブハウジングを民間借家で実現する場合、貸す側は、維持・管理面でメリットがある。住み手側は、震災の恐怖から、一緒に住もうと考える人も増えたのでは。（石東氏）
- ・大地主は損をする事業でなければ賛成すると思う。住民が維持管理に責任を持つならば可能性は高いと考えられ

る。震災前の住民を憂慮している地主も多いと聞いている。（小林氏）

◇コンサルタントの役割

- ・主張し続けることにより、実現へ働きかける。（石東氏）
- ・まず前段階として、モデルをつくることができれば望ましい。また、仮設住宅の住環境の改善策の一つとして、空いてきた仮設住宅にコレクティブの要素を取り入れる。（石東氏）
- ・仮設を利用するのは制度的には難しいが、オフィシャルにしなければ十分可能である。（小林氏）

◇仮設住宅の今後の動向について

- ・被災者の60から70%の人が、公営住宅への移転を希望している。（石東氏）
- ・高齢者が集中してしまった過去の経験を踏まえて、公営住宅への入居は地域優先になるだろう。しかし、兵庫県が一元管理しているので、どの地域から始めるか決定困難。（小林氏）
- ・公営住宅へと希望している人たちは、個人の住居を再建できない人々なので、自然と高齢者など社会的弱者が集まってしまふ。従って、公営住宅でのコレクティブハウジングの供給がより必要とされる。（石東氏）

○パンフレットについて

- ・執筆担当分担

○その他

- ・次回をもって第1期最終回とし一応の区切りとする。
- ・生け垣など園芸のコンサルタント派遣について。地域で開かれる住民との話し合いの場を積極的に活用して生け垣などについてのアドバイスを行っていきたい。（林氏）

第6回ミーティング議事録（1996.3.4）

○各方面でのコレクティブハウジング実現へ向けての動きの紹介

- ・兵庫県営住宅
- ・神戸市営住宅（真野地区）
- ・民間 明石風呂屋
津名町
南森町SHIMANTO
芦屋グループホーム（市川さん）
コープこうべ

- ・住都公団

○ソフト面での取り組みについて

- ・L S A
- ・グループリビング制度
- ・仮設住宅での実績
- 今後の当応援団の活動についての確認
- ・パンフレット作成
- ・コンサルタント派遣
- ・随時ミーティング

■阪神復興に向けて — 私の提言

○石東・都市環境研究室 石東直子

「進みはじめた復興まちづくり

……ハードな計画に偏りすぎているのでは」

被災地域での復興計画が始まっている。「きんもくせい創刊号」にも被災都市でスタートした復興まちづくりの地区名が記されていた。被災地区の人々にとって一刻も速い復興建設は切望されるどころであり、それに応えて支援コンサルタント等によるプランづくりが急務として夜を徹して進められている。一方、従来の都市防災計画の予想をはるかに越えた大地震を経験して、新たな視点を考慮した都市防災計画の立案も進められている。いずれもこの機にあって急務のものである。しかしマスコミ等の情報やプランづくりに参画している知人の話から感じるのは、余りにもハードな物づくりのプランに偏りすぎているきらいがあるように思われる。

ここに胸痛むひとつのデータがある。この度の震災で犠牲になった5,300人を越える死亡者の52%が60歳以上の高齢者である。この数値は激震地区が神戸・芦屋・西宮に至る各市の下町を総なめにしたことから当然の結果の数値として現れたものである。高齢者は心身状況が弱体化しているので多くの死亡者が出たというものではない。予想を越える大地震だったから不可抗力だったと言えるものではない。都市の下町には、今からもう30年以上も前になるわが国の高度経済成長期に建てられた安普請の過小な木造アパートや文化住宅が老朽化したまま多く残っていた。そこには、ひとり暮らしのお年寄りや、老夫婦が住み続けている。お年寄りたちは階段の上がり降りが堪えるので一階の部屋に住んでいる人が多い。それらの住宅が全壊し一階に寝ていた人が犠牲になった。高齢者をはじめとする社会的弱者の安全な暮らしが保証されていなかったのである。

西宮市内の建物被害状況調査で現地に出ると、住宅地図では木質アパートや文化住宅として記されているが、建物全体がぐしゃぐしゃに押し潰されて従前の様子が分からない状態にまで倒壊してしまった住宅が多くあった。その瓦礫の山のそばにそこで亡くなった人たちへのお花が供えられている場面をしばしば目にした。涙が噴き出る調査であった。このような住宅を含め被災した住宅は143,000戸に及び、避難者は30万人にもものぼる(2/16現在)。まずは住宅再建が緊急課題である。どこに、どんな住宅を、どんな手法で建設して行くのか、新たな発想が必要であり、今までのまちづくりとは大きく視点が異なるはずである。恐怖を体験した人達が長い時間はかかるけど心を癒されて行くような暖かさ、安心、やすらぎの仕掛けを内在した復興プランであってほしい。そのためには急いでハードを重視したプランは描けないはずである。市民福祉の視点を中心におき、地元商店街や市場の復興にも小規模単位であっても

できるかぎり地域に住んでいた人達の住宅を付設したり、一気に完成図を目指さないで、段階的に復興建設していくようなプランも望まれる。そして今までハードなまちづくりに関与することが少なかった役所の福祉部局や市民生活部局、お医者さんたちももっとまちづくりに積極的に大きな口出しをしてほしい。アイデアを提供してほしい。避難生活の中で芽生えた共に生きる、共に支えあって生活するというライフスタイルが、育っていくような仕掛けをもつ生活環境が整備される絶好の機会にしたい。

例えば、数軒単位の共同建設や、今行政が建設している応急仮設住宅ではなくて、3年か5年位住めるような住水準を備えた一時的住宅も建設し、その後の状況に応じて用途を変えたり、更に住水準を高めていけるような住宅の建設はできないだろうか。27㎡ワンパターンの応急仮設住宅に入居が決まったお年寄りの中には一人で住むのが不安だと言っていた人もいた。ひとり暮らしのお年寄りや老夫婦が仲間同士集まって住めるような住宅が市場のそばにでもできないだろうか。お昼ご飯は市場で働く人達も一緒にできるような食堂があれば楽しいだろう。

弱者に集中して多くの死亡者が出たのは誰の責任だとは今、言及したくないが、私たちまちづくりの専門家も含めてそれに対応する側に責任のすべてがかかっていたと思う。予想を越える大きな天災だったというが、社会的弱者に対しては人災とも言える側面も大きい。(2月16日記)



きんもくせい

発行:阪神大震災復興
市民まちづくり支援
ネットワーク事務局

■生きる気力を取り戻すために、 高齢者等が共に生きるコレクティブハウスの供給を (その1)

石東・都市環境研究室 石東 直子

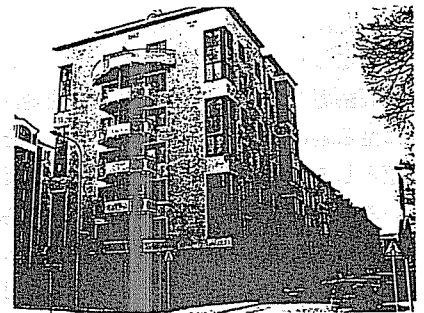
大震災から半年が経った。一瞬の偶然で生きながらえた貴重な命なのに、その後の仮設住宅の生活で孤独に死んでいく一人暮らしのお年寄りが後を断たない。生きる気力を失って自ら貴重な命を断ち切ってしまう人も出ている。せっかく生きながらえた人達の命を大切に、生きる気力を呼び戻すのが、無念にも命を奪われて逝った6,000名以上もの人達への供養でもある。

<毎日新聞によると1995年7月15日現在で、仮設住宅での孤独死は8名、自殺者は26名。自殺者の7割近くが55歳以上の中高年者であるが、それらの人数はさらに多いという情報もある。また、震災による直接被害の死者と関連死の人の合計は6,038名である>。

被災した下町に住む人達の多くは他所へ移り住んでは生活できない居住地限定階層である。特に高齢者は長年住み慣れた地域から切り離されては生きていけない。高齢者が生きる気力を取り戻せるような住宅の供給が必要である。仮設住宅の建設は入居者と立地場所、住戸形式のミスマッチという決定的な問題を持ってしまった。仮設住宅の入居者が恒久住宅としての震災復興公営住宅に移り住む時、また二度目のミスマッチを犯さないためにも、仮設住宅供給の問題点をしっかりと把握する必要がある。既に周知のことであるが、主たる問題点をあげると、高齢者は長年住み慣れた地域から切り離されて住めないということ。住戸の供給とともに日常生活に必要な居住環境条件の供給が求められる要件としてあるということ(例えば、身近な日常品商店、医院、銀行、郵便局、交通駅等)。しかし、市街地での用地確保の難しさから、多くの仮設住宅はこれらの点が配慮されず、遠隔地に大量建設された。住戸形式の問題では、今まで下町の長屋やアパートに住んでいた人達は狭小で老朽した住まいであったが、近隣の人達との触れ合いがあった。地域で育まれて生活が成り立っていた。それがバス、トイレ付きの2Kの仮設住宅に移り、居住水準は上がったように見えるが、隣同士の人との触れ合いは失われた。高齢者、障害者、母子家庭等の優先入居を採ったのに、居住者に対応した最低限のバリアフリーも配慮されていない。トイレへの段差が30センチもあり、浴室の手摺りもない。出入口に軒の庇もない。恐怖を体験した後では、ひとりで住むのが不安である。怖いと訴えている人も少なくない。

今後、多くの人々が仮設住宅から恒久公営住宅に移り住むことになる。その時また、同じミスマッチを繰り返さないために、コレクティブハウスの供給を提案したい。生きる気力が失せて将来の生活に不安をもつ高齢者等は、とにかく毎日の人との触れ合いとおしゃべりが必要である。

●海外のコレクティブハウスの例
-フェルドクネッペン(スウェーデン)



施設の外観。ストックホルムの旧市街地に立地する



コモンドライニング

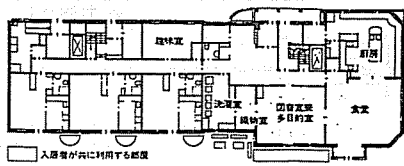
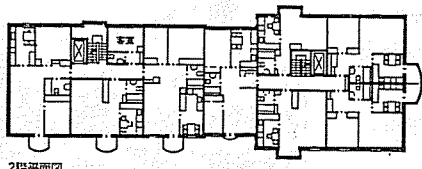


多目的室にある図書コーナー。奥に見えるのが
コモンドライニング

名称:コレクティブハウス・フェルドクネッペン
戸数:43戸(36~76m²)
規模:地下1階、地上7階
共用室:食堂、厨房、多目的室、ランドリー、木工室、サウナ、写真暗室、ルーフテラス、ゲストルーム、事務室
入居年度:1993年
所有形態:賃貸
運営主体:居住者組合フェルドクネッペン

コレクティブハウスとはコ・ハウジングとも呼ばれる協同居住型集合住宅で、北欧諸国ではあらゆる世代を対象に、住宅政策の中に位置づけられて供給されており、高齢者用のコレクティブハウスもある。数世帯から20世帯位が集まって、共に生きる集合住宅での住まい方である。各々の世帯は居室とトイレ、浴室（またはシャワー）、キッチンを持ち、住宅としての個人の自由とプライバシーの確立はなされているが、共同の大きな台所、食堂、居間、応接室、洗濯室、浴室等々がある。生活の共同化とそれに必要な機能とスペースの共有化である。生活の共同化（例えば食事等の家事の分担）の程度は、居住者同士の取り決めでさまざまなパターンがあるが、それぞれ独立した住戸で暮らしながら、COMMON ROOMを核に共同生活が展開されることにより、安全性、一緒に住む楽しさ、心理的な安心感が生まれることのメリットがあげられている。

高齢者等は住み慣れた地域に戻って気心知れた人同士と一緒に住めるのが一番いい。ひとり暮らしには8帖程度の居室にトイレ、浴室（またはシャワー）、キチネットとたっぷりめの押し入れを、二人、三人世帯は2居室を持ち、後は上述したようなCOMMON ROOMがあればいい。最低限の共同生活のルールを供給主体が示し、後は居住者相互で助け合いながら生活していくルールを作っていく。元気な人、体力的に弱い人、それぞれ得意の分野を分担して、生活を営むようなルールが必要である。



入居者が主に利用する部屋
地域住民が利用する部屋 (以下同じ)
1階平面図

*写真、図面は小谷部育子氏（日本女子大学助教授）より提供

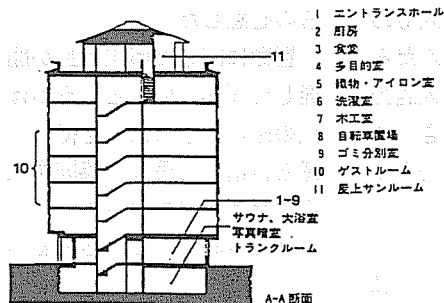
見知らぬ人同士が住みはじめても大丈夫。共同生活スタイルの特定目的の住宅ということで募ればいだろう。もちろん高齢者に絞る必要はない。多世代の家族が集まって住み、世代間交流があれば、生活はより楽しい。

神戸市が復興のシンボル事業と位置づけた「神戸市東部新都心」は高齢化社会に配慮したモデル都市として期待されている。然らばコレクティブハウスの導入は不可欠のはずである。

公的住宅での供給だけでなく、特定優良賃貸住宅制度の特目住宅での供給も考えられるし、民間でのシニアコレクティブハウスのグループ建設も可能性はある。今、震災を体験して、共に生きるという気運も高まっている。下町に人を呼び戻すためには、まず商店街や市場の復旧が必要であり、その際にも小規模単位のコレクティブハウスが建設できるような公的助成制度を創設してほしい。日常生活に必要な施設がセットで供給されれば、生きる気力は取り戻せる。

実現までにはクリアしなければならない検討項目が幾つもあるが、仮設住宅での悲劇を繰り返してはならない。

具体的なモデルは、北欧のコレクティブハウスに止まらず、お隣の中国で古くから続く伝統的民家、客家の集住体の住宅（円楼や方形住宅等）、わが国のグループホームの住宅形式にもそのアイデアとイメージを見ることができ。 <1995年7月17日 記>



■ コレクティブハウジングが根づく確かな芽が育まれつつある (その2)

＜ 芦屋市ケア付き仮設住宅訪問記 ＞

石東 直子 (石東・都市環境研究室)

「今、この仕事をしていて、本当に楽しいよ」と、のっけから市川禮子さんは言う。

7月末の炎天下、芦屋市呉川町のケア付き仮設住宅を訪ねた。ここ呉川町には8棟(95戸)の仮設住宅が軒を接して建てられている。その一角の3棟がケア付き仮設住宅で、平屋建ての1棟に14人(14居室)が共に住まうコレクティブハウジングである。わが国ではケアを必要とする人たちが共に生活する場をグループホームと呼び、福祉施策にもり込まれた施設だが、北欧諸国のコレクティブハウジング(多世代の多様な家族が集まって住む共同住宅)の親戚みたいなものである。

(芦屋市では呉川町の3棟と高浜町の1棟のケア付き仮設住宅の運営を、「尼崎喜楽苑」の市川禮子苑長に委嘱している)。

1居室は16m²の広さで、6帖(和室と洋室があり選べる)にトイレと洗面スペース、押し入れ、ゆったりした入口スペースである。それに14人の共同生活のためのダイニングキッチン(約45m²)、2つの浴室と職員詰所がある。

一人に一室なので二人世帯の場合は二室が使える。居住者の多くが住宅が全壊し、長時間倒壊家屋の下に埋もれていた人たちで、極限の恐怖を体験している。中には、1938年の阪神大水害と第2次大戦をも体験している人もあり、「わたしの一生は何だったんだろう」と呆然としていたという。入居当初は話を始めると、すぐ涙がふきでくる人たちがばかりで、生きる気力もなく一日中自室に閉じこもりがちの人も多かったそうだ。

市川さんをはじめとするスタッフ13名が、昼間は各棟に1~2人、夜間は4棟で2人になって、24時間勤務している。スタッフの主な仕事は、入浴介助などを必要とする人の手助けで、通常は目配り、気配りでもって話し相手や生活相談にのり、買い物や通院への付き添いなどと、てんてこ舞いである。食

事は原則として自炊ということだが、希望者には月、水、金の昼食づくりはボランティアの支援があり、居住者やスタッフも一緒になって食事を作る(居住者は食材の実費を負担する)。夕食は31人が芦屋市福祉公社の配食サービスを利用している。スタッフは、居住者が生きる気力を取り戻すために何をしたらいいか頭を痛めているというが、時間が経つにつれて、気力の蘇りを確実に感じているという。各室に閉じこもりがちだった人が、談話室に出て来て交流することにより、入居当初ひどかった精神障害が落ち着き、ここまで良くなると思わなかった程に快方に向かっているという。また、沈みがちの日々を送っていた人が、夕涼みパーティの後、「わたし自分の家を建て直すわ」と言い出し、皆を驚かせたという。刺しゅうの得意な85歳の婦人は見事な作品を仕上げ、額に収め談話室に飾った。市川さんは浴室の前に吊るすひの暖簾の制作を頼んだ。

わたしが訪れた木曜日は、特別のボランティアが来て、ザルソバ、わらびもち、煮豆の昼食を全員のために用意された。自室で食べる人、食堂でみんなで一緒に食べる人、好き好きである。かいま見た居住者たちの生活の一部であるが、共に住まうという楽しさと安心感、人に対する優しさが育まれているのを感じた。

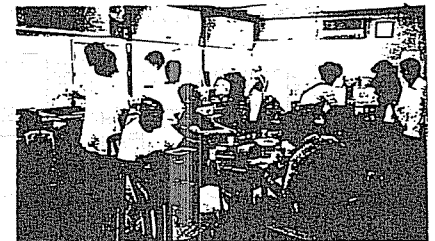
冒頭に記した市川苑長が開口一番に発した「楽しい」というのは、協同居住の確かな手ごたえを得ることの充実感と自信だと思ふ。協同居住の確かな手ごたえが日を追うごとに、居住者の生活に現れてくる。居住者の多くは避

難所や福祉施設の一時入所、一般仮設住宅、親戚宅などから移ってきたが、ここに入居してみたら案外このような住まい方もいいものだ実感しつつあるという。

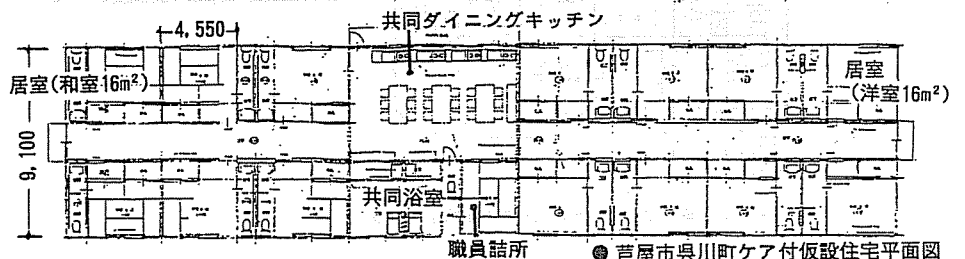
このケア付き仮設住宅の入居対象者は、入浴、炊事、衣服の着替えなどに一部の手助けを必要とする程度の高齢者であるが、一般の仮設住宅も同様な手助けを必要とする人は少なくない。また身体的に元気であっても、生きる気力も失せて途方に暮れている人、将来の生活に不安を持つ人が多い。仮設住宅の中で孤立無援の状態におかれていることが一番つらい。生きる気力を取り戻すには、この共に生きるコレクティブハウジングの住まい方が適しており、日本の土壌にも育まれつつあることが、ここを訪ねて実証された思いである。それぞれ独立した住戸で暮らしながら、コモンルームを核に協同生活を展開していくことは、安全性、共に住む楽しさ、心理的な安心感が生まれる。

わが国にも少し前から北欧のコレクティブハウジングの先進事例が紹介され始め、そのニーズの社会的気運も出てきつつあるが、震災というつらい体験を得て、そのニーズの加速度が増したといえよう。

今、阪神間の復興まちづくりのために、コレクティブハウジングを供給する時が来た!(8/20記)



● 共同リビングでの昼食



● 芦屋市呉川町ケア付仮設住宅平面図

ミニ・コレクティブハウジングの供給が始まっている (その3)

<岡山県サニーハウス鴨方～ひとりぐらし高齢者協同居住～訪問記>

石東 直子 (石東・都市環境研究室)

●岡山県は1994年度に「ひとりぐらし老人共同生活支援事業」を創設し、事業を実施する市町村に、施設及び設備、並びに運営に要する費用の補助を行っている。94年度に4地区(入居開始)と95年度に2地区(計画中)が事業化されている。県は事業の背景として、ひとりぐらしの生活は淋しさ、孤独感、急病や事故等の緊急時の不安や、食事、風呂等の家事や、家屋を維持するための労働的、経済的負担が大きい。これらを支援するためにホームヘルパー派遣等の支援事業があるが、加えて、高齢期における生活の仕方を選択肢のひとつとして、地域のふれあいの中で、一つ屋根の下で互いに助け合い共同で自立した生活をするにより、ひとりぐらしの淋しさや不安、負担の大幅な解消を考えた。大字位の顔見知りの範囲を対象とする。

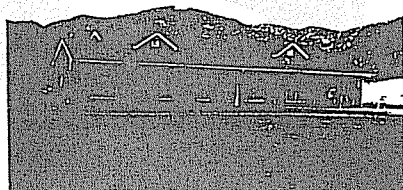
●共同生活施設の内容は、概ね6人程度の協同居住で、プライバシーが確立した居室と共同スペース(厨房、食堂、談話室、浴室、洗濯室、倉庫等)があり、空家等利用型と小規模ホーム新築型ある。既に入居が始まっている4地区の特色は次のようである。

加茂町は、豪雪地であり、特に冬季における共同生活にメリットがある。料理教室等を実施して、地域の高齢者との交流を図ったり、園芸作物の共同栽培を行う。夜間を中心に共同生活をし、昼間は気ままに自宅と行き来する。

中央町は、旧村の中心地で、役場支所、駐在所、郵便局に近接し、診療所と一つの建物として整備。両山寺の参拝客等を対象に特産品の生産、販売、観光案内を行う。

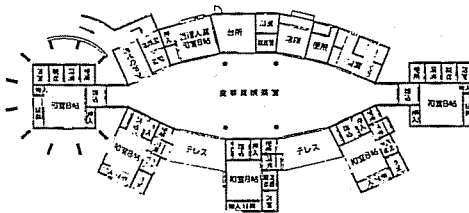
川上町は、高齢者福祉のむらづくり

●サニーハウス・鴨方



外観

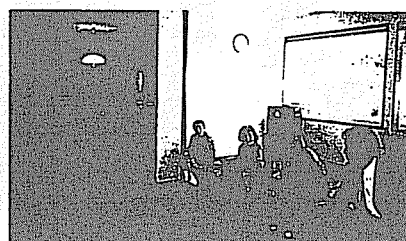
事業の一環として取り組み、入居者を地域ぐるみで支援する。生活しやすい楽しい建物(下図)。ゲートボール場や家庭菜園も整備。夜間を中心に共同生活をし、昼間は自宅と行き来する。



「しあわせ荘」平面図

鴨方町は、都市部におけるひとりぐらし老人に対するモデル施設として整備し、全町を対象とする。地域の高齢者と座談会、ゲートボール等による交流や野菜の共同栽培を行う。

●10月半ばすぎ、サニーハウス鴨方を訪ねた。鴨方町は倉敷市からJR山陽本線で西へ20分、福山市にも近く、両市のベッドタウンとしての性格もあり、人口は2万人強である。建物はレンガ色の平屋(建築面積約360m²)で、内部は南側に6つの居室が並び、幅広い廊下をはさんで北側に共用スペースがある。居室は25m²程度で6帖の和室と広縁にキチネット、便所、押入れ、床の間がある。共用スペースは、厨房、台所、畳コーナーをもつ交流室、風呂、洗濯室、倉庫、援助者室、玄関ホールである。一人当たり面積は約60m²である。女性3人と男性2人が住んでいたが、つい先だって89歳の男性が引越して行かれた。高齢のため共同生活の役割分担に負担を感じるようになったという。ここでは一人で食事当番と一週間を通しての掃除当番を分担していたが、一人が引越せられた後、食事

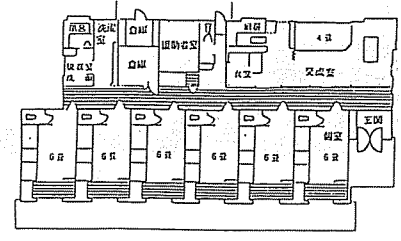


交流室・食堂

は各自で作ることにした。数人程度の小規模単位での協同居住の課題であろう。余りにも小人数では共同生活の役割分担に負担がかかり過ぎる。一人での家事分担はしんどい(精神的にも重圧である)。チームでの分担作業であれば、カバーし合えるし、その人のできる役割を分担すればよい。協同居住はある程度の単位規模が必要なようである。午前中は地元の人が生活支援者として、共同生活のアドバイスや相談ごとに対応しており、その運営費は県からの補助がある。共同生活を始めて半年で日が浅く、居住者にはまだ戸惑いがあるように見えたが、玄関ホールに置かれた大きな月下美人の鉢植えがご自慢で、見事に咲いた花の写真をプレゼントしてくださった。玄関の棚の上には住人の手作りの紙細工の花瓶が並んでいる。サニーハウスは全町を対象として公募したため、馴染みのなかった人たちが共同生活を始めたので、まだ共に暮らす楽しさを十分に味わえる程には親密になっていないようだ。また、5人という小規模単位は、長らくひとり暮らしで気ままに暮らしてきた人たちの個性や年齢的な差異がもろに影響し合い、共同生活の楽しさが醸成されるには、もう少し時間がかかりそうだ。夕食後は各自が居室で自由な時間を持ち、談話室で皆で過ごす時間は多くないとのことだが、ひとり暮らしで不安だった夜が安心して過ごせることは快適であると言われた。

高齢者は住み慣れた地域で、気心知れた人同士と一緒に住めるのが一番言いたい。生き生きとした生活が再スタートできる。震災地での住宅復興の貴重なモデルがあった。(10月26日 記)

(資料等は岡山県保険福祉部提供)



平面図

■ ストックホルムのコレクティブハウジング

— フェルドクネッペンの夕食をよばれて — (被災地にコレクティブハウジングを！/その4)

石東・都市環境研究室 石東 直子

9月ある夕刻、雑誌の写真からのコピーを頼りに、フェルドクネッペンを訪ねた。正確な住所は知らないが、国鉄ストックホルム南駅のすぐそばと聞いていた。友人の小谷部育子さんが親しい住人に、わたしが訪ねていくので夕食も一緒にできるようにと連絡してくれていた。住居を中心に再開された駅周辺の新市街地と、100年、200年も前の建物が続く旧市街地との接点にそのアパートはあった。1階に豊かな共有スペースを取っているため、連続したアパート群の町並みにアクセントを添えている。入居者は12歳以下の子供と同居していない40歳以上という条件があり、現在の住人51人(43戸)は、40歳から86歳で平均年齢は55歳だそう。このうちの何人かはこのプロジェクトの計画段階から参加しており、5年かかって計画をつめ、コーポラティブ形式で建設したコレクティブハウジングである。ここでの生活はそれぞれ独立したアパート(36~76m²の9タイプの住戸)での普通の暮しと、多様な共有スペースでの住人同士の豊かな交流がある。協同居住のメインの義務は6週間に一度巡ってくる5日間(月曜から金曜の夕食)の食事づくりである。数人がチームで食事を作り、住人が一緒に食事をする。食事当番の義務は負うが、食べる食べないの自由はある。夕食時間は5:30~7:00PMで、私が訪ねた日の夕食人数は32人だった。32枚のスープ皿が用意されて、残ってい

るお皿の枚数でまだ食べに来ていない人数が分かる。食事のクーポン券はまとめて買っておき、食事の都度もってくる。食事の雰囲気実に楽しい!

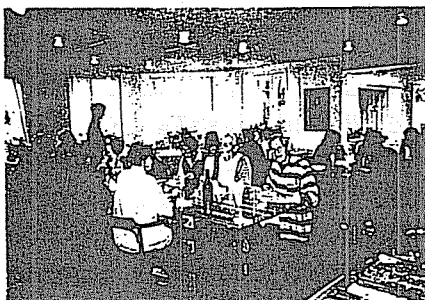
三々五々にやってきて、セルフサービスで食事をよそって、好き好きにテーブルに着く。4、5人のグループもあれば、10人以上のグループもある。テーブルごとにおしゃべりに花が咲き、いろんな世代、職業の人たちの情報交換がすすむ。大家族のような雰囲気でもあり、学生食堂のような賑やかさでもある。魅力的な時間である。

E & E夫妻と私のテーブルには今週の食事当番の一人がいて、本日のスープの作り方、食材の買い出しのことなど話してくれた。今日のメニューはとて美味いスープがメインディッシュで、じゃがいも、ラディシュ、青野菜などが入ったポタージュ風の濃いスープで、大きなスープ皿が用意された。それに滋養のありそうなブツブツした乾パン(クネッケボード)とバターが2種。チーズを削って好きなだけ挟む。デザートは食パンの上にリンゴを乗せて焼いたものとコーヒー。ワインやビ

ールは各自で持参。E夫人は私のために赤ワインを1本抱えて食堂に降りた。テーブルには捨て難いすてきな空き瓶を利用して、冷たい水が用意されている。

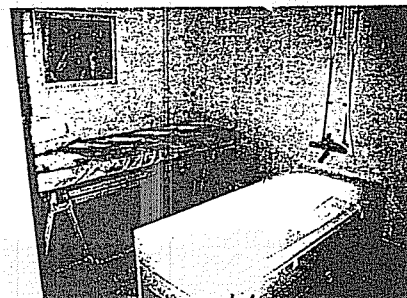
食事中、私のテーブルでは、珍客の私のために、ここの生活の様子をいろいろ聞かせてくれた。食事当番の彼女は建築家で、スウェーデンでのコレクティブの推進にさまざまな活動を展開してきた。スウェーデンのコレクティブはデンマークから学び、自分たち流のルール等を検討したという。コレクティブでは住人の年齢層のミックスがとても大事で、それが協同居住の無理のない運営、共同生活の楽しさを生み出すという。私たちが震災復興住宅にコレクティブの提案をしていることを話すと、日本独自の生活文化に合ったコレクティブの検討がとても重要であるとアドバイスされた。

食事がすむと、各自で食器を厨房に続くカウンターまで運び、また三々五々にひきあげて行く。まだ話し込んでいるグループもある。Eさんは7時からメンテナンスグループのミーティングがあるので早めに引きあげ、7名が屋上のサンルームで会合を始めた。廊下や階段、共用のトイレ等の共有スペースの掃除、植木や庭の手入れ等は本来管理会社がやるのだが、居住者組合(住人の自治組織)が住宅供給会社から請け負って行うことで、家賃の一部として払った管理費をペイバックさ

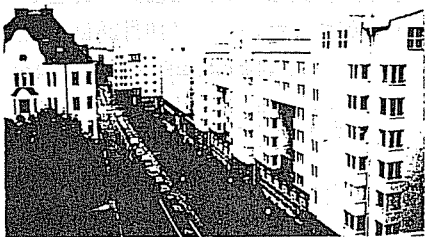


共同ダイニングでの食事

厨房におかれているレシピ集



共同浴室。浴槽の周辺には介護スペースが十分にとられている



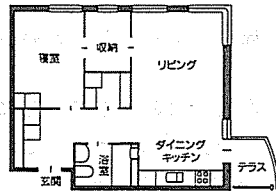
フェルドクネッペンの屋上から見たストックホルムの街なみ

れる。それで共同生活に必要なものを買い替えたり住人同士の活動資金に当てるといふ。E夫人は7時半から来週の食事当番のミーティングがある。8～9人が1チームで食事作りと後片付けの共同作業をするが、それぞれができる範囲で作業をやればよく、高齢で調理作業が少ししんどい人は軽い作業を分担する。食事チームが決めた週間メニューは、1週間前に掲示される。住人の中に著名な栄養学の元プロがいて、15人単位、20人単位でレシピを書き上げておいてくれるという。厨房にはぶ厚いレシピのファイルが何冊も置かれていた。

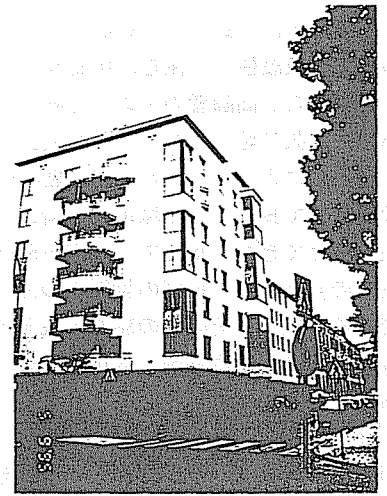
共同のリビング、洗濯室、アイロン室も食堂のそばにあり、自然な形で出会いの場となり、住人たちのコミュニケーションがとれる。趣味室やサウナ等の豊かな共有スペースもあり、さまざまな人たちが一緒に暮らし、共同生活のルールは自分たちで決めていく。

日常的なコミュニケーションを通して相互扶助が生まれ、安全で安心した生活が保障される。自分たちで決めた共同生活のルールによって、自由とプライバシーが守られる。私にとっても憧れのライフスタイルであるが、震災後の復興住宅供給にぜひ取り入れてほしい。後を経たない仮設住宅での孤独死を防ぎ、被災者の不安、孤独を忘れることができる。悩みや心配事も語り合うことによって糸口が見つかり、生きる気力が取り戻せる。

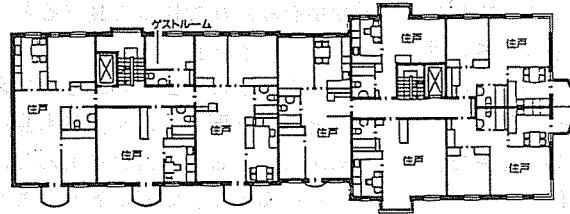
共に住まう、共に生きる、相互扶助のライフスタイルは、安全で、安心して、共に生きることの楽しさがあると確信した、フェルドクネッペンでのひとときであった。(11月20日記)



代表的な1住戸平面図(55.5m²)

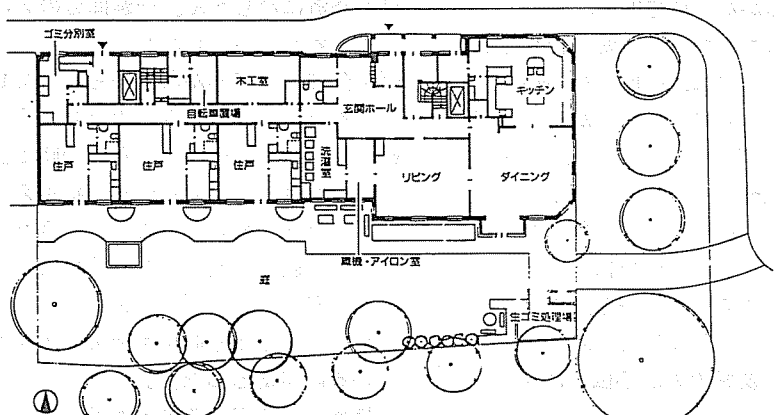


フェルドクネッペンの外観



基準階平面図(住戸標準プラン)

フェルドクネッペンの建築概要は、「きんもくせい」14号(8月17日)参照



1階平面図・配置図

図面資料は「TOTO通信」1995.9-10月号

■「そんな住宅、理想的や。そやけどわたしら5年も待たれへん！」

—長田区のひとり暮らし高齢者のすまいを考える集い— (被災地にコレクティブハウジングを！/その5)

コレクティブハウジング事業推進応援団 石東 直子

12月半ば、長田区二葉老人いこいの家で、仮設住宅に住むお年寄りの“ひとり暮らし高齢者のすまいを考える集い”が久二塚6まちづくり協議会・住宅部会によってもたれた。出席者は地震前まで長田区久二塚地区の借家に住み続けてきた人たちで、72歳～85歳までの女性11名と地区の世話役の方々である。以下にその日の話を再現してみよう。聞き手は森崎、太田、小林、石東である。

*

◇「コレクティブハウジングという聞き馴れへん言葉やけど、みんなで集まって住もうという住宅についてPRにきました。自分の住宅は小さいけど台所やお便所もついていて、共同の大きめの台所、食堂や談話室、お風呂などがあるという共同住宅で、住む人がみんなで共同部分を使って、管理していくという住まい方です。」

◇「そういう住宅ええけど、入れてもらえるんかな。理想的や。」

◇「動けるもんがして、助け合う生活、これからは相互扶助せなあかん。」

◇「それ建つのにどれ位かかるん、5年もかかるんやったらわたしら待たれへん。」

◇「2年位やったら待っとけるかなあ。」

◇「たとえば廊下を広げて椅子なんか置く。そこをみんなで掃除できるか。」

◇「自分ができる間はやる。できんようになったらどうしたらええんやろか。」

◇「町内の友愛の人が手伝いに来てくれるよ。」

◇「当番制にしたらええ。」

◇「できる人とできへん人もいるので、文句が出るのところがう。」

◇「これまでのような日本的なグチグチ言うたらあかん。」

◇「この地震から人間切りかえなあかん。」

◇「仮設住宅のお風呂はこわい。高いので入りにくい。」

◇「銭湯の方がええ。人と知り合える。」

◇「そんな住まい方やったら気分悪うなっても、誰かにすぐ分かってもらえる。」

◇「地震の後、西区で老人ホームに入ってた時、そこでは相互扶助が当たり前やった。」

◇「ひとり暮らしいうても、娘がひとりいるというのと、全くひとりというのは違うわな。」

◇「身体が弱いので人に気をつかう。参加したいけど、何もできなかつたら人にしてもらおう方が多くなって気兼ねする。」

◇「趣味の部屋なんかどう？ 使われるかな。」

◇「編みもんなんかはみんなで一緒にもするけど、自室でもやっている。」

◇「長楽の仮設は一棟に24戸入っていて、風呂がひとつしかない。どうしても2つは必要。風呂は大と小があればええ。」

◇「食事をみんなで作って食べるというの、どう？」

◇「いろんなものを食べられるのでええ。ひとりやと同じもんを何日も食べなあかんし、自分の好きなもんしかつくらへんので、栄養がどうしても片寄る。」

◇「食事を作るのは運動にもなる。」

◇「不経済にならへん。一週間分のメニュー考えたらええねん。」

◇「自分で作ってみんなで持ち寄って食べるというのもええんのとちがう。」

◇「元気な時はいいが、しんどい時は食事を助けてもらえるのが一番ええ。」

◇「男と女と一緒にというのは、どう？」

◇「ほら一緒にええ。テレビ見ても考え方がいろいろ聞けてええ。」

◇「釘打ったりする時でも男の人の手がある時があるわな。」

◇「指導する人がいるやろか？」

◇「身体が不自由になった時リーダーがいる。」

◇「老人はわがまま言う人が多いので、そんな住宅は無理やと思う。」

◇「いやな人は入らんでもええんのとちがう。」

◇「同室型より、そのコレクティブとかいうのがええね。」

◇「家賃は3万円ぐらいしかよう出さな一。」

*

晦日とお正月の新聞には、中高年の被災者の自殺や孤独死の記事が多かった。お正月を前にして、孤独に耐えら

れない被災者は少なくなかっただろう。記事によると、震災後の自殺者は6月以降は仮設住宅居住者が目立っているという。(毎日新聞によると、1月半ばで、自殺者33名、独居死51名、室内で意識不明に陥った人12名。)一日中誰ともふれ合わんと、部屋の中で孤独に過ごすのはあかん。明日への気力がわいてけえへん。

《いつでも誰かと会えるし、いつでもひとりになれる》、《ひとりで食事するよりも、たまには大家族のように集まって食べよう》というコレクティブハウジングが理想的やと思う。

今、仮設住宅に住んでいる人の中には、自力で住宅を確保して移り住む人もいるけど、多くの高齢者や母子世帯などは災害公営住宅の入居を待たざるをえない。そうすると災害公営住宅では、今の仮設住宅よりもっと高齢者や母子世帯などの割合が多くなるだろう。行政としてはいろんな懸念もあると思うけど、とにかくモデル的にコレクティブハウジングの供給を早急にやってみて！長田区のしたたかなおばあちゃんたちの応援があるやん。初期に建てる住宅に実験的にとりくんでみて、問題点があれば修正していけばいい。躊躇していると孤独に耐えきれないで、人知れず亡くなっていく人の記事が、今後何年も何年もの間報じられて胸を締めつけられる日々が続くよ。

被災した人たちは人間が変わった。変わろうとしている。変わって新しい生活を始めようとしている。行政システムも変わってほしい。人々が仲良くしていける地域をつくるのが防災である。

《共に住む、共に生きる、共に創る、相互扶助の暮らし》、《集まって住む安全性と安心感、集まって暮らすことの楽しさをもつ住宅》の供給が、待たれている。

昔のように元気な生活をとりもどした下町のニュースを、一日も早く目にしたい。そして、そこから、本格的なコレクティブハウジングが発展していくのを願っています。(1月20日 記)

■「友達は自分でつくれるけど、こんな住まい方は自分でつくれへん」

—協同居住を軌道に乗せるためのサポート体制—

(被災地にコレクティブハウジングを！/その6)

コレクティブハウジング事業推進応援団 石東直子

●「ドアを開ければ誰かがいる。こんな住まい方はほんまにええ。今までは寂しかった。友達は自分でつくれるけど、こんな住宅のこんな住まい方は自分でつくれへん。死ぬ前に幸せがみたい。こんな住宅を建ててほしい。」
尼崎市小田南ケア付き仮設住宅に住むMさんはつぶやいた。彼女の部屋には沢山の友達が訪ねてくる。私がおじやました時も友達が帰ったばかり。6帖程の洋室にトイレと洗面スペース、押し入れ、踏み込みスペースで約17㎡。この個室が中廊下をはさんで14室あり、中央に共用スペースをもつ。約80㎡の共用スペースには、台所、食堂兼談話室、風呂と洗濯スペース、援助員室がある。まさにコレクティブハウジングであり、小田南には2棟（14室型と10室型）がある。<尼崎市にはもう1カ所、三反田ケア付き仮設住宅があり、市は特別養護老人ホーム「喜楽苑」

（小田南）と「園田苑」（三反田）に運営を委託している。芦屋のケア付き仮設住宅も含め3カ所とも建物形式やケアサービスシステムはほぼ同じであるが、雰囲気は地域性がある。小田南は下町の長屋住まいのような親しみがあり、食堂はat homeで、さすがここは尼崎という気分になる。96歳のAさんは、ここは尼崎の競艇に出かけるのに都合がええと言う。時には尼崎センタープールにとどまらず、住ノ江ポートまでにも足を伸ばす。町中の小さな協同居住は交通の便利もよく住みなれた地域なので、つらい震災にあったけど元のライフスタイルを取り戻している。ここには4グループの食事ボランティアの支援があり、ほぼ毎日、昼食か夕食がサポートされる。ボランティアが前もって立てたメニューの食材を買ってきてくれる。入居者は300円程度の実費を払う。食事づくりには入居者も準備や後片付けに加わり、全員が集まって食事をし、時にはそのまま食後の団楽を楽しむ。夫婦ものは自室で食事をする時もある。食堂を使う時は、

必要な私物をバスケットに入れて持って来て、また持ち帰る。私物を共用スペースに放置しないという協同居住のルールができています。しかし隣の棟はそうはっていないとのこと。1カ所ある共同風呂の入浴順番も、今では個人々の生活スタイルが把握できたので、トラブルもなくまあ順調。2、3人で連れもって入ることもある。「今まで旅行に行ったことがない。いっぺん行ってみたい」という入居者のつぶやきを若い援助員が聞き、温泉旅行を企画した。悪戦苦闘の準備があったと聞けが、1泊2日の高原ロッジに6名が参加した。冬に入る前に避難訓練も実施した。火災発生の際の脱出、耳の聞こえない人、目の不自由な人に脱出をどう知らせるのか、屋外と室内との段差が高いので、まず布団を放り出してクッションにし、元気な入居者は相互グループをつくり、大騒ぎをして行った。その結果、防災計画書も作られ、個人は非常袋の準備、各部屋には援助員がすぐ使える位置に消火器を置いてもら

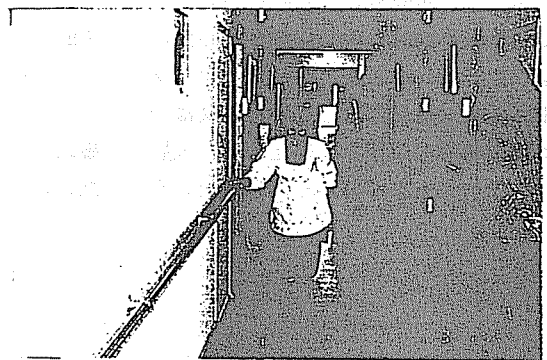
うことにした。ここでは、毎日の食事、緊急時の避難、生きがいづくりが大切な課題だという。

●日常生活にアクセントをつけながら、大家族のように棲み合っている暮らしが、冒頭のMさんがつぶやいた“こんな住宅でのこんな住まい方”であろう。この棲み合いを育んできたものは何なんだろう。震災後4カ月経って共同スペースをもつ仮設住宅が建てられ、そこに入居しただけというのでは、こんな住まい方は育たなかつただろう。ここには協同居住をつくりあげるしっかりした仕掛けがあった。

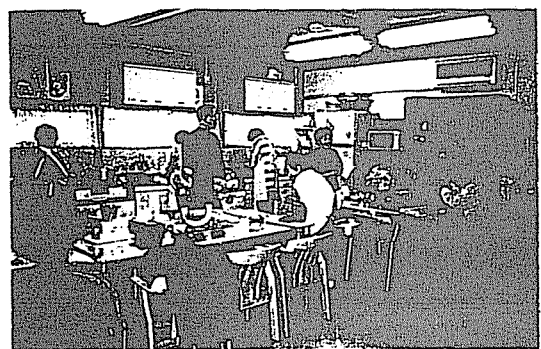
コーディネーターと生活援助員と看護婦の3職セットである。

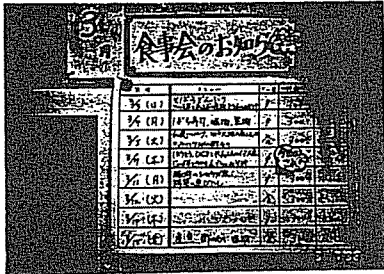
小田南の場合は、コーディネーターにケースワーカーや老人福祉の専門職を経験してこられたベテランの男1名。看護婦は一般病院での看護婦経験のある女1名。生活援助員は20～50歳代の中広い年齢層で、夜勤のみのパート(3名)も含めて8名程いる。これらのスタッフが24時間体制で、1棟に昼は2～3名、夜は1名配置されている。援助

お湯を沸かしに食堂へ



ボランティア・職員たちによる夕食づくりのスタート





食事ボランティアによるメニュー



空室を利用した回らん室に立派なお雛様が

員は入居者の生活をサポートするための、食事づくりの手助け、買物や通院の付き添い、相談や話相手に応じており、介護福祉士の専門スタッフが多い。その中には調理や家庭料理のプロもいて、ずい分恵まれている。援助員自身の悩みは、“どこまでサポートすればいいのか”ということだと言う。

例えば、ある入居者が体調をくずした時、一時的に手厚いサポートをすると、回復した後も同じサポートを求めてくる。サポートしすぎると、自立した生活ができにくくなるということにもつながる。若い援助員に対しては入居者の要求も多く、援助員は悩んでしまう。看護婦はここでの看護対応だけでなく、外部からの訪問看護や入居者が通院している医療機関とのつながりも必要となり、総合的な医療・看護の知識をフル回転しなければならない。彼女は一時期援助員も兼務していたので、入居者のニーズもよく分かっているという

のが恵まれている。コーディネーターは援助員、看護婦と入居者の対応でどんな問題が生じているのかを知り、うまくいくように異なった立場から話をきき、調整していく。入居者同士の協同居住のギクシャクも起きるので、それが大きくなるうちに事前にキャッチして、仲もっていくことも大きな任務となる。ボランティアの調整もする。入居者にとって全てが結果オーライでいくためには、この3職のバランスが必要であり、とくにコーディネーターの任務は大きい。バラバラで入居してきた人たちの状態を知り、その個性を尊重しながら協同生活を育てるまでには、多くの試行錯誤があったようで、入居者の個性、生活歴、健康状態、食事の等を把握するため、アンケートをしたり個人生活カルテも作られている。

●以上のような話をいっぱいしてくれたのは、私の娘のような年代の若い援

助員であったが、話を聞くうちに親世代をはるかに越える職業意識と自信と軽やかな行動力をもっているのに感動した。素敵な人材である。

高齢者・障害者を対象としたケア付き住宅では、この3職セットが欠かせないが、元気な自立した人たちのシニア・コレクティブではここまで望むのは現時点では難しいだろう。コーディネーターだけで十分なのか、その対応期間はどれくらい必要なのか、その人材確保は、入居前に協同居住のトレーニングもいるだろう、等々……検討しなければならない。

今、災害復興公営住宅でコレクティブハウジングの供給が始動しようとしているが、共同スペースをもった住宅の建設というハード面の供給だけでは協同居住は稼働しない。的確なソフトシステムを構築し、その人材確保ができるかどうか、新しい住まいコレクティブハウジングの成否を決めるだろう。生活歴の異なる人たちの協同生活を個性を大切にしながら築き上げていくということは、わが国ではほとんど未知の分野であるが、協同居住は同じライフスタイルを指向する人たちと専門的立場からのほまった誘導との合作であり、ケア付き仮設住宅から学ぶものは多い。<続く> (3月23日 記)

神戸新聞1996.2.25

朝日新聞1995.8.3

私の提言

協同居住型住宅の供給を

震災から半年がたち、仮設住宅で孤独に死んでいくお年寄りや、生きる気力を失って自殺する人がでてくる。被災した下町に住む人たちの多くは、よそへ移り住んでは生活できない人であり、特に高齢者は長年住み慣れた地域から切り離されては生きていけない。高齢者が生きる気力を取り戻せるような住宅の供給が必要である。

仮設住宅は市街地内での用地確保の難しきから、日常生活に必要な施設（商店、医者、郵便



西宮復興まちづくり支援ネットワーク事務局担当 石東 直子

局、駅)のない郊外に大量に建設された。下町の長屋やアパートに住んでいた高齢者は狭くて古い住まいであったが、近隣の人たちとの触れ合いがあり、地域にはぐくまれて生活が成り立っていた。震災の恐怖を体験した後では、一人で住むのが不安である。怖いと訴えている人が少なくない。今、生きる気力がうせて、将来の生活に不安を持つ高齢者には、毎日の人との触れ合いとおしゃべりが必要である。そこでコレクティブハウスと呼ばれる協同居住型集合住宅の供給を提案したい。

北欧諸国ではあらゆる世代を対象に住宅政策の中に位置づけられているが、高齢者用のコレクティブハウスもある。数世代から二十世代ぐらいが集まって、共に生きる共同住宅の住まい方である。高齢者は住み慣れた地域に戻って、気心知れた人同士が一緒に住めるのが一番いい。

一人暮らしには八畳程度の居室にトイレ、浴室、小さな台所とたつぷりめの押し入れを、二人三世帯は二居室を持ち、住宅としての個人のプライベートは確立されているが、共同の大きな台所、食堂、囲らん室、応接室、洗濯室、浴室などがある。それぞれ独立した住戸で暮らしながら、共同スペースを核に共同生活することによって、安全性、みんなと一緒に住む楽しさ、心理的な安心感が生まれる。

今、震災を体験して共に生きるという気運も高まっている。公的住宅での供給だけでなく、民間住宅での供給も望まれる。下町に人を呼び戻すためには、まず商店や市場の復旧が必要であり、そこにも小規模単位のコレクティブハウスが付設できるような公的助成制度を創設してほしい。日常生活に必要な施設がセットで建設できれば生きる気力は取り戻せる。

震災から二回目の春が来る。仮設住宅に暮らすようになった多くの被災者にとって、そこで迎える初めての春である。春になれば、自宅に閉じこもりがちだった人たちが、ちよっと戸を開けて外へ出てみよう、という気持ちになるはずだ。生きる気力を取り戻してほしい。

仮設住宅住まいは八万人強で、高齢者や一人暮らしが約半数といわれ、孤独死や中高年の自殺者が相次いでいる。一日中だれとも触れ合わずに、部屋の中で孤立して過ごしている。明日への気力がわいてこない。

高齢者を中心に、昔ながらの下町に住み続けていた人たちの多くは、そこ以外



都市プランナー

石東 直子

では生活できない居住環境を定障と見なす。にもかかわらず、震災後に建てられた仮設住宅は、入居者と立地場所、住戸形式のミスマッチといふ決定的な問題を保持してしまつた。今後、多くが被災者向けの公営住宅に転居することになるのだが、その時、また同じミスマッチを繰り返さないために、仮設住宅で顕在化した問題をしっかりとらえておく必要がある。例えば、高齢者は長年住み慣れた地域から切り離されて住めないということ。また、住戸ととって、商店、

医療機関、郵便局など日常生活に必要な居住環境の供給が求められていること。先入居をとったのに、入居させても「どこでもだれかと合住住宅」(コレクティブハウス)を提案する。さらに、住戸形式の問題では、今まで長屋やアパートに住んでいた人たちは、狭くて古い住まいであったが、近隣の人たちとの触れ合いがあり、地域にはぐくまれて生活が成り立っていた。仮設住宅では風呂、トイレが付き、居住水準は上がったかのように見えるが、隣同士の触れ合いは失

者に対応した最低限の生活サポートがなかった。恐怖を体験した後では、なれる。二人で食事をするよりも、たまには大家族

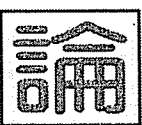


いしとう・なおこ
神戸大学大学院修士課程修了。建築コンサルタンツ会社などをへて、1986年、石東・都市環境研究室を設立。震災後、西宮復興まちづくり支援ネットワークやコレクティブハウジング事業推進支援団を発足。被災地サポートに取り組む。吹田市在住。

復興住宅に協同居住タイプを

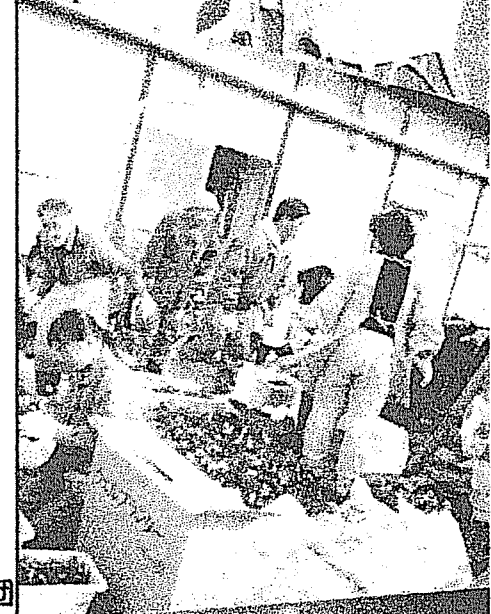
室、小さな台所とたつぷりな住戸と、その延長としての共有スペースが組み込まれたための押し入れを、三人で共有する。二世帯を持つ、二、三代も住んで、世帯は二居室を持ち、共同スペースがある。代間交流があれば、より楽しく相互扶助の精神的な生活が展開できる。

昨年暮れ、こつた住まい方について、仮設住宅の高齢者と意見交換の場を持った。「いつまでも待たれん、家賃も三万円ぐらいまでしか出さへん」という声があつたが、「理想的





下町聚楽住宅の再生
コレクティブハウジング
の
実現に向けて



コレクティブハウジング事業推進応援団

1996年3月



コレクティブハウジング事業推進応援団
世話人

団長

石東直子／石東・都市環境研究室

奥井容子／環境意匠計画・奥井研究室

小林郁雄／(株)コー・プラン

鈴木洋子／コープこうべ

中川俱子／(株)アルプラン

野崎瑠美／遊空間工房

平山洋介／神戸大学

安原 秀／(株)ヘキサ

目 次

1.	被災地にコレクティブハウジングを！	1
2.	コレクティブハウジングとは、こんな住まい、住まい方	1
3.	海外事例	4
	(1) 新しい住空間	
	(2) 海外事例	
	a. フェルドクネッペン (スウェーデン)	
	b. プレストゴースハーゲン (スウェーデン)	
	c. レインボー (スウェーデン)	
	d. コモンズ (オランダ)	
	e. ホールハウス (オランダ)	
	f. ヴェイカント・ロッツ (アメリカ)	
	g. ゲスト・ポケット・コミュニティー (アメリカ)	
	h. リー・グッド・ウイン・レジデンス (アメリカ)	
4.	国内事例	12
	a. 岡山県ひとりぐらし老人共同生活支援事業	
	b. シニアハウス江坂 (大阪府吹田市)	
5.	仮設住宅とコレクティブハウジング	15
	仮設住宅からコレクティブハウジングへ	
	呉川町ケア付き仮設住宅 (芦屋市)	
	一般仮設住宅における協同利用の事例 (新聞記事)	
6.	住宅復興とコレクティブハウジング	19
<参考資料>		
i.	コレクティブハウジング事業推進応援団 定期ミーティング議事録	20
ii.	きんもくせい 連載記事 (被災地にコレクティブハウジングを！)	25
iii.	コレクティブハウジング関連 新聞記事	35
iv.	コレクティブハウジング事業推進応援団	
	定期ミーティング出席者	37

地 産

2. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ (1) $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
3. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
4. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

解答 (1) $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$

(2) $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

(3) $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

(4) $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

(5) $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

(6) $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

(7) $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

(8) $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

(9) $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

5. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
6. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
7. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

8. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
9. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
10. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

11. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
12. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
13. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

〓 解答

1. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
2. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
3. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
4. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
5. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
6. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
7. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
8. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
9. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
10. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
11. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
12. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。
13. $\int_0^1 (x+1)e^{-x} dx$ を計算せよ。

1. 被災地にコレクティブハウジングを！

被災地での仮設住宅住まいが始まってから1年を迎えてようとしており、仮設住宅には今なお8万人強の人が住んでおり、そのうち高齢者やひとり暮らしが約半数を占める。そして、仮設住宅での高齢者の独居死や中高年者の震災苦による自殺者が後を断たない。一日中誰とも触れ合わずに、部屋のなかで孤立して過ごしては、明日への気力が湧いてこない。

安全で安心して住み、生きる気力を取り戻せるような住宅供給が、今、最緊急課題である。今後、多くの人が仮設住宅から災害公営住宅に移り住むことになる。その後にもまた、同じような悲劇が繰り返し続かないように、復興住宅に“コレクティブハウジング”の提案をし、その事業推進に向けての応援活動を展開している。

“コレクティブハウジング”とは、

—— いつでも誰かと会えるし、いつでもひとりになれる ——

—— ひとりで食事をするよりは、たまには大家族のように集まって食べよう ——

という住まい方の「協同居住型集合住宅」であり、日常生活の中で自然なかたちで人とふれ合うことができる。

すなわち、コンパクトであるが、それぞれが独立した複数の住戸（住宅）と、その延長としての共有スペース（共同室）が組込まれた集合住宅であり、共有スペースを核に協同生活が展開される。

なお、被災地での復興住宅では、本格的なコレクティブハウジングの実現に先駆けて、コレクティブハウジングの協同性（相互扶助）に着目したハウスシェアリング、グループホーム、簡易型コレクティブハウジングの供給が望まれる。そこから本格型コレクティブハウジングが育つであろう。

2. コレクティブハウジングとは、こんな住まい、住まい方

コレクティブハウジングの先進事例地である北ヨーロッパ諸国の collective とは、「団体の、集団の、協同の」という意味で、コレクティブ・ハウジングとは、通常は食事、保育、洗濯等の日常生活のかなりの部分を協同化するというライフスタイルである。従って、コレクティブという言葉はコーポラティブとは異なり、「生活の協同化」を意味しており、供給方式や所有形態とは関係が薄い。

コレクティブハウジングの基本理念である生活協同型の住宅は、日本ではまだ事例がないようであるが、高齢者の夜間の安全性と安心感の確保を主たる目的として供給された「岡山県ひとりぐらし老人共同生活支援施設」は、協同型（協働型）の生活が営まれており、簡易型のコレクティブハウジングに近いものである。また、芦屋市、尼崎市などで震災後供給された高齢者・障害者向けケア付き仮設住宅は、グループホームとしての形態と内容を持ち、これも簡易型コレクティブハウジングの事例といえる。

ライフスタイルのひとつの選択肢としてのコレクティブハウジングは、わが国ではまだよく知られていないが、高齢者にかぎらず単親世帯、男女協業世帯、単身世帯等の中には、共に住まうことの安全性、安心感、合理性を高く評価し、さらに共に住まう楽しさをもつライフスタイルを求める層が近年でてきた。被災地においてはその傾向がとくに大きい。

コレクティブハウジングの住まい・住まい方と、モデル型のイメージは下に示すようなものである。

なお、コレクティブハウジングの居住理念である協同（協働）居住の運営は、共同スペースをもった住宅の建設というハード面の充実だけでは稼働しない。的確なソフトシステムの構築が必要であるが、ここ（この冊子）では、ソフトシステムの構築については触れていない。

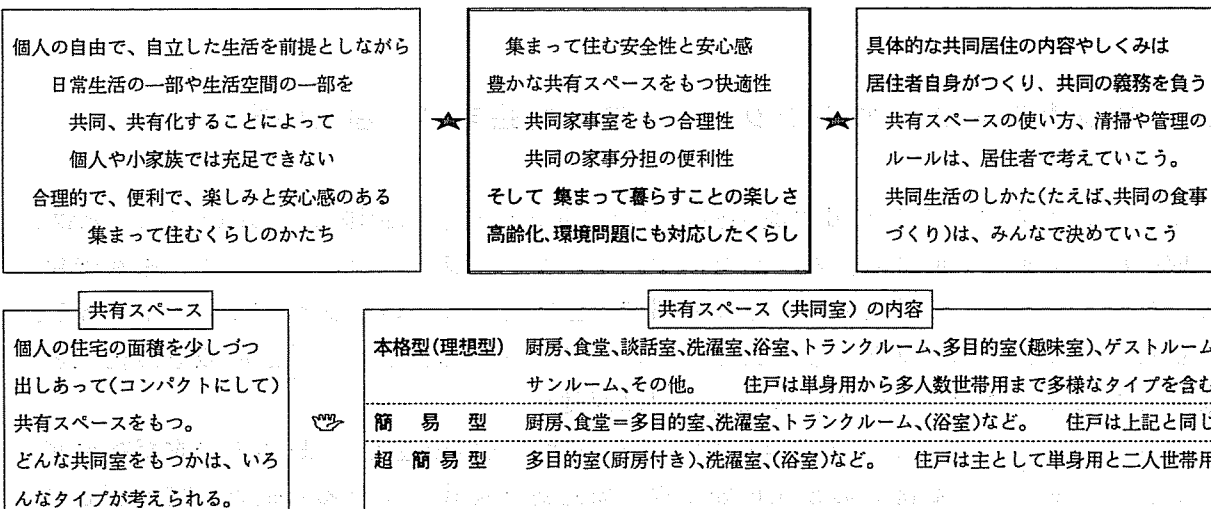
《コレクティブハウジングの住まい、住まい方》

ひとりで食事をするよりも、時には大家族のように集まって食べよう！

大家族のように みんなが集う場所をもつ住宅 ・ 共に住む 共に生きる 共に創る 相互扶助の暮らし

おしゃべりしながら洗濯機をまわす 一緒に住む人たちの日常的なふれあいを通して、

食事をしながら おしゃべりする 共に生きる楽しさがわか



《被災地でのコレクティブハウジングのモデル型》

タイプ	住戸・共有室の内容	主たる入居対象者像	供給主体	単位規模等
A 本格型(理想型) 協同生活型	住戸→単身世帯から多人数世帯 までの多様なタイプを内 包する 共有室→厨房、食堂、談話室、洗濯 室、浴室、トランクルー ム、多目的室、客室、テラ ス、その他	主旨に賛同する人 多世代が棲み合う	住・都公団 住宅供給公社 コープこうべ等の市 民生活協同組合	日本的付き合い文 化から考えると、 10戸未満は不適 最小→15戸前後 最適→20～30戸 最大→40戸前後 が望しいと思える
B 簡易型 セルフワーク (最少の共同施設 共有型)	住戸→単身世帯から多人数世帯 までの多様なタイプを内 包する 共有室→厨房、食堂=多目的室、 洗濯室、トランクルーム (浴室)	主旨に賛同する人 多世代が棲み合う	住・都公団 住宅供給公社 自治体 コープこうべ等の市 民生活協同組合 民間アパート経営者	
C 超簡易型 軽度のケアサー ビス付き	住戸→単身および二人世帯用 共有室→多目的室(厨房付き)、洗 濯室、事務室	シニア層 (特に仮設住宅の移り 住みとして)	住・都公団 自治体 福祉施設関係の法人	
<p><シルバーハウジング・プロジェクトよりも居住者の相互扶助を推進し、生誕地は近接の福祉施設からの派遣></p>				
D ネットワーク型	<p>a. クラスター型→近接した小規模単位の共同住宅を、ひとつのコレクティブハウジングとし、共有施設の機能分担をする。 ex. 浴室(風呂屋)をもつクラスター 食堂(レストラン)をもつクラスター 洗濯室(コインランドリー)をもつクラスター 各クラスターは談話室をもつ</p> <p>b. 地元復興施設の付加型→市場復興と小規模コレクティブハウジング 風呂屋復興と小規模コレクティブハウジング</p> <p>c. 地域の福祉施設の付加型→特別養護老人ホームとシニアコレクティブ etc.</p>		<p>従前木賃経営者 (カッコ内は従前木賃 経営者と地元の風呂 屋等経営者の合築)</p> <p>施設経営者 施設経営者と市また は居住者組合等</p>	<p>数戸～15戸程度の 小規模も対応</p>

3. 海外事例

(1) 新しい住空間

——協同住宅の生成と類型

“標準住宅”の解体

世界の多数の地域に成長した“マス・ハウジング”のシステムは、“標準世帯”を対象に据えて画一的な“標準住宅”を大量に生産してきた。この“標準世帯”は雇用された夫、専業主婦、子どもの「夫婦と子」として想定されている。“標準住宅”は規格化されたワン・セットの要素から構成され、どれもこれも同じような内容をもつ。“標準世帯”と“標準住宅”の結合を基礎とする住宅供給のスタイルは自動的に多く地域に侵入し、住宅のあり方に対する人びとのイメージを極端に固定化してきた。

ところが、世帯の内容は劇的な変化を示している。単身者、高齢者世帯、共稼ぎ世帯、母子世帯などが急速に増大した。出生率の低下、初婚年齢の上昇、結婚を選択しない人びとの増加、人口の高齢化、女性就労率の上昇など、これらすべては世帯の変化を加速してきた。“標準世帯”は一貫して減少し、現実にはもはや“標準”とは呼べない位置にまで比重が低下している。

こうした世帯の変化は住空間へのニーズの変化をともしなう。“標準住宅”とは、“標準世帯”の専業主婦の存在を前提として、生活上のほとんどのニーズを住戸内で完結して私的に処理するものと仮定した空間である。住機能に特化した専用住宅地をつくり、近隣からは切り離された孤立性を帯びている。この“標準住宅”は変化していく世帯の新しいニーズに反応できそうもない。アメリカの建築学者であるドロレス・ハイデンは、現代のすべての住宅は固定された世帯のイメージにもとづく「極度に私的」な「孤立した住宅」であり、「日用品を詰め込んだ箱」にすぎないと述べている。

協同住宅の生成

住空間を組み替える試みがはじまった。スウェーデンのコレクティブ・ハウジング、デンマークのコ・ハウジング、オランダのセントラル・リ

ビング、アメリカのシェアド・ハウジングなど、多彩な類型の新しい住空間が発達しはじめた。住宅の固定概念をひとまず壊し、現代の世帯にもっと忠実な空間を編成するための試みである。

これらの新しい住空間はさまざまなバリエーションがあり、型ごとに独自の性格と意図が認められる。しかし、そこに共通する特徴は、単純化していえば、複数の世帯が集まって住み、一定の空間を共用する“協同住宅”として編成されている点にある。

この共用空間は空間の構成それ自体の特徴をつくるだけでなく、多面的な意味を含んでいる。

- ①生活の協同。日常的な助け合いを育成する。家事、だんらんを協同化する。単身者、高齢者、母子世帯などは生活上のニーズを私的に充足する機能は弱い。専業主婦の家事は期待できない。
- ②コミュニティづくり。共用空間を基点に親密な社会関係の生成を促す。
- ③複合性の重視。住機能に限定せず、各種の施設・サービスを“オン・サイト”、すなわち敷地内、住棟内に組み入れる。
- ④近隣との密接な関係。共用空間を外に向かって開き、近隣を含めたコミュニティをつくる。“オン・サイト”の施設・サービスを近隣に解放する。
- ⑤アフォーダブル住宅。空間の共用化は1戸当たりのコストを引き下げる。世帯の変化につれて、単身者、高齢者世帯など、住居費負担能力が低い世帯が増えていく。

協同住宅の類型

協同住宅の多様性を理解するための指標としては、さしあたり次の8点が重要だろう。これらの指標は互いに関連し合っている。ただし、ここでの指標は“即物的”なものに限っている。実際には歴史的な経緯、思想的な背景などが類型の生成に深く影響を及ぼしている。

- ①共用空間—この部分にどのような機能を組み込んでいるのか。
- ②専用空間—“標準住宅”が備えていた機能のすべてを専用空間に取り入れたうえで、さらに共用空間をつくっているのか。あるいは“標準住宅”の要素の一定部分を共用化しているのか。
- ③居住世帯—多様な世帯が複合して住むのか。単身者、高齢者、母子世帯、ホームレスなど、特別

のニーズをもつ特定の型の世帯に限定して、それに応じた空間をつくっているのか。

④居住階層—中産階級のための住宅なのか。低所得層、貧困層の問題を意識したアフォーダブル住宅なのか。

⑤テニユア—持家、賃貸、協同所有のコープなど、多様なテニユアの住宅がある。これは居住世帯、階層に関連している。

⑥生活様式—日常生活をどこまで協同化しているのか。とくに食事の様式がどうなっているのか。

⑦サービス—ソフト・サービスをどのように組み込んでいるのか。

⑧自律性—居住者が自発的にプロジェクトを手がけ、建設から管理、コミュニティの運営にいたる過程に自律性を発揮しているのか。あるいはスポンサーが主導してプロジェクトを行っているのか。

協同住宅の典型

こうした指標を踏まえて、協同住宅の代表的な類型を簡単に示しておく。

①コレクティブ・ハウジング（スウェーデン）

もともとは社会主義、ユートピア運動、フェミニズムなどの思想的背景から生じてきた協同住宅である。多様な型の世帯が集まって住んでいる場合が多い。専用空間は独立した住宅としての機能を持ち、そのうえで充実した共用空間を備える。食事を含めた生活の協同性が強い。居住者の自律的なプロジェクトであるケースが多い。近年では、高齢者のためのコレクティブが試されている。

②コ・ハウジング（デンマーク）

空間と生活様式の面ではコレクティブに近い。ただし、コレクティブは社会思想の空間的な実践として現れてきたのに比べ、コ・ハウジングは生活様式それ自体を目標にして生まれてきている。低層・低密のタウンハウスのプロジェクトが多い。一般的に10~20戸程度のクラスターに分節され、クラスターごとに共用のコモン・ハウスをもっている。居住者の自律性が高い。高齢者のためのコ・ハウジングが増えている点が近年の特徴。当初は持家が多かったのに対し、最近ではコープが主流である。

③セントラル・リビング（オランダ）

低所得の単身者、母子世帯をターゲットにした

非営利組織のプロジェクトが多い。アフォーダブルな賃貸住宅として供給される。コレクティブ、コ・ハウジングに比べて、より“アーバン”な集合住宅であるケースが一般的である。専用空間は小さく、“標準住宅”の一定の要素が共用化されていることがある。空間設計はクラスター方式を採用し、クラスターごとに生活の協同化の単位をつくっている。

④シェアド・ハウジング（アメリカ）

“同居”に近い協同住宅。主に高齢者への対応に狙いがある。既存の一戸建住宅のストックを活用したハウスメイト・マッチでは非営利組織などが同居者をアレンジしている。高齢者と若年世帯の“同居”が多い。高齢者どうしの“同居”となる場合もある。“同居”を成功させるために、非営利組織はあらかじめカウンセリングを行っている。グループ・レジデンスは複数の高齢者が“同居”するためのシェアド・ハウジングである。専用空間は限定され、キッチン、ダイニング、リビングなどは共用化される。非営利組織のプロジェクトとして実施される場合が多い。

⑤トランジショナル・ハウジング（アメリカ）

ホームレスであった母子世帯を対象とした非営利組織のプロジェクト。居住期間は約2年に限定され、その間に母子世帯が生活再建の準備を整える点に狙いがある。このため、保育所、ジョブ・トレーニング、家庭教師、クラス・ルーム、カウンセリングなどの多彩な施設・サービスが“オン・サイト”で設置されている。専用空間は小さく、共用空間の比重が大きい。

⑥SROハウジング（アメリカ）

非営利組織による単身のホームレスのための賃貸住宅。低所得層の簡易ホテルであった建築を修復してコンバートしたものが一般的。SROはSingle Room Occupancyの略称で、居住者が占有するのは文字どおり1室である。キッチン、ダイニング、リビング、バス・トイレなどはすべて共用。専用空間の切り詰めによってアフォーダブル住宅を実現している。ホームレスの生活再建を支援するために、ジョブ・トレーニング、カウンセリングなどのサービスが結合されている。

(2) 海外事例

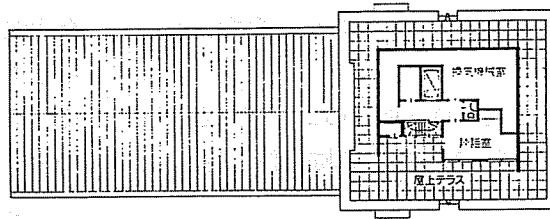
a. スウェーデン フェルドクネッペン

フェルドクネッペンは、スウェーデン国鉄ストックホルム南駅周辺の住居を中心として再開発された新市街と、100~200年前の建物が残る旧市街のエッジに位置するコレクティブハウジング。1993年6月に完成した最も新しいタイプである。

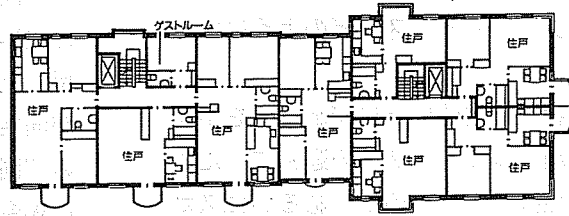
特徴は、公共の賃貸住宅であるにもかかわらず、明快なコンセプトを持つ有志によって計画が始動し、企画から設計まで、将来の入居者も主体的に参加して6年がかりで実現したことだ。コンセプトを要約すると、「子供たちが成長して独立をした後は、それまで住んでいた大きな家を子供たちの世代に譲る。親世代は、コンパクトで便利で社会的コンタクトと相互扶助のあるもう一つの家を、まだ十分エネルギーのあるうちに、自分たちが主体となってつくろう」というもの。50歳代を中心とする数人が、賛同する仲間を集めた。その際、40歳以上で同居する学童期の子供がいないことを入居資格とした。

居住者自らが物理的・人間的環境づくりに関わることによって、可能な限り自由で、自己決定に基づいた自立した老後を実現したい—という考え方は、高福祉国のスウェーデンでは十分社会的に説得力を持つものである。ストックホルム市の住宅公社の一つが、供給を引き受けることになった。

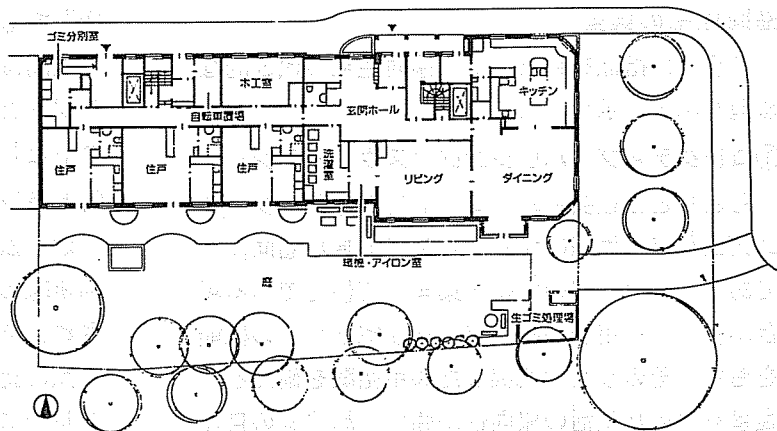
住戸は36~76m²と比較的小さくし、各居住者が賃貸面積の約13%ずつを供出する形で生み出したスペース約500m²を使い、共同の厨房や食堂をはじめとする各種の共有室を計画した。その内容や配置、性能に関しては、かなり居住者のいこうが反映された。また住戸についても、公共住宅の枠内とはいえ、間仕切りの位置や設備内容、仕上材料、色彩などの選択が居住者にゆだねられた。



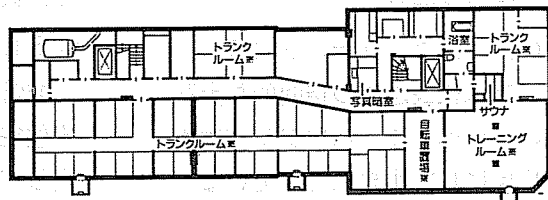
7階平面図



基本階平面図(住戸標準プラン)

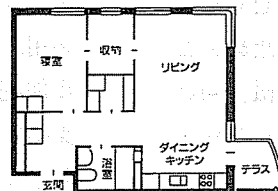


1階平面図



地下1階平面図

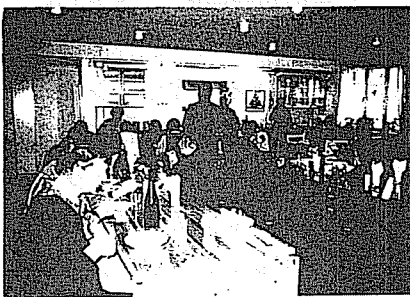
■印はシャッター仕様にしている。



代表的な1住戸平面図(55.5m²)

●建築概要

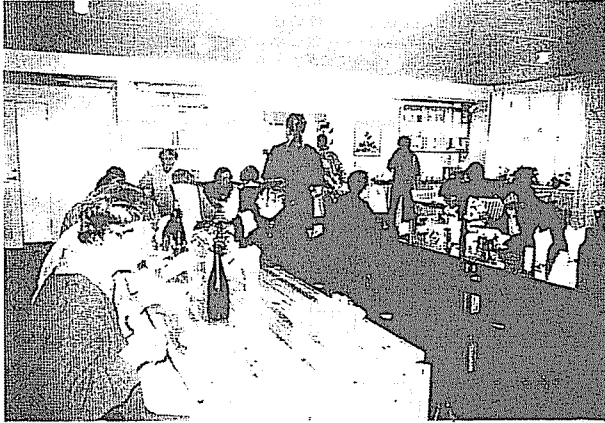
- 供給主体——ストックホルム市住宅公社ファミリーエポシュターダ
- 設計者——ヤン・ルンクヴィスト建築設計事務所
- 所有形態——賃貸
- 階数——地下1階・地上5階(一部7階)
- 住戸数——43戸(36~76m²)
- 共有室——厨房、食堂、多目的室、木工室、洗濯室、写真暗室、サウナ、ルーフトラス、客室、トランクルーム、事務室、コンポスト
- 運営主体——居住者組合フェルドクネッペン



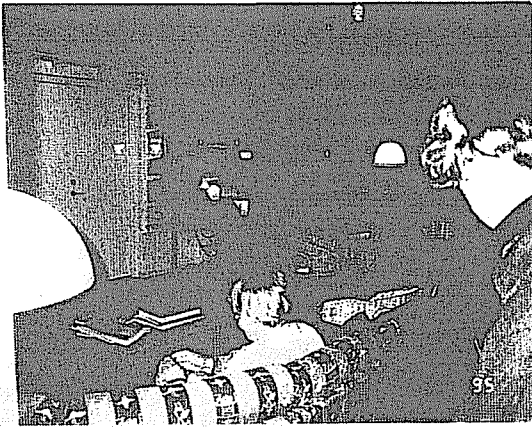
共同で食事をとるコモンダイニング。アルコールは各自持参する。ゲストも予約すれば食事できる。食事チームが一週間のメニューを立て、栄養学のプロである居住者がレシピを作ってくる。

a. スウェーデン

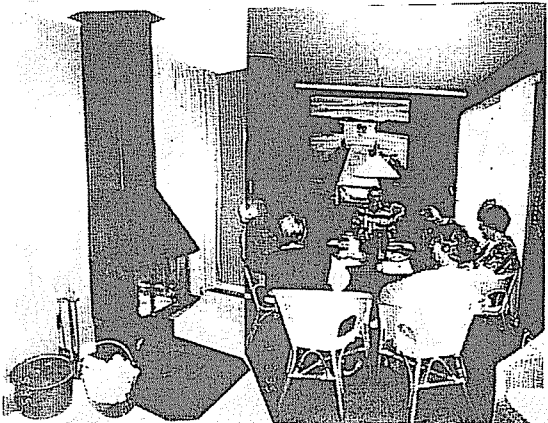
フェルドクネッペン



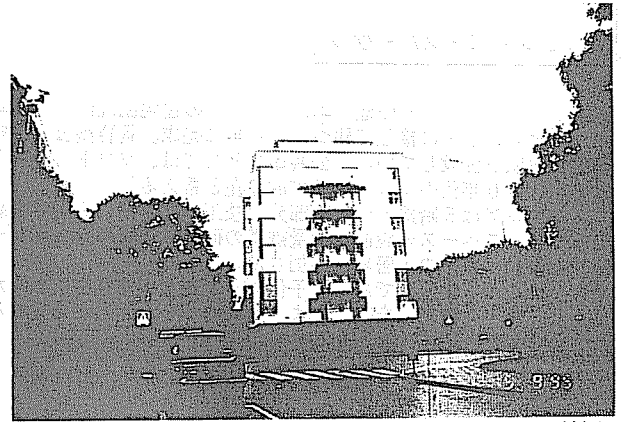
共同の食堂での食事風景



夕食の後は共同の居間でくつろぐ



7階談話室での団らん



外観



設備の整った厨房



共同の浴室 - 介護を要する人も入浴ができる

洗濯室



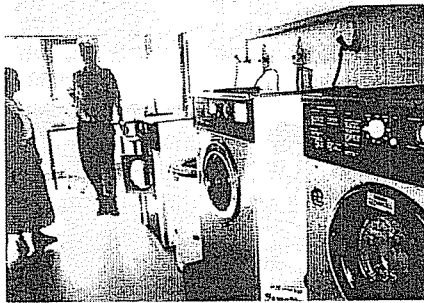
b. スウェーデン

プレストゴースハーゲン

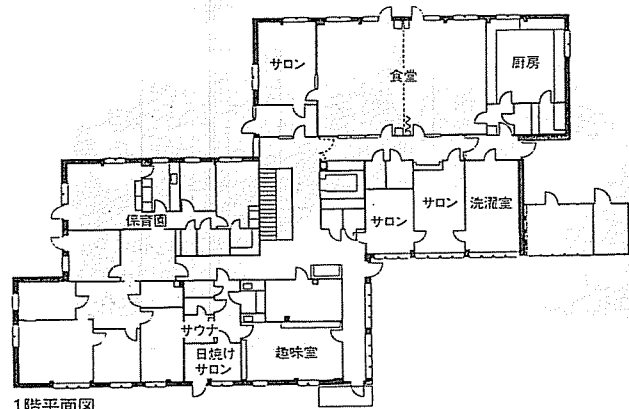
ストックホルムメッセの建つエルフシェーの住宅団地内に、高齢者用サービスハウスに接して建つ。84年に完成。賃貸型公共住宅で、地区保育園を併設している。公共事業としては、ソフト、ハード面ともに、80年代のプロトタイプ的存在と言える。コモンフロアは5階建ての1階部分。竣工の2年前に入居者を募集し、コモンスペースの設計や大量調理の研修、運営のシュミレーションなどに、将来の入居者は参加した。また、ここは子供天国である。子供たちが遊戯室で自由に遊んだりサービスハウスの老人を友達のように訪ねている光景が見られる。

◎建築概要

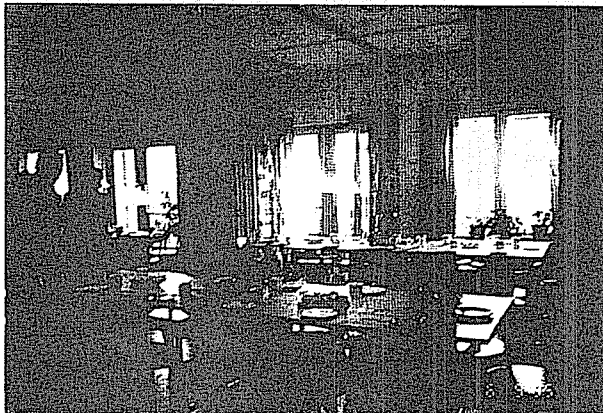
供給主体——ストックホルム市住宅公社ファミリエボシュターダ
 コーディネーター——グニル・スコグ&アンデルシュ・ティベリ
 所有形態——賃貸
 階数——地下1階・地上5階
 住戸数——31戸(39~79㎡)
 共有室——厨房、食堂、だんらん室、織物室、木工室、陶芸室、写真暗室、サウナ、音楽室、洗濯室、子供遊戯室、乗園
 地区施設——保育園
 運営主体——居住者組合プレストゴースハーゲン



ランドリー。ここは井戸端会議の場所になる



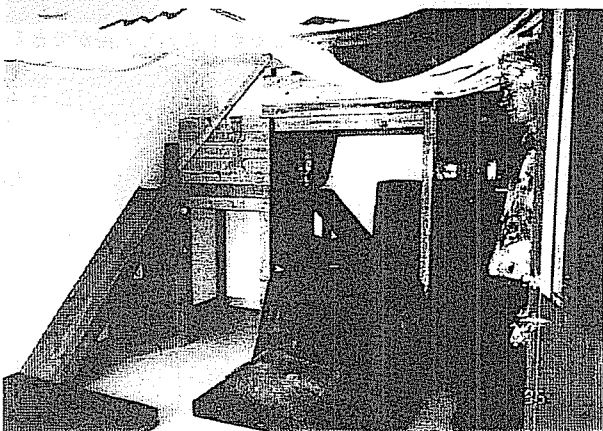
1階平面図



食堂



外観



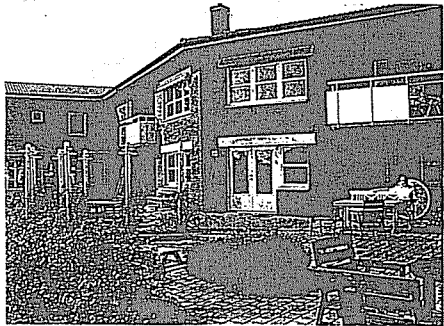
プレイルーム -- 子供が多数入居

木工室



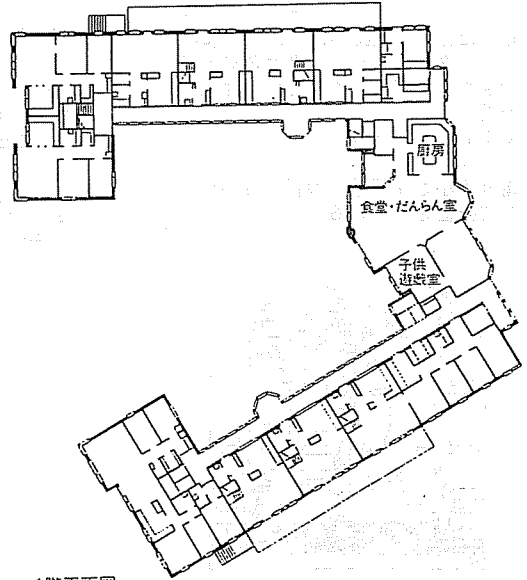
C. スウェーデン
レインボー

大学都市ルンド郊外にある、スウェーデンには珍しい郊外型のコレクティブハウジング。竣工は89年。規模は比較的小さく、92年時点で大人20人と子供30人が住む。高齢者から子供までの多世代のコミュニティー形成を意図的に目指している。自然との直接的な触れ合いがテーマで、各住戸の接地性を重視している。そのため一部の共用室は地下に配置された。住戸への入口は中庭に面したガラス張りの廊下側にあり、中庭と反対側にプライベートな庭がある。大人の人数が少ないこともあり、ここでは1週間のうち3日だけ、夕食を共同運営している。担当者は3人で、ショッピング、料理、片付けを行う。4週に1度の割合で食事づくりが回ってくる。厨房と食堂はエントランスに近く、明るく中心的な位置にあるので計画された共同食事以外の自主的な共同利用がかなり活発である。



外観。コの字形の中央に当たる部分に、コモンキッチンなどが配置されている

- 建築概要
 供給主体——ルンド市住宅公社
 設計者——ロルフ・リンドストロム/HLAD
 所有形態——賃貸
 階数——地下1階・地上2階
 住戸数——19戸+貸室3戸
 共有室——厨房、食堂、だんらん室、木工室、音楽室、サウナ、洗濯室、AV室、子供遊戯室、卓球室、客室、菜園、コンポスト
 運営主体——居住者組合レインボー

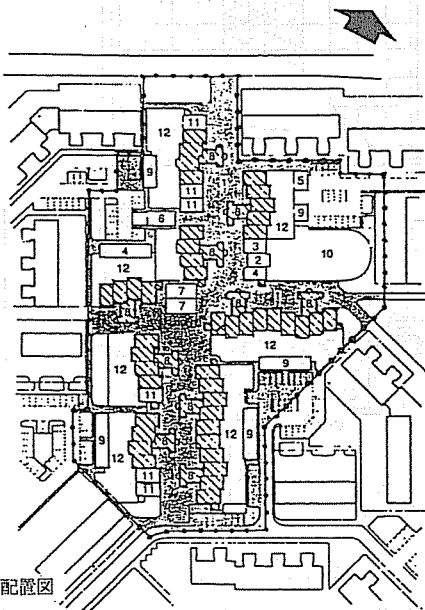


1階平面図

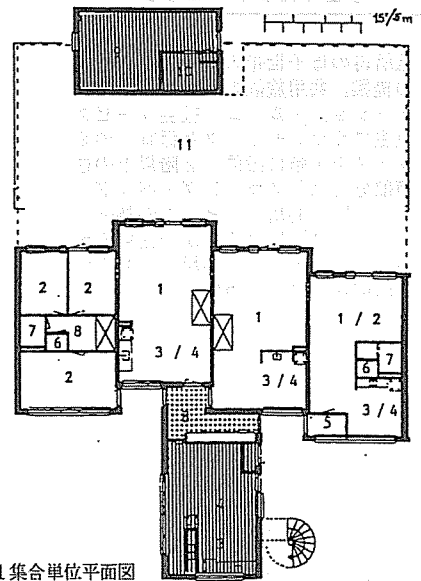
資料出典：日経7-キチキ71994.7-4

d. オランダ
コモンス

全54戸、2～3層の集合住宅。4～5戸を単位とした“クローズドクラスター”を採用。クラスターごとに共用のキッチン、ダイニング、リビング、ランドリー、倉庫、クラスターガーデンがある。“クローズド”なので固定メンバー。居住世帯の65%は単身、及び母子。固定メンバーの関係がうまくいかないときがある点が欠点。



配置図



1集合単位平面図

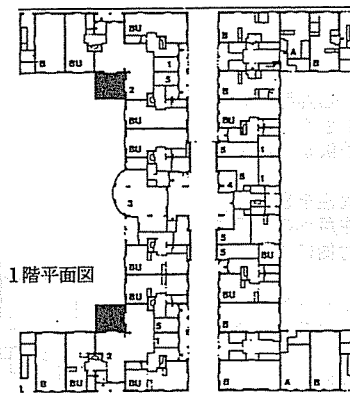
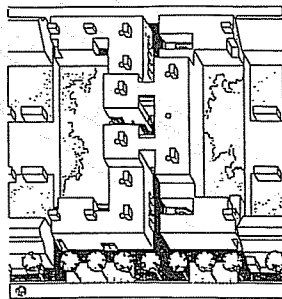
1. 歩行者通路
2. 図書館
3. 会議室
4. バー、喫茶室
5. サウナ
6. 工作室
7. スタジオ
8. 共用台所・食堂
9. 共用洗濯室・倉庫
10. 共用庭
11. 独立作1 (非共同台所)
12. 専用庭

1. 居間
2. 寝室
3. 台所
4. 食堂
5. 玄関
6. 便所
7. シャワー室
8. ホール
9. 共用倉庫
10. 共用洗濯室
11. 専用庭

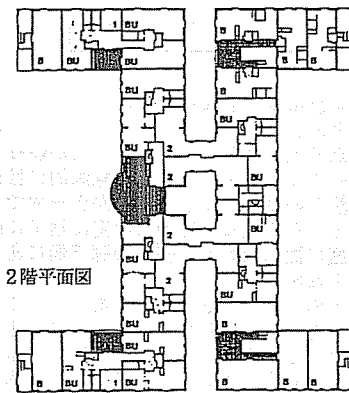
資料提供：平山洋介

e. オランダ
ホールハウス

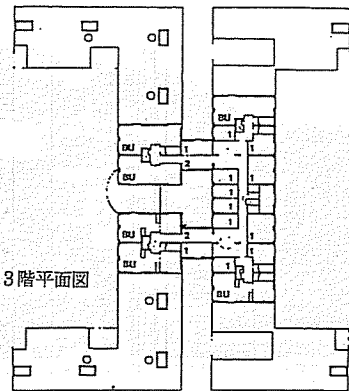
3層の集合住宅。3つのクラスター。クラスターごとに共用のキッチン、ダイニング。ただし、“オープンプラスター”なのでメンバーは非固定。居住世帯は61%が単身、36%が母子。このプロジェクトは、(1)独立住宅：クラスターには加わらない完結した住戸、住棟の端に配置、(2)ベーシック・ユニット：クラスターに参加する世帯のための住戸、専用の簡易キッチン、小さなリビング、寝室を備える、(3)ルーム：ベーシック・ユニットの世帯が必要に応じて借りる小さな部屋、の組み合わせとして計画されている。



1階平面図



2階平面図



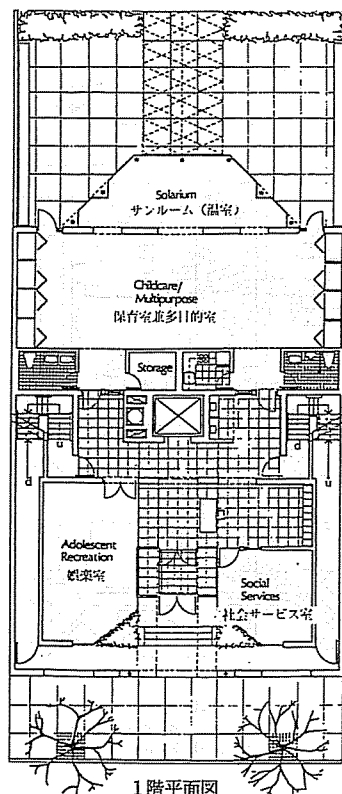
3階平面図

- A. 2人用独立住戸 B. 1人または2人用独立住戸
BU. 基本型住戸
1. 個室 2. 共用台所・食堂 3. 喫茶室 4. 洗濯室
5. 倉庫

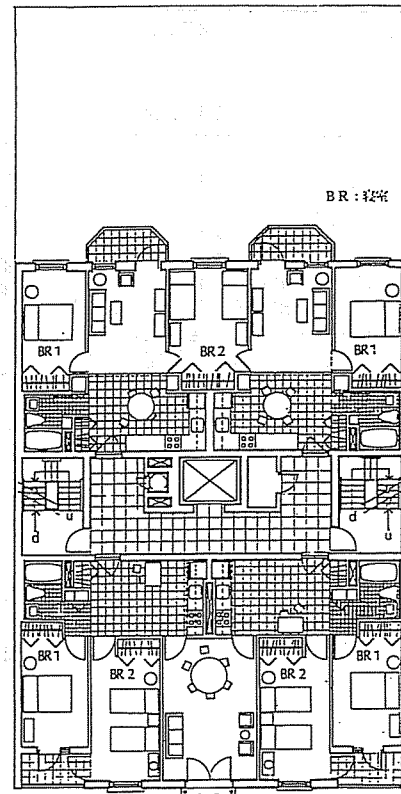
資料提供：平山洋介

f. アメリカ
ウェイカント・ロッツ

低所得の母子世帯のための集合住宅の提案。共用施設の保育所、レクリエーション・ルーム、社会サービス（主にカウンセリングと保育）のオフィス等を1階に設置。2階以上の住戸部分では“スウィング・ベッド・ルーム”と共用のリビングが特徴。“スウィング”はどちらかの住戸の専用にしてもよいし、共用してもよい。互助関係の育成に狙い。



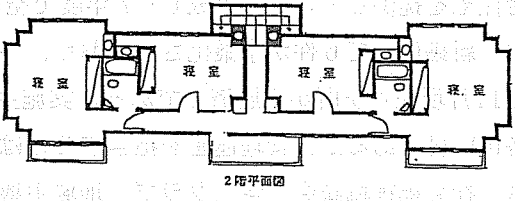
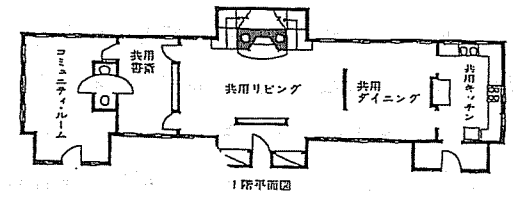
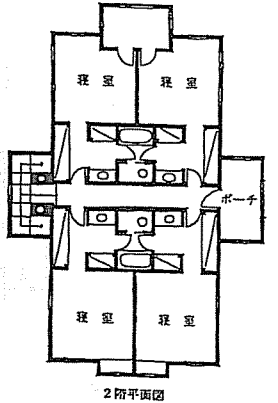
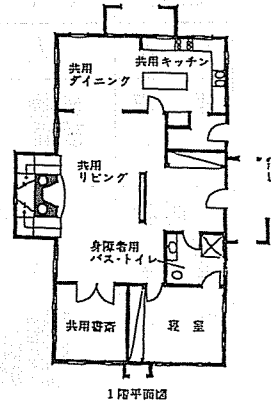
1階平面図



2階以上平面図

g. アメリカ
ヴェスト・ポケット・コミュニティー

全体で7戸から構成され、30名が居住できる。各戸は2階建、4ないし5の寝室、共用のキッチン、ダイニング、リビング、書斎を備える。寝室はプライバシーを保つために2階に配置され、バス・トイレは2寝室で共用する。身障者を対象としたバリア・フリー設計の寝室、バス・トイレは1階にある。7戸のうちの2戸はコミュニティー・ルームをもち、これは居住者全員が利用できる。共用空間の管理、食事は、居住者が協同して行うことになる。

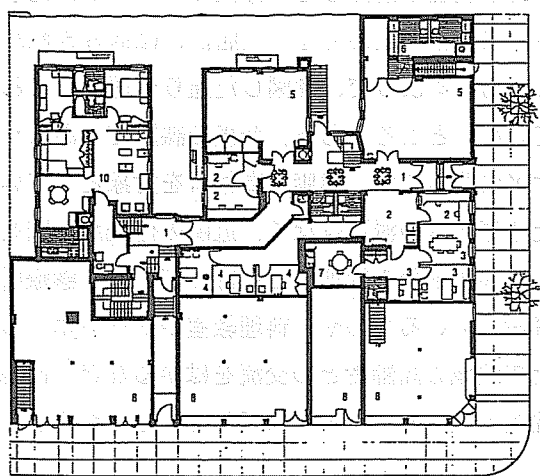
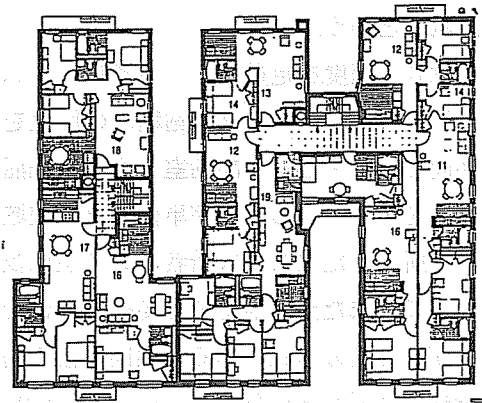


資料提供：平山洋介

h. アメリカ
リー・グッドウィン・レジデンス

母子世帯のトラジショナル・ハウジングと恒久住宅。ニューヨーク、ブロンクス。非営利組織のプロジェクト。1階に店舗。歯医者、薬局、美容院、花屋がテナント。母子世帯の住宅をつくると同時に、荒廃した(ブロンクスはメチャクチャになっている)地域に商業施設を供給して、経済を刺激する点に狙い。"オン・サイト"の社会サービスとして、保育、カウンセリング、コンピューター訓練(就労能力開発)、調理実習、子供の家庭教師がある。これに応じた共用施設が1階に豊富に設置されている。マネージャーが住み込み。社会サービスのスタッフは通い。2階以上は独立住戸とシェアド住宅のミックス。"スウィング・ベッド・ルーム"の技法がみられる。

1. 玄関
2. 受付
3. 事務室
4. 相談室
5. 保育室
6. 調理実習室
7. スタッフ室
8. 店舗
9. 倉庫
10. 管理人室
11. 2または3寝室住戸
12. 1または2寝室住戸
13. 1寝室または1寝室住戸
14. スイミングプール
(両側からの利用可能)
15. 子供室
16. 1寝室住戸
17. 2寝室住戸
18. 3寝室住戸
19. 分棟利用住戸



2階以上平面図

資料提供：平山洋介

4. 国内事例

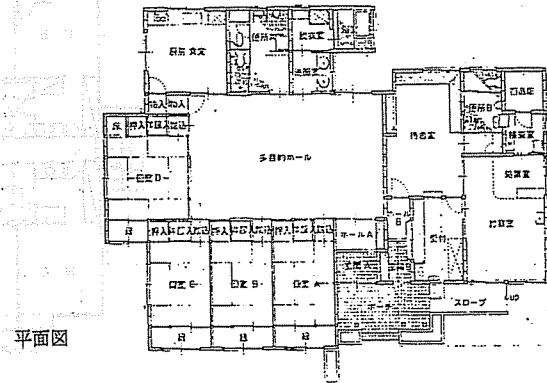
a. 岡山県ひとり暮らし老人共同生活

支援事業

岡山県では、高齢者福祉対策の一つとして、平成6年度から県独自の推進事業である「ひとり暮らし老人共同生活支援事業」を行っている。これは、孤独から来る日常生活の不安や、身体機能の低下に伴う家事負担の増大、また緊急時の不安などを、共同生活とその中での相互扶助によって解消しようとするもので、満65歳以上の独居老人を対象に コレクティブハウジングの形をもつ集合住宅を提供している。平成6・7年度で空家利用、新築併せて6件が事業化されており、平成7年11月現在4ヶ所が入居済みである。実施主体は各市町村であるが、管理運営を担当するのは町直営、社会福祉協議会、老人クラブ、地域主導型とさまざま、入居者の選定にあたっては、各施設ごとに地域の実情に照らして行われている。入居者は以前からの知り合いであることが多く、共同部分の管理運営方法についても入居前から話し合いがもたれたという。

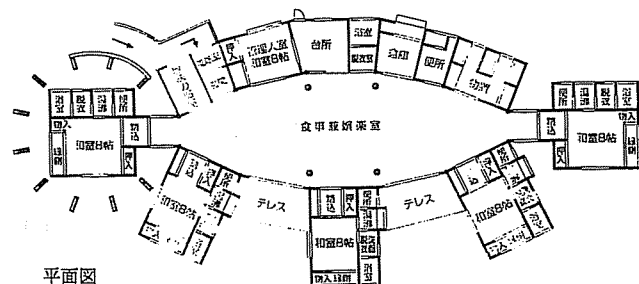
各施設は6人程度を定員とし、トイレ・ミニキッチン・押入・広縁のついた6帖程度の個室を基本に、共同の食堂・台所・談話室・浴室・洗濯室・倉庫などを備えている。大字単位を対象地域とし、自宅を所有したままの入居者もいて主に夜間の利用が多く、また豪雪地帯では冬季に特にそのメリットがあるとみられている。共同生活の基本である調理や清掃などの分担については、仕事量や担当人数の決め方など入居前には掴みきれないこともあるようで、意図した通りの運営が行われていないところもある。今後の課題でもあろう。ケアに関しては、健康な高齢者を対象としているため専門家の派遣はなく、近隣の住民が時間を限って共同部分の管理などを行っている。診療所を併設しているものや、料理教室やゲートボールなどで地域の高齢者との交流をはかるなど、高齢者福祉の核であることを目指していると言えよう。

施設名 (所在地)	大井和ひとり暮らし老人共同生活支援施設 (中央町大井和西地内)
定員	5人
規模	建物：150㎡ 設備：居室4室(個室3,2人部屋1), 食堂, 厨房, 浴室, 便所, 多目的ホール, 緊急通報装置
入居者	3人(女3) 年齢：67歳～85歳
運営	平成7年5月29日運営開始
特色	<ul style="list-style-type: none"> ・診療所と一つの建物として整備 ・旧大井和村の中心地で、役場支所, 駐在所, 郵便局に近接 ・岡山寺の参拝客等を対象に特産品の生産, 販売, 観光案内



平面図

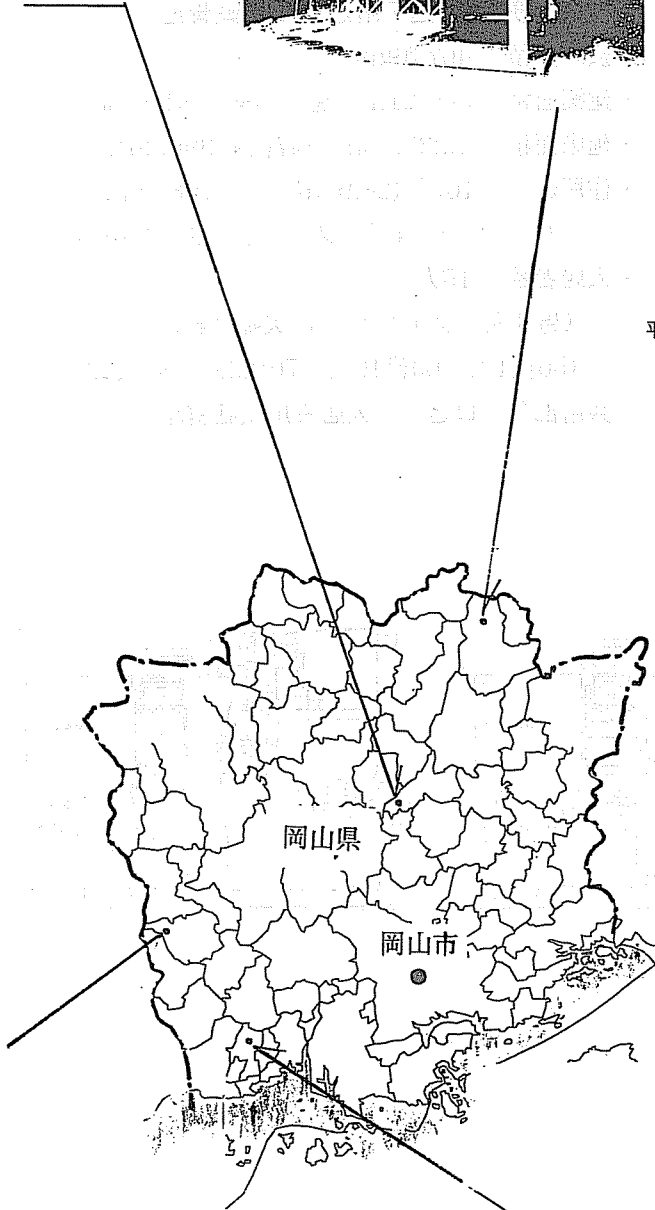
施設名 (所在地)	川上町ひとり暮らし老人等共同生活住宅 しあわせ荘 (川上町高山市地内)
定員	5人
規模	建物：400㎡ 設備：居室5室(個室5), 厨房, 浴室, 便所, 倉庫, 趣味室, ホール(食堂, 娯楽室), 管理人室, 緊急通報装置
入居者	5人(男2, 女3) 年齢：68歳～89歳
運営	平成7年4月20日運営開始
特色	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者福祉のむらづくり事業の一環として取り組み, 入居者を地域ぐるみで支援 ・生活しやすい明るい建物 ・ゲートボール場や家庭菜園を一体的に整備する予定



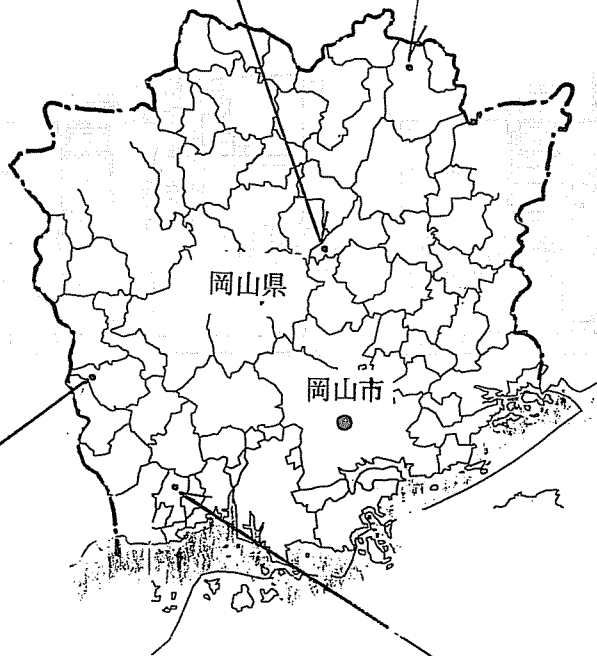
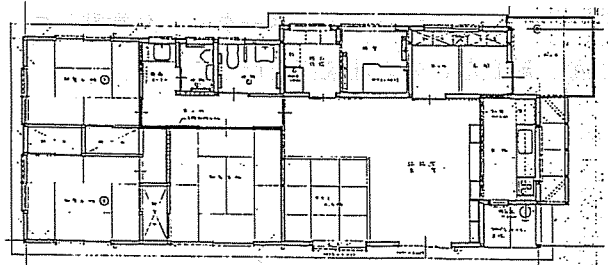
平面図



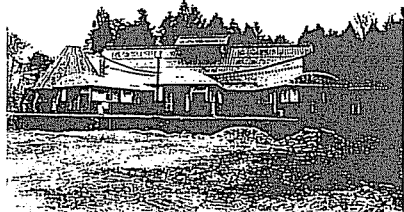
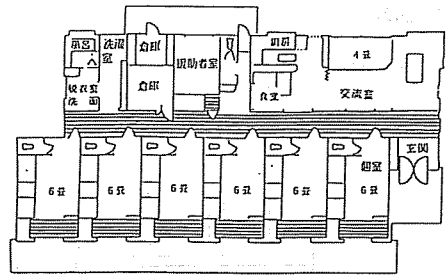
施設名 (所在地)	加茂町ひとりぐらし老人の家 (加茂町倉見地内)
定員	4人
規模	建物：106㎡ 設備：居室 3室(個室 2, 2人部屋 1), 厨房, 浴室, 便所, 交流ルーム(食堂・談話室), 緊急通報装置
入居者	2人(女) 年齢：73歳・75歳
運営	平成7年6月7日運営開始
特色	<ul style="list-style-type: none"> 豪雪地帯であり、特に冬季における共同生活にメリットがある 料理教室等を実施し、地域の高齢者との交流 園芸作物を共同栽培



平面図



平面図



施設名 (所在地)	サニハウス鳴方 (鳴方町地頭上地内)
定員	6人
規模	建物：324㎡ 設備：居室 6室(個室 6), 食堂, 厨房, 浴室, 便所, 倉庫, 交流室, 援助者室, 緊急通報装置
入居者	4人(男2, 女2) 年齢70歳～89歳
運営	平成7年4月20日運営開始
特色	<ul style="list-style-type: none"> 都市部におけるひとりぐらし老人に対するモデル施設として整備 地域の高齢者と、座談会、ゲートホール等による交流 野菜の共同栽培

b. シニアハウス江坂

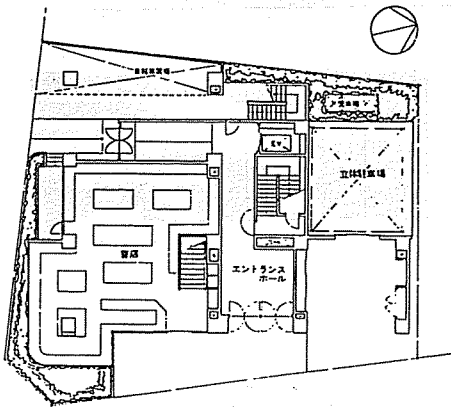
もと法政大学教授の駒尺喜美さんと仲間の「地域に開かれたウーマンズハウス+シニアハウス」の構想を生活科学研究所が具体化したグループハウジングで、1991年2月に完成した。

地主が施主となり、研究所が建物を一括借り上げて、地主と共同で運営している。入居者は終身利用権を買うか、賃貸（家賃+ホールなどの施設利用料）とするかを選択できる。

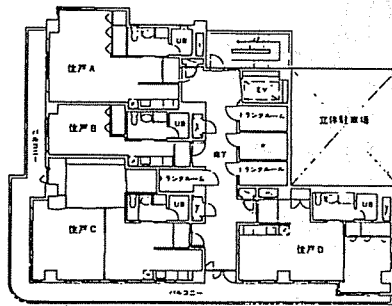
月1回のおしゃべり会以外に居住者の義務や規則はなく、「生活コーディネーター」が常駐して医療、給食などの管理業務を行っている。

建物概要

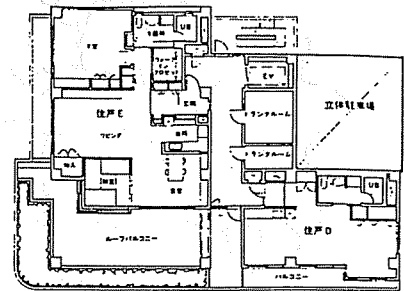
- ・ 建築地 大阪府吹田市
- ・ 構造規模 RC造7階建 一部鉄骨造
- ・ 敷地面積 467.49㎡
- ・ 建築面積 380.21㎡ (建ぺい率 81.33%)
- ・ 延床面積 2,235.36㎡ (容積率 396.46%)
- ・ 住戸数 10戸 (28.99㎡ ~ 108.56㎡)
(ワンルーム4戸、ファミリータイプ6戸)
- ・ 入居者数 15人
(男3人 女12人 内夫婦3組)
(50代1人、60代10人、70代2人、80代2人)
- ・ 共用部分 ロビー、入居者用談話室など



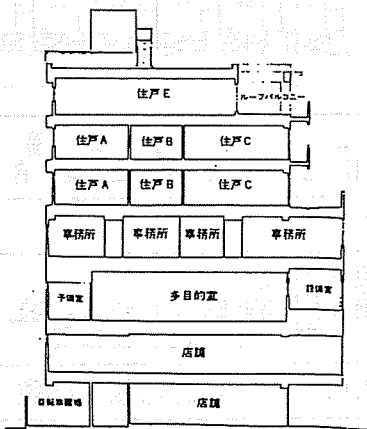
1階平面図



5・6階平面図



7階平面図



断面図

- 住居 10戸 ———— 住空間
- 女性のためのレンタルオフィス8室 ———— 職空間
- 多目的ホール「びいどろほおる」165㎡ ———— 遊・学空間
- 自然食レストラン
- 児童図書専門店

資料出典

『仲間と暮らす家づくり』21世紀の住宅研究会編 日経BP出版センター発行

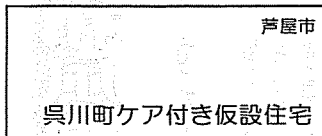
『建築設計資料』4巻 1991年 建築用語研究会発行 建築資料研究会発行

5. 仮設住宅とコレクティブハウジング

仮設住宅からコレクティブハウジングへ

住宅性能や立地条件等、仮設住宅が住まいとして不十分な機能しかもたない中で、芦屋市、尼崎市の“地域型仮設”と呼ばれる高齢者・障害者用のケア付き仮設住宅では、コミュニティのなかでの生活による高齢者・障害者の身体機能や精神状態の改善などの例が多

く報告されている。また一般仮設住宅の中でも住民やボランティアの手によって“ふれあいセンター”や空室を“協同利用”的に活用したコミュニティも発生してきている。こうした暮らし方の工夫こそが、コレクティブハウジングの芽であり、こうして育ちつつあるコミュニティのあり方を恒久的なコレクティブハウジングに生かしていくことが必要であると思われる。

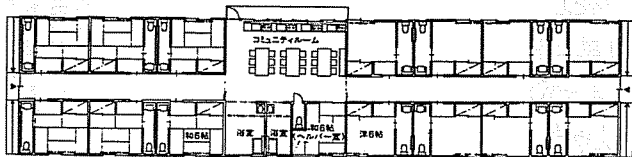


呉川町には8棟(95戸)の仮設住宅が軒を接して建てられている。その一角の3棟がケア付き仮設住宅で、平屋建ての1棟に14人が共に住まう。

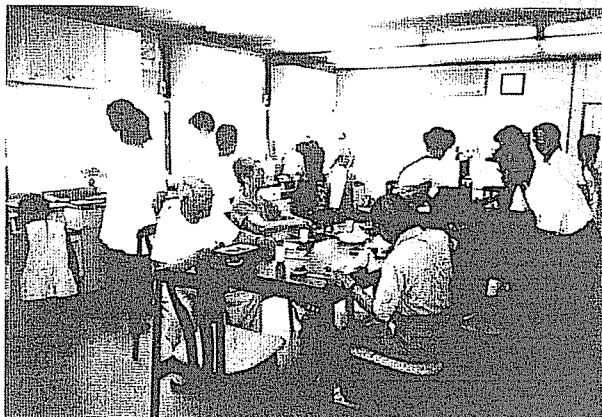
1居室は16m²の広さで、6帖(和室と洋室があり選べる)にトイレと洗面スペース、押し入れ、ゆったりした入口スペースである。それに14人の共同生活のためのダイニングキッチン(約45m²)、2つの浴室と職員詰所がある。一人に一室なので二人世帯の場合は二室が使える。

スタッフ13名が、昼間は各棟に1~2人、夜間は4棟で2人になって、24時間勤務している。

食事は原則として自炊ということだが、希望者には月、水、金の昼食づくりはボランティアの支援があり、居住者やスタッフも一緒になって食事を作る。夕食は31人が芦屋市福祉公社の配食サービスを利用している。

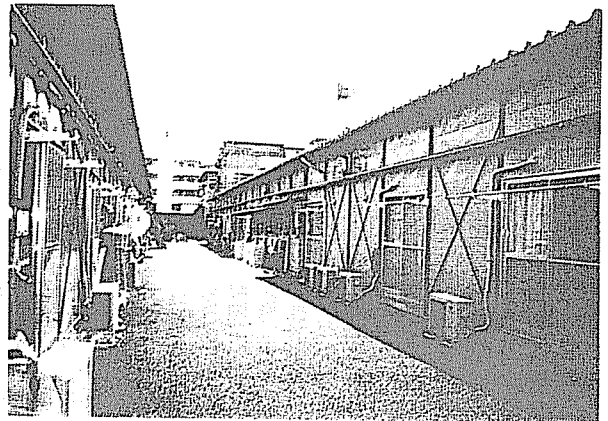


平面図



ボランティアによる昼食サービス

写真提供：石東直子

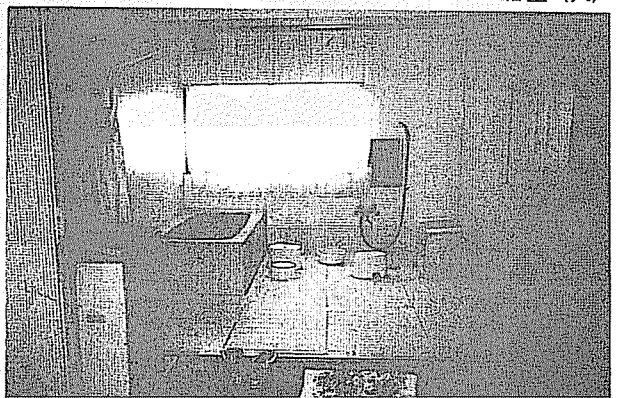


外観

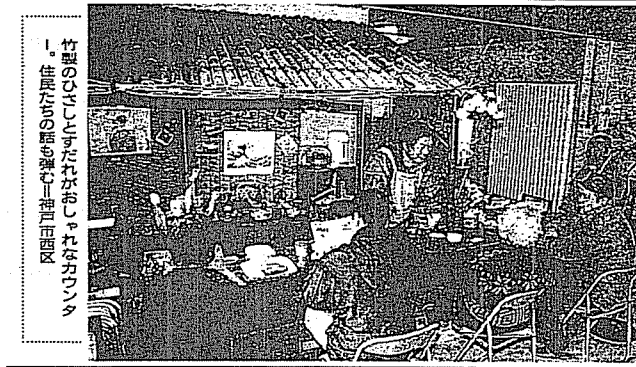


ダイニングキッチン

浴室(大)



神戸新聞1996.2.24



竹製のひざしきやテーブルが、住民の生活の中心となっている。西神第7仮設住宅。

西神第7仮設

うけでます和風喫茶

竹のカウンターで一服 心ほぐすたたずまい

神戸市西区の西神第七仮設住宅のふれあいセンター内の「喫茶」が、住民の憩いの場としてにぎわっている。竹製のカウンターなど和風のつくりとホッとするような年中無休の運営が特徴。今後、ミサイスの大改築や日本庭園など、施設も充実させる予定で、遊心らしい空間づくりを進めている。

同仮設住宅(千六百戸)を支援する「阪神高輪町・西神支線ネットワーク」が、住民の協力でオープンした。メニューは、

コーヒー、紅茶、日本茶、昆布茶など。お茶、料金は無料でカンパを払う。一日六十九人の客が訪れ、カラオケ喫茶となる月曜日は特に多い。船屋正人は「避難者が落ち着く場所、毎日話をするのが楽しい」と話す。震災前のように賑わいを見たい。

に喫茶店に通えなくなったのが狙い。仮設住宅の住人の天候、下校後の子ども、民のふれあいの場となる喫茶店が各地に広がってほしい」と話している。

被災者を慰め、励ます

豊中市立岡町図書館が「豊南町南住宅」(百三十七戸)で昨年八月から「服部緑地住宅」(二百八十八戸)で同月から始めたマイクロバスを使った「動く図書館」が人気を集めている。

「動く図書館」は同市内六カ所の図書館の中で岡町図書館だけが実施。来館が難しい地域や市内全域に設けた約五十カ所の「ステーション」にマイクロバス二台で月一回程度巡回している。

仮設住宅への巡回は、図書館から離れた仮設住宅の小学五年男児も「借

岡町図書館 マイクロバス

同市末広町の自宅が全壊した主婦(50)は服部緑地住宅のステーションを訪れ、「ここはここに行くにも不便。図書館から出前してくれるのがありがたい。巡回の日が楽しみ」。

同市服部西町で被災した小学五年男児も「借



仮設住宅に本を出前

「動く図書館」で本を借りる被災者。豊中市の服部緑地住宅で。

借りられる期間が長いので借りやすいと好評だ。岡町図書館の担当者「震災後、図書館としてできることを考え、十六カ所の被災地に約千二百冊の児童書などを持ち込んだ。仮設住宅の巡回は三十分の停車時間だが、読書が心の慰めや励ましになれば」と話していた。

問い合わせは岡町図書館(06・8433・4555)。

パンやお菓子を持ち寄り、コーヒーを味わう住民たち＝神戸市中央区、ポートアイランド第1仮設住宅

モーニングで分かつ安らぎ



ポーアイ第1仮設

「ふれあい喫茶」開店 住民 協力 コーヒーを無料で提供

モーニングコーヒーを無料で楽しくと、神戸市中央区のポートアイランド第一仮設住宅に七日、住民が運営する「ふれあい喫茶」が開店した。コーヒーを無料で提供し、パンやお菓子を持ち寄り、住民たちが集まって朝食を「センター」。住民には一兵たはうがおししいので

喫茶店が開かれたのは、入居しの高齢者が多かった同住宅の集会所「ふれあい」の一室で集まって朝食を「センター」。住民には一兵たはうがおししいので

はと、約一カ月前から自給していた住民をいかにサビス面でも本格的な喫茶店の運営を始めた。震災後の復興は進んでいないが、住民が助け、用意した十八個を振り分け、汚れたままとして再生した。コーヒーメーカーで作ったコーヒーは無料、今後、持ち寄りパンを振るとスターも揃えける計画だ。営業時間は午前十時から正午まで、定休日は土曜日、日曜日、祝日。レス役は住民が担当して運営する。震災前、喫茶店を

街路整備再考へ
早と市へ要望書
西須磨の2自治会
神戸市、西須磨地区の西須磨東自治会(会務部長 会)と西須磨自治会連合会(会長 西須磨自治会)は、地区の幹線道路の掘削・整備に因る要望書を、早と市に提出した。同地区では、市が街路掘削で、須磨多聞線、中央幹線、千舞線の三路線の新設

仮設住宅団地に「憩いの場」



仮設住宅の空き室が住民たち念願の「ふれあいセンター」になった＝芦屋市川西町の川西グラウンド仮設住宅で

ふれあいセンター

空き室を衣替え

テレビ・電話も設置

朝日960331

仮設住宅の空き室を「ふれあいセンター」に衣替えする工事が進んでいる。仮設住宅団地の敷地に県がプロシハブのセンターを設けたが、敷地の狭小規模の団地には設置できなかった。入居から一年が過ぎて転居する人が少しずつ増えてきたため、空き室をセンターに転用することにした。住民は「ようやく憩いの場ができた」と喜んでいる。

建設中の団地も含めて、二機やファクス、コピー機、テレビなども備わ。百二十四カ所が用意。改修工事は、隣室との壁に防音パネルをはめ、玄関に防音パネルの設置を自治会の集会所に利用してきた。そのうち、県の条件(五十戸以上)に沿って七団地にセンターを外して空間を広げたところもある。イベントなどの「ふれあいセンター」は、従来型を運営費に補助があり、電話

仮設住宅に小公園



芦屋・高浜町

焼失住宅の跡地を利用

「夏には盆踊りも」

朝日 960416

できたばかりの公園で砂遊びをする子どもたち＝芦屋市高浜町で

「場に使えるかも」と住民の期待を集めている。公園は、昨年十一月二十一日、火災にあった高浜町十番仮設住宅（一棟、十三世帯）の跡地にできた。縦四十七メートル、横七メートルの長方形の土地に、七平方メートルの砂場一カ所と花壇四カ所が設けられ、木の切り株の腰

子らは大喜び 住民憩う場に

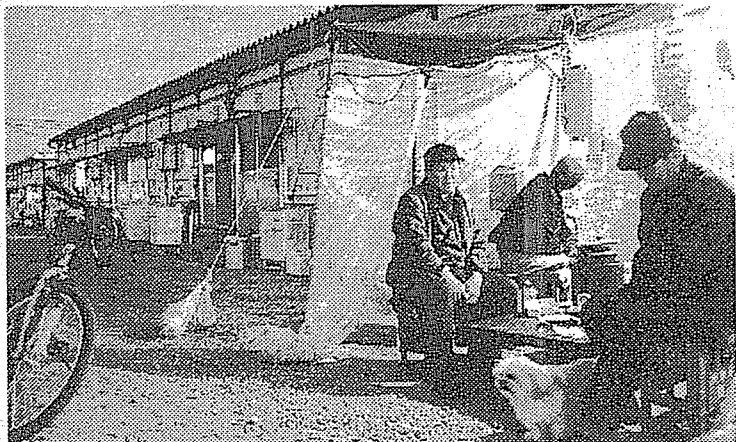
「夏には盆踊りの会あり、約六百世帯が入居している。幼児も少なくないが、周辺に公園がなく、仮設住宅の玄関前の砂利道や住宅わきの車道で遊んでいた子どもたちは大喜び。親らにも「これで安心」と好評で、「夏の盆踊りの会」があり、約六百世帯が入居している。同居自治会の小泉清会長も「長きにわたると、付近には仮設住宅が七百三十戸余りある」と話していた。

昨年、火災で焼失した芦屋市高浜町にある被災者用仮設住宅の跡地が、小公園に生まれ変わった。周辺に十分な遊び場がなく、やむを得ず車道などで遊んでいた子どもたちは大喜び。親らにも「これで安心」と好評で、「夏の盆踊りの会」があり、約六百世帯が入居している。同居自治会の小泉清会長も「長きにわたると、付近には仮設住宅が七百三十戸余りある」と話していた。

自由に入れるようになってきた。砂遊びをしていた近くの立木舞ちゃん（五）は「砂場で抱だんごも山をつくって遊べる。できてよかった」とうれしそう。長男（三）を迎えて来ていた主婦古塚美千代さん（三）は「これまで子どもを安心して遊ばせる場所がなかったため、よくぞ造ってくれた」と話していた。

朝日新聞1996.4.16

西神第七仮設住宅にお目見えした仮設店舗。行政は撤去を求めるが、入居者の憩いの場に



毎日新聞1995.12.14

6.住宅復興とコレクティブハウジング

震災を契機とした新しい協働居住方式の提案

1.住宅復興の課題

住宅復興の最も大きな課題は、今回大きな被災を受けた「木造賃貸住宅」に居住していた「高齢者世帯の居住の確保」である。①低所得であること ②生活がコミュニティ依存型であること ③施策対象者数が大量であること、など質的にも量的にも困難な課題である。

「神戸市震災復興住宅整備緊急3カ年計画」では ①公営住宅の新規供給戸数を10,000戸と震災前の5～6倍としたこと ②「特定目的借上げ公共賃貸住宅制度」を新たに制度化し被災木賃の再建を推進すること ③住宅市街地総合整備事業による従前居住者用住宅を住宅・都市整備公団、神戸市あわせて7,500戸確保し、特に被災の大きかった地域での低廉な賃貸住宅の供給を図ること、などにより賃貸住宅の戸数の確保を図っているが供給場所・供給時期など、なお大きな課題を残している。特に今後、事業実施段階で「高齢者の大量・高密度居住がもたらす住生活に関する課題」が顕在化してくるものと考えられる。

2.地域型仮設住宅に学ぶ

「協働居住方式」の重要性と有効性

地域型仮設の発想のコンセプトは「学生下宿」(土地の有効活用と被災市街地での供給)と「コレクティブハウジング」(高齢者の集住対応)であった。神戸市の地域型仮設はその供給戸数の多さから「学生下宿」に近いものとならざるを得なかったが、芦屋市のそれは、より「コレクティブハウジング」に近い施設内容となっている。また

者の生活は仮設住宅ではありながら相当落ち着いたものとなっている。少しのハードの違いか適切なソフトのサポートにより非常に大きな生活の違いをもたらしている良い事例である。「協働居住方式」の採用が公的賃貸住宅供給上の多くの課題を解決するキーポイントになる可能性を秘めているのではないだろうか。

3.コレクティブハウジングの導入による

魅力ある都市集住の実現

コレクティブハウジングには2つの効果がある。ひとつは相互扶助によりマイナスの発生をゼロに近づけることであり、2つめは集まって住むことにより「より充実した豊かな生活」を実現できることである。このコレクティブハウジングの特性を活かした取組は、震災対応という緊急避難的な取組からだけではなく、まもなく到来する超高齢社会への基本的・長期的取組としても極めて重要である。現在、日本においてコレクティブハウジング導入の検討は行われつつあるが、本格的に実施されたケースはいまだ聞かない。この段階での公的住宅での先行実施は「モデル事業」にならざるをえないが、反面、モデル事業ならではの取組が可能であるとも言える。実現に向けて各方面からのご支援、ご提案を頂きたい。

(神戸市住宅局住環境整備課鈴木三郎課長)

<参考資料>

i. コレクティブハウジング事業推進 応援団 定期ミーティング議事録

活動経緯概要

◆第1回ミーティング (1995.9.21)

小林氏によるコレクティブハウジングのわが国における実現性、東京都での先進的取り組みや神戸市における研究会の様子などの紹介の後、石東氏により、スウェーデンの現地視察報告（フェルドクネッペン、プレストゴースハーゲン）が行われた。

この後のフリートークで、震災復興まちづくりに携わる人々から、被災地ではコレクティブハウジングがぜひ必要である、手掛けてみたいとの声が多く聞かれた。

◆第2回ミーティング (1995.10.9)

都市計画家以外の考えを聞きたいとの意見を受け、ケア付き仮設住宅の職員ならびに居住者コープ型住宅プランナー、住環境改善のボランティアなどにより、現状報告とコレクティブハウジングに対するコメントを頂いた。また、平山氏より協同住宅の類型化の概説、アメリカ等諸外国のプロジェクト事例紹介があった。

フリートークでは、被災地へのコレクティブハウジング導入に際しての留意点など様々な立場での意見交換がなされた。

◆第3回ミーティング (1995.11.6)

前回に引き続き、医療関係者、仮設住宅支援NGO関係者、大学関係者、プランナー等による活動報告とコメントを頂いた。報告は仮設住宅での被災者の生活実態に重点が置かれた。

フリートークでは、被災者のメンタルケアや福祉制度との関連等が話題となった。

◆第4回ミーティング (1995.12.9)

コレクティブハウジングへの一般への理解と普及を目的として、「防災」国際フォーラムに参加し開催した。パネルディスプレイを使った住まい方紹介と、「応援団」の活動報告を行った。

意見交換では、食事や人間関係など住み手の立場での意見が多く、ソフト面の充実の必要性が示唆された。

◆第5回ミーティング (1996.1.22)

コレクティブハウジング推進の方向性として以下の6項目を掲げるとともに、「応援団」の活動の姿勢として広く訴え続けることを確認した。

1. ライフスタイルの選択肢の1つである。
2. 協同（協働）居住のルールづくりが必要。
3. 食事を核にすることへの検討（賛否）を深める。
4. 同時に食の協同化のメリットについての検討も深める。
5. 被災地ならではの必要性を再認識し、公営住宅での早期実現化を要望する。
6. 「全て失った。でも強く生きよう。」という老人達がコレクティブハウジングを育てる。

◆第6回ミーティング (1996.3.4)

各方面でのコレクティブハウジング実現へ向けての動きを紹介すると共に、ソフト面での取り組みの必要性を追認し、今後の応援団の活動の方向を確認しあって、第1期応援団活動を終結することとした。

第1回ミーティング 議事録 (1995.9.21)

○小林氏のあいさつの要旨

- ・コレクティブハウジングという、ともに住まう居住形態を震災復興にあわせて事業化していきたい。
- ・東京ではすでに事業化への動きが始まっている。
- ・神戸市においても研究会として動き出した。

○石東氏のあいさつの要旨

- ・小谷部育子氏より、この新しい住まい方については前々から聞いていた。
- ・仮設住宅の現状を見ると孤独な生活をされている方々がたくさんおられ、みんなで語らいながら生活すれば生き

- ・居住者が、少しずつ面積を出し合って共有ベースを確保し一緒に住まうのがコレクティブハウジングである。
- ・事業の性格から、我々民間では対応が難しいので、ぜひ公的に進めていただきたい。
- ・我々は、様々な面からの検討を進め、事業の実現を早めたい。
- ・コレクティブハウジングは、様々な復興住宅のなかの一つの選択肢として考えている。

○スウェーデンのコレクティブハウジング視察の報告 (石東氏)

◇フェルドクネッペン

- ・入居資格は40歳以上、学童期の子供がいないこと。(43戸、50数人が居住)
- ・コーポラティブ方式で5年ぐらいかけて建設、92年より入居開始。
- ・居室は36~76㎡、小さなキッチン、トイレ、浴室が付帯。
- ・共同スペースは、共有ルーム（工作室、図書室等）、厨房、食堂。
- ・夕食のみを一緒にとり、交替で食事当番をする。前日までに食事を注文する。
- ・居住者のなかに栄養士がおり、メニューをチェックする。
- ・メンテナンスも共同で行っており、管理費のなかからペイバックを受けている。
- ・ともに住むメリットは、情報交換、大きな厨房設備が使える、食事の重要性が認識される等である。
- ・年齢層がミックスされていることが重要。

◇プレストゴースハーゲン

- ・賃貸で31世帯が居住。入居資格は特になし。保育所が併設されている。
- ・メリットは、親が忙しくても、子供の食事が必ず供給されること。
- ・1か月に1回の食事当番、1か月に1回の皿洗い当番がある。
- ・共同で住まうことを選んだというより、ライフスタイルの指向からこの住まい方を選んでいる。

◇感想

- ・各戸から少しずつスペースを出し合い、共有のスペースを持つことにより、生活に豊かさをもたらしている。環境負荷の軽減にもつながると思う。
- ・被災地にこのままの形態を持ち込むことは難しい面もあると思う。

◇良いところ

- ・食事を共同化することにより、個人では持ちにくい設備が持てる。
- ・食事の安定的供給。食事を作る楽しみ（みんなに喜んで食べてもらえる）。他人の料理が学べる。共同購入で材料が経済的。男性も料理に興味を持てる。
- ・織物や工作室があることにより、生活が豊かになる。
- ・共同メンテナンスはコミュニティ意識を高める。
- ・水やりや郵便などを気にせず旅行ができるので便利。

○補足 (平山氏)

- ・スウェーデンやデンマークなどの事例は、居住者がみな経済的にも豊かであり、神戸に合うのか。居住形態も低密度が基本である。
- ・冬が寒く厳しい環境条件から固まって住文化的土壌があるから成立するのではないか。
- ・北欧は食文化が貧困な地域だから、共同で食事できるのではないか。
- ・アメリカのホームレス用施設の方が神戸にとって参考になるのでは。

○フリートーク

- ・世代交代はどうするのか。
 - 視察した施設では希望者が列をなしている状態である。
 - 日本でもコーポラティブの場合、他の居住者に声をかけてから売却している。
- ・昔の公共住宅は、近所の風呂屋あるいは敷地内に銭湯のあるところもあってコレクティブに近かった。
- ・共同化によるデイケアや保育園等文化的利点をまず考えないと、所有権が前面に出ては事業推進が難しい。
- ・イスラエルのキブツや修道院は、一種のコレクティブハウジングである。京都府の木津町には女子寮と老人談話施設が一体化した施設がある。

- る。
 - ・コレクティブハウジングは基本的にはケア無し、あくまでも住宅として捉えるべきである。
 - ・被災者のなかには老人も多いのでケア住宅は必要であるが、コレクティブハウジングとは対応を別にする必要がある。
 - ・相互扶助の精神は、やはり神戸に使えると思う。
 - ・共同空間はまとまったスペースを確保すれば、使い方は住民の自由でよいのではないか。
 - ・事業化の種はありそうである。地元で説明する紹介パンフが必要。
 - ・ケースワーカー等、建築家・都市計画家以外の意見が欲しい。
- 次回は他業種の人を交えて、もう一度フリーディスカッションを行いたい。

第2回ミーティング議事録 (1995.10.9)

○前回ミーティングの要旨説明

○芦屋市ケア付き仮設住宅の概要説明 (職員：高尾氏)

- ・10/8の神戸新聞に詳しく紹介されたので、興味のある方は読んでいただきたい。
- ・この仮設を施設と見るのか、住宅と見るのかは難しいところであるが、ある人にとっては施設としての対応が必要であるが、そうではなく住宅としての機能だけで生活できる人もいるので、ケース・バイ・ケースで考えた方がよいと思う。
- ・施設の特徴としては、廊下が広いこと、中央に共有スペースであるDK (ガスが使えるのはここだけ) を有していることである。車椅子対応の調理台がある。風呂は大小の2つあるが、脱衣場がやや狭い。
- ・畳の部屋6室に対して洋室が8室あり洋室の方が畳の制限を受けずトイレが広がっているが、畳の方が転がりだったり身障者には使い勝手がよいので希望者が多い。
- ・当施設は、単に高齢者用というのではなく、たとえば36才の脳性麻痺の人や軽度の精神疾患の人もおられ、ハンディキャップの混合型住宅という感じである。
- ・当初入居者間のトラブルはあったが、それほど重大なものではなく相互のコミュニケーションによる理解で解決されている。
- ・欧米のグループホームやシェルタード・ハウジングではこのような混合型のものはほとんど見られない。
- ・ただし、寒暖の問題や音の問題など、今仮設で言われている欠点はそのまま備えている。

○芦屋市ケア付き入居者の感想

- ・入居当初は淋しかったが、長く住むうち快適になってきている。期限がきたらどこへいこうか、隣人と不安を話し合うことがある。
- ・将来仮設を出るとき、同じような形態のところがあればよいと思う。所有のマンションがあるが建て替えを検討中 (時間がかかりそう) であり、よい施設があれば権利放棄しようかとも思い迷っている。
- ・食事は、夕食は市福祉公社の給食サービスによる弁当、昼食は月水金に地域のボランティアの方が作ってくれる。便利で栄養面にも配慮されており、一人と違い材料を無駄にしないのがよい。
- ・部屋はベッドの部屋で、震災前の暮らしに比べればよくはないがこんなものと思う。
- ・居住者どうしのつきあいは深くないが、同じ棟で会えば挨拶する程度には仲良くやっている。料理をしてみんなに配っている人もある。全てを自炊で賄っている人はいないようだ。(高尾氏：市福祉公社の弁当は量が多いので翌日温めたり雑炊にしたりで朝食を食べる人も多い)
- ・洗濯は共用の洗濯機を順番に利用している。

○「箕面コレクティブハウス」の概要 (プランナー：伴氏)

- ・「箕面コレクティブハウス」(アルボ---大きな木)は、分譲地におけるコーポラティブ・ハウスとしてできあがった。9世帯のうち11人が女性、3人が男性である。
- ・裕福な女性どうしの高齢者カップルの住まい探しとして始まった。当初シニア・ハウスにいたが不満があり、土地を探したが資金が多くなるためコーポ形式の話が出た。朝日新聞に取り上げられ、最初60人が集まった。結果

9世帯が残り、厨房等共同施設の話はいろいろ出たが、できあがったのはデッキだけで、老婦人達の施設をみんなが使うことに落ちついた。

- ・コレクティブは分譲では難しいのではないかと思う。賃貸の施設を今計画している。賃貸であればオーナーは住み手に関係なく共有部分をつくれる。また分譲の場合、売却等の将来面で不安を持つ人が多い。

○サービス・アパートについて (ボランティア・ネットワーク：西脇氏)

- ・震災後、住宅に関する応援をいろいろ行ってきたが、実感として人は生きる基盤として住宅がしっかりしていないとだめである。またサービスとは必要とされているものを充足していないとだめである。

- ・スウェーデン、デンマークのサービス・アパート (所により呼び方は様々で考え方が異なる) を見てきたが、ここには、誰と誰と一緒に住むかから出発するという違いがある。また、多様な年代、身障者と健常者が一緒に住むことがあたりまえである。

- ・施設の特徴としては、保育、学童保育、役所機能等の社会的サービスとデイケアや高齢者医療等の福祉サービスが複合し、地域の核を形成していることにある。

- ・北欧でこのようなアパートができた経緯は、サービスの対象者が広いスペースに分散していることなど非効率的なことへの打開策、つまり効率の追求からきているようだ。このような前例から見るかぎり、ケアあるいはサービス抜きにコレクティブは考えられないと思う。

- ・北欧では公共サービスについて、たとえば住宅は国、医療は県、福祉は市というように責任の所在が明確であり、合理性に根ざした責任所在の明確な土壌がこのようなアパートを成立させる要因になっているのではないか。

- ・また、たとえばナーシング・ホームであっても日本と違って出入りの自由が保証されており、家族や近隣の人がいずれも遊びに来る。サービスを受けやすいことに集合の利点があるのであり、高齢者、身障者、学童、幼児に対するケア・サービス抜きに考えるべきではないと思う。

○各国のプロジェクト例を紹介 (神戸大学・平山氏)

- ・配布の資料をもとに各施設の特徴を紹介。
- ・戦前にはいくつかの類型に属するコレクティブのような住まい方があった。海外では宗教やイデオロギーに基づくものがあり、日本では都市において自然発生を見た中廊下型の木賃アパートがこれに近い住まい方である。

・協同住宅の源流

- ◇宗教ユートピア
- ◇社会主義ユートピア
- ◇資本主義ユートピア
- ◇都市居住様式の自然発生

・協同住宅の類型

◇コレクティブハウジング

- ▽コレクティブハウジング---建物組合が所有し居住者は組合の株を持つ。

- ▽コ・ハウジング---デンマークやノルウェーにあり、前者より規則が緩く思想に基づかない。

- ▽セントラル・リビング---都市型で高密度な住宅である。(オランダ)

- ▽コラボラティブ・ハウジング---上記様々なものをひくくめるための総称。

- ◇シェアド・ハウジング---基本的には共用部を持たない。

- ▽アクセラ・ハウジング、エコ・ハウジング---金持ちの老人が友人に (基本的に) スペースの一部を貸す。本人が離れて建ててそこに住む場合もある。

- ▽トラフ・ソール・ハウジング---ホームレスや母子世帯について、居住期限を切って社会復帰を図る。

- ▽グループ・レジデンス

- ▽SRO (Single Room Occupancy) ハウジング

- ホームレス・ホテルを居住用に当てたもの。

○感想、その他

- ・須磨区・中央区では地域型の福祉住宅は、トイレ、風呂が共同でしかも2階建である。芦屋、西宮がうらやましい。夜はケアする人がなくガードマンのみである。風呂、台所の利用についてソフト面の支援がなく評判も悪い。(垂水福祉施設：服部けいこ氏)

- ・このような住宅は、復興住宅のモデルとして考えている

われる。(消費デザイン研究所：杉原じゅんこ氏)

- ・長田では高齢者が戻ってこれない現状がある。また、まちの医院はかつての鍋湯と同じように住民の情報交換の場であったが、医者も高齢のため帰ってこれない。長田では再開発で高層住宅が計画されているが、1階は店舗にしないでぜひ特養ホームなどにあてて欲しい。(兵庫県保険医協会：柳原ゆきこ氏)
- ・震災の影響やわが国の土壌を勘案した新しいケアを考へなくてはならない。(高尾氏)
- ・住戸は私有財産の頂との考え方が一般的であったが、震災により生活の入れ物としての重要性が再認識された。公共がマンションの一部を買い取り、共用施設として提供してくれるような制度があれば協同居住はより身近になるのでは。(弁護士：長谷川氏)
- ・まず仮設で実験し、本設で実践する事が肝要。いずれにしても急ぐ必要がある。

第3回ミーティング議事録(1995.11.6)

- 長楽地域型仮設の健康・福祉・住宅調査まとめ(神戸協同病院：上田耕蔵氏)
- ・長楽地域型仮設(長田区)におけるアンケート調査結果を基に、入居者の抱える課題を紹介。
- ・寮形式(1室、共同風呂・トイレ)で、相談員1名が平日入居者の世話をしている。
- ・入居者は男性41人、女性60人の計101人で、高齢者・病弱者・低所得者等が多い。
- ・震災後病気の増加や体の不自由さを経験している入居者が、各々3割おり、長期の避難生活が体力を低下させていることがわかる。一部介護の必要なものは一般仮設の2倍である。
- ・気力が起きないなどのうつ症状の人が多く、震災のショックと展望のない避難生活よりなんらかの精神的ダメージを受けている入居者が大半である。
- ・入浴は、手助けを必要とする人もある。ボランティアが手伝える機会をつくっている。入浴頻度の低い人もある。
- ・独居の男性高齢者は、配食サービスが絶対必要である。訪問看護、ヘルパー、デイケアを頼んでいる人が多い。
- ・ほとんどの人は仮設を出るめどが立っていない。元の住居形態は借家が半数近くあり、しかも安い民間賃貸が多かったため、高い家賃への懸念から今後の希望として公共住宅を望む人は少ない。
- ・仮設後支払い可能家賃は3万円以下であり、多少の不満を抱えているものの、4割の入居者が期限(2年)後も仮設に住み続けたいとしている。この中には、持ち家が再建された人も含まれている。
- 仮設住宅の環境について(市川氏：仮設住宅支援連絡会/地元NGO)
- ・内容は、仮設住宅支援ボランティアの連絡会議である。今年5月に結成され、現在30団体が所属している。
- ・現在の課題は、(震災直後もそうであったが)資金面とボランティアをコーディネートする人材がいなくてである。
- ・PRのための全国キャラバンを予定している。震災後の経過が神戸の外に知らされておらず、あたかも過ぎ去って終わったことのように感じている。継続的な情報の発信が必要である。
- ・仮設住宅は、現在690ヶ所、約5万戸ある。当初は段差、風呂などの使い勝手の問題が多くあった。現在は高齢者世帯への手摺の設置等については申し出れば改善される。少し進展した。
- ・しかし課題はまだ多く残されている。たとえば、棚に手が届かない。同じ形状で自分の家の位置が分からない(凍死した女性がいる)。冬に向けての暖房等(エアコンは全戸ついたが、電気代を考えて使わない人や使い方の分からない人、石袖ストーブの使用、すきま風など)。防音の問題。
- ・コミュニティが崩壊している。第1入居者は高齢者等社会的弱者を優先したために、高齢者が7割の仮設もある。買い物が不便なことや近くに知人がいないことから、家に閉じこもりアルコール依存になる人もある。
- ・現在までに孤独死が18件(事故、自殺を加えると23

- ・自治会発足の動きが出て、668ヶ所のうち200ヶ所できたが、形だけで必ずしも機能していない。たとえば、車の騒音や駐車場の苦情が役員に集中する、役員の結束は固いが、構成員以外への配慮に欠けるなど。
- ・神戸市では100戸あるいは50戸に1ヶ所ふれあいセンターを設置するが、運営費(100万円)を自治会の運営に使用したい(仮設の自治会は解散を前提に機能しており、会費の集まりが悪い)。
- ・雲仙の場合は、仮設が解散されるまで4年5か月かかり、島原ではまだある。長引かないよう、公共住宅のビジョンづくりを要望している。

○小林氏：コー・プラン

- ・1日に仮設とテント村の住民が集まる「市民交流会」が開催される。

○仮設住宅の環境改善への取り組みについて(大西一嘉氏：神戸大学/志賀咲穂氏：姫路短期大学)

- ・今回の震災における仮設の特徴
- ①大量の住宅が緊急に必要なになった。
- ②郊外や人口島への建設が積極的に行われ、市街地では公共空間が使用された。
- ③高齢者や身障者対象の介護付き専用住宅が設置された。
- ・一般仮設におけるアンケート調査では、全ての人が旧住所市内には入居しているが、近隣への入居は少なく、遠隔地への入居が多い。
- ・仮設住宅に足りない設備としては、エアコン、洋服ダンスなど以前の家から持ち出せなかったものが多い。
- ・周辺に欲しい施設は病院、スーパーなど生活関連施設が多い(郊外の不便なところにあるため)。また、役所からの情報が少ないと言った不安も多い。
- ・施設については、防音や設備の使い勝手などが問題である。
- ・姫路の玉出団地のアンケートでは、遠隔地の仮設は当初否定的な声が多く聞かれたが、実際の入居者はそれほど大きな不満はないようである。(よかった、まあまあ71%、とても不満12%)
- ・玉出団地は、ニュータウン開発地であるが、交通の便が悪く未入居が多いため仮設用地が確保できた。(加古川は駅歩5分であるが、高齢者優先入居で高齢化している。)
- ・生活利便に対しても、こまらぬ42%、しかたない30%であきらめもあるが、大きな不満は少ない。
- ・期限後については、出られる21%、めどがたない47%、いすわりたい10%であり、住居の形態は再建19%、民間賃貸26%、公共住宅41%であった。希望地は、前住地54%、市内23%、市街でもよい23%で、前住地への希望は約半数にとどまっている。
- コレクティブハウジング応援団が仮設住宅の住環境改善を考える(安原秀氏：ヘキサ)
- ・今のままでは、なかなか住環境改善への視点が高まらない。視点を高く保つ必要がある。
- ・仮設は、終の住居になってはならないが、住環境改善の視点は、普通の生活における問題点として考える必要がある。
- ・コレクティブハウジングは、まず仮設等で検証し本設に反映する必要がある。
- ・改善点は、コミュニティの場づくり、住戸改善、ルールづくりであり、他の活動との連携が必要である
- ・応援団の取り組みとしては、可能性の限界の見定めを慎重に行い、進める必要がある。
- 質問コーナー
- Q：(大西氏⇨上田氏)うつ症状が4割というのは多いように思うが、仮設の中でのコミュニケーションはどうなっているのか。
- A：隣のおばあちゃんにかゆを作ってあげたりなど、交流はあるようだ。
- Q：あちこちから入居しているのか。
- A：よく調べていないが、長田区内の人がほとんどだと思ふ。
- ・(石東氏)何かアイデアとか提案といったものを頂きたい。
- ・(上田氏)福祉施設ということであれば、(地域型は)ケアハウスに相当する。条件もケアハウスに近いもので

- ・民間型も考えられると思うが、地域型では相談員を付けており、その費用は年間500万円になり、負担できるかが問題。
- ・地震のおかげで既成事実ができた。元に戻ることはないと思うが、今後どう発展していくかが問題である。
- ・厚生省も注目しており制度ができていくだろう（高齢者グループリビング支援事業/来年度から）。
- ミニ・コレクティブハウジングの供給が始まっている（石東氏）
- ・スライドによる施設紹介（岡山県サニーハウス鴨方/奈良民間グループホーム/芦屋ケア付き地域型仮設住宅）
- 環境改善のスライド（大西一嘉氏：神戸大学）
- ・一般仮設における環境改善
- ・メキシコ、アルメニア等外国の仮設住宅の紹介。
- ・アメリカのトレーラーハウスの紹介。
- 生活クラブ住宅相談室のコレクティブハウス研究会（鈴木洋子氏：コープこうべ）
- ・経緯の紹介
- ・事例視察やセミナー、交流会、情報発信など活動報告
- ・参加者、運営、理念について

第4回ミーティング議事録（1995.12.9）

- くらし再建「いま」見すえて～市民とNGO「防災」国際フォーラムへへの参加として開催
- ロビーにコレクティブハウジングの事例と仮設住宅の住環境改善アイデアについてパネルを展示
- 石東氏：コレクティブハウジングとはどんな住宅、住まい方について説明
- 小林氏：これまでのコレクティブハウジング事業推進応援団の活動報告と今後の活動展開について説明。当面の活動としては、普及活動と仮設住宅での住環境改善に取り組もうとしている。
- 鈴木氏：普及活動グループとして一般向けパンフレット（案）を作った。その説明。
- 小林氏：専門的パンフレットの作成を考えており、その目次の説明。
- 出された主な意見
- ・パンフレットは対象者別のがほしい。事業者対象、木賃住宅の建設事業者対象、住み手対象など。
- ・コレクティブハウジングとは何かはまだはっきりつかめない。食事の共同化はしんどいのではないか。
- ・コーポラティブと区別して推進するという意味では賃貸がいいのではないか。
- ・食事の共同化を要に打ち出すのは日本では難しい。おふくろの味の環境で育ってきた者としては。
- ・食事の共同化はメニューの多様性がないので、自由が奪われる。
- ・洗濯機は他人の下着を洗った後ではイヤだと思える人もいる。共同洗濯室は使われないだろう。
- ・共用部分は自分の家でないので、汚く使う。
- ・廊下を広くとって、そこに本箱などを置き、共用スペースとするのがいいのではないか。
- ・面積的に余裕がないのに、そこに共用スペースとしての余裕を作るのは矛盾している。
- ・コレクティブの究極の概念は相互扶助ではないか。ネーミングもそのような意味を持ったものもいい。
- ・変則的な家族（例えば、高齢者、母子家庭、独身者など）を対象とした住まい方としてはニーズがあるだろう。
- ・ソフトのシステムを組み込む必要がある。
- ・老後に対する不安をどこまで期待できるのか。北欧はベースに福祉が充実しているので相互扶助もできる。日本風にアレンジしていくことが必要。
- ・食事のメニューも老人から子供にも合うメニューがいる。
- ・協同生活の義務を負うものはやめた方がいいと思う。自分の生活をプラスするもの（ダンスなどの活潑な動、図書室や編み物などの静）と生活補完型（住戸面積の補完など）とが望ましい。
- ・なぜ住棟内だけの共用なのか。下町では地域の中で共用していた。パブリックがあったからこそ住戸の面積が小さくてもすむ。
- ・コーポラティブの典型的なものだと思う。被災地での災害公営住宅の面積がどんどん小さくなっていくが問題で

ある。共用スペースを取っておくことが必要。しかし、実際の機能としてはトランクルームぐらいではないか。共用の厨房を用意しておくことは必要。不特定多数の人がコレクティブにはいるとは考えられない。

・仮設住宅は手を入れて（住環境の改善）いいのかどうか、分からない。早く引き払うようなことが必要なのではないかとも思っている。

・ゲストルームがあるというのは、いろいろ便利。ロビーがあることも便利。集会所も必要。

○まとめ（石東氏案）

1. コレクティブハウジングはライフスタイルの選択であり、このような住まい方を必要とする人、賛同する人に提供されるのであって賛同しない人が無理に住む（住まわされる）住宅ではない。

従って、本日出された意見の中で、否定的な意見はあまり気にする必要がない。

2. 協同（協働）居住のルールは、居住者同士が決めていくことが大切である。そのための協同居住の学習と協働のトレーニング、協同生活運営の規則づくりなどの期間とアドバイザーが必要であろう。

3. 食事を共同化する事への否定的な意見が多かったが、北欧の事例として食の共同化を核にしたものが紹介されているのが多いが、北欧の場合でも食事は必ずしも中心的な協同生活とはとらえていない事例も多い。ディナークラブを作って、自由に参画しているケース、週2回程度の夕食のみ協働チームでやるケース、レストランなどの外部の食事サービス機構を連携しているケースもある。

4. 「日本的な食文化からみて食事の共同化は難しい」という（否定的）意見があるが、これは実際に食事作りに苦労していない人（誰かがいつでも用意してくれている人など）であろう。自立して生活するという姿勢ではなくて、誰かに支えてもらって生活する視点である。あるいは、食事にあまり関心を持っていない人、反対に自分の食事にすごくこだわっている人かもしれない。

しかし、ひとり暮らし、小家族、男女協業家族では、週のうち何回かの食事の共同化のメリットは大きい。

5. 今、被災地ではひとりで生活しなければならない人が多い。生活をシンプルにして、相互扶助をしながら安心できる心強い生活を望んでいる人が多い。

《いつでも誰かに会えるし、いつでもひとりになれる》、《集まって住む安全性と安心感、集まって暮らすことの楽しさをもつ》、《共に住む、共に生きる、共に創る、相互扶助の暮らし》というコレクティブハウジングは、高齢者、ひとり暮らし、単親世帯には特に適した暮らし方である。

仮設住宅の多くの高齢者が災害公営住宅に移り住むことになるが、そこでまた、孤独死や生きる気力を取り戻せずに自殺していく人が続出するようなことが繰り返されないために、簡易型コレクティブハウジングであっても、まずは公営住宅での早急な実現が望まれる。そこから本格的なコレクティブハウジングが、公的住宅や民間住宅にも芽生えていくことになるだろう。

6. 被災した人たちは人間が変わった。変わって、新しい生活をしようとしている人たちが多い。大震災は新しい暮らし、人間関係を考えていく一つの大きなきっかけになった。辛い体験であったが被災地からコレクティブハウジングが育っていく機運がある。（年末に長田区の仮設住宅居住の高齢者との座談会をもった。そこで強かにいきようとする方々に出会い、明るい気分になった。

第5回ミーティング議事録（1996.1.22）

○経過説明（石東氏）

◇本日の資料説明及び第4回を含む最近の活動報告

◇第4回ミーティング等で交換された意見について

・否定的な意見が多く、多くの理解を得るために説明（言い訳）に苦慮した。

・その後、長田区の仮設の説明会（前向きな意見が多かった）のとき、否定的意見に対するおばあさんの一言「いやなら入らんでエエやんか。」によりコレクティブハウジングの姿勢（全ての人の理解を得る必要はない）を再確認した。

向性として6項目が説明された。

1. ライフスタイルの選択肢の1つである。
2. 協同(協働)居住のルールづくりが必要。
3. 食事を核にすることへの検討(賛否)を深める。
4. 同時に食の協同化のメリットについての検討も深める。
5. 被災地ならではの必要性を再認識し、公営住宅での早期実現を要望する。
6. 「全て失った。でも強く生きよう。」という老人達がコレクティブハウジングを育てる。

◇他地域の例について

- ・南森町で働く女性たちのためのコレクティブハウジングづくりが進められている。

(保育所の経営者が中心となって、保育所を核に施設を計画している。)

◇コレクティブハウジングの事業化への可能性(天川氏)

- ・芦屋市大原町に住む高齢の女性から、個人住宅を賄い付きの老人住宅に建て替え経営したい意向を伺い、相談を受けた。

(立替は3年後を予定。彼女は今までの経験から自然と、コレクティブハウジングのような住まい方が最適と思ったようで、コレクティブハウジングの可能性に自信を持った。)

○新メンバー自己紹介

◇出席者のひとり

- ・会社を定年退職して約1年、現在ひとり暮らし。震災まではひとり暮らしの気軽さを大事にしていたが、震災により怖さを感じるようになった。当面は元気なので人の役に立ちながら、将来のことも考えられればよいと思う。コレクティブハウジングに対して大きな関心を持っており、これからも活動に参加したい。

○淡路島の事例(小林氏)

- ・淡路島の津名町では、数人の老人が将来一緒に暮らすことを考えている。旅行やこれからの生活の備えとして仲間同士で貯金をしている。

- ・仮設住宅が、集落の中あるいは隣接して建設され、知人が近くにいるため離れたがらない人も多い。埋立地の仮設では商業核も隣接し、神戸の仮設住宅よりもむしろ便利である。

- ・いずれも小規模なものが多い。

(石東氏)

- ・仮設の規模が小さくて問題の所がある。5戸一かたまりぐらいの仮設住宅の場合、住民のつながりは強いが、地域の厄介者にされている事例もある。

(野崎氏)

- ・かといって、大きすぎると仮設内のもめごとが絶えない。

○自由討論

◇コレクティブハウジングの被災地での実現性について(石東氏)

- ・現在のところ難しいようだ。行政側には、研究会等姿勢づくりはできているものの、行動は起こされていない。また、ルールづくりなど解決すべき問題が山積し、行政は需要を計りかねている。

◇補助の問題

- ・共同部分への行政からの補助金をいかに得られるか。これに、例えば集会所を付設することなどして公共性もたせて補助を得る方法もあるのでは。(石東氏)

- ・優良(一定の戸当たり面積を確保)建築にしか補助がおりないのがネックである。(小林氏)

◇コレクティブハウジング実現へのソフト面の支援

- ・グループづくりの支援、運営の支援等が必要である。

◇ハード面の支援

- ・長屋等の既存の建物を利用してコレクティブハウジングにすることが考えられる。(小林氏)

- ・仮設住宅をコレクティブハウジングに転換するには、制度上の制約があるようだ。(小林氏)

- ・社宅や寮等も考えられるのではないか。

◇貸す側、借りる側

- ・コレクティブハウジングを民間借家で実現する場合、貸す側は、維持・管理面でメリットがある。住み手側は、震災の恐怖から、一緒に住もうと考える人も増えたのでは。(石東氏)
- ・大地主は損をする事業でなければ賛成すると思う。住民

る。震災前の住民を憂慮している地主も多いと聞いている。(小林氏)

◇コンサルタントの役割

- ・主張し続けることにより、実現へ働きかける。(石東氏)
- ・まず前段階として、モデルをつくることができれば望ましい。また、仮設住宅の住環境の改善策の一つとして、空いてきた仮設住宅にコレクティブの要素を取り入れる。(石東氏)

- ・仮設を利用するのは制度的には難しいが、オフィシャルにしなければ十分可能である。(小林氏)

◇仮設住宅の今後の動向について

- ・被災者の60から70%の人が、公営住宅への移転を希望している。(石東氏)

- ・高齢者が集中してしまった過去の経験を踏まえて、公営住宅への入居は地域優先になるだろう。しかし、兵庫県が一元管理しているので、どの地域から始めるか決定困難。(小林氏)

- ・公営住宅へと希望している人たちは、個人の住居を再建できない人々なので、自然と高齢者など社会的弱者が集まってしまう。従って、公営住宅でのコレクティブハウジングの供給がより必要とされる。(石東氏)

○パンフレットについて

- ・執筆担当分担

○その他

- ・次回をもって第1期最終回とし一応の区切りとする。
- ・生け垣など園芸のコンサルタント派遣について。地域で開かれる住民との話し合いの場を積極的に活用して生け垣などについてのアドバイスを行っていききたい。(林氏)

第6回ミーティング議事録(1996.3.4)

○各方面でのコレクティブハウジング実現へ向けての動きの紹介

- ・兵庫県営住宅
- ・神戸市営住宅(真野地区)
- ・民間 明石風呂屋
津名町
南森町SHIMANTO
芦屋グループホーム(市川さん)
コープこうべ

・住都公団

○ソフト面での取り組みについて

- ・L S A
- ・グループリビング制度
- ・仮設住宅での実績
- 今後の当応援団の活動についての確認
- ・パンフレット作成
- ・コンサルタント派遣
- ・随時ミーティング

■阪神復興に向けて — 私の提言

○石東・都市環境研究室 石東直子

「進みはじめた復興まちづくり

……ハードな計画に偏りすぎているのでは」

被災地域での復興計画が始まっている。「きんもくせい創刊号」にも被災都市でスタートした復興まちづくりの地区名が記されていた。被災地区の人々にとって一刻も速い復興建設は切望される所であり、それに応えて支援コンサルタント等によるプランづくりが急務として夜を徹して進められている。一方、従来の都市防災計画の予想をはるかに越えた大地震を経験して、新たな視点を考慮した都市防災計画の立案も進められている。いずれもこの機にあって急務のものである。しかしマスコミ等の情報やプランづくりに参画している知人の話から感じるのは、余りにもハードな物づくりのプランに偏りすぎているきらいがあるように思われる。

ここに胸痛むひとつのデータがある。この度の震災で犠牲になった 5,300人を越える死亡者の52%が60歳以上の高齢者である。この数値は激震地区が神戸・芦屋・西宮に至る各市の下町を総なめにしたことからの当然の結果の数値として現れたものである。高齢者は心身状況が弱体化しているので多くの死亡者が出たというものではない。予想を越える大地震だったから不可抗力だったと言えるものではない。都市の下町には、今からもう30年以上も前になるわが国の高度経済成長期に建てられた安普請の過小な木造アパートや文化住宅が老朽化したまま多く残っていた。そこには、ひとり暮らしのお年寄りや、老夫婦が住み続けている。お年寄りたちは階段の上がり降りが堪えるので一階の部屋に住んでいる人が多い。それらの住宅が全壊し一階に寝ていた人が犠牲になった。高齢者をはじめとする社会的弱者の安全な暮らしが保証されていなかったのである。

西宮市内の建物被害状況調査で現地に出ると、住宅地図では木賃アパートや文化住宅として記されているが、建物全体がぐしゃぐしゃに押し潰されて従前の様子が分からない状態にまで倒壊してしまった住宅が多くあった。その瓦礫の山のそばにそこで亡くなった人たちへのお花が供えられている場面をしばしば目にした。涙が噴き出る調査であった。このような住宅を含め被災した住宅は143,000戸に及び、避難者は30万人にもものぼる(2/16曜)。まずは住宅再建が緊急課題である。どこに、どんな住宅を、どんな手法で建設して行くのか、新たな発想が必要であり、今までのまちづくりとは大きく視点が異なるはずである。恐怖を体験した人達が長い時間はかかるけど心を癒されて行くような暖かさ、安心、やすらぎの仕掛けを内在した復興プランであってほしい。そのためには急いでハードを重視したプランは描けないはずである。市民福祉の視点を中心に置き、地元商店街や市場の復興にも小規模単位であっても

できるかぎり地域に住んでいた人達の住宅を付設したり、一気に完成図を目指さないで、段階的に復興建設していくようなプランも望まれる。そして今までハードなまちづくりに関与することが少なかった役所の福祉部局や市民生活部局、お医者さんたちももっとまちづくりに積極的に大きな口出しをしてほしい。アイデアを提供してほしい。避難生活の中で芽生えた共に生きる、共に支えあって生活するというライフスタイルが、育っていくような仕掛けをもつ生活環境が整備される絶好の機会にしたい。

例えば、数軒単位の共同建設や、今行政が建設している応急仮設住宅ではなくて、3年か5年位住めるような住水準を備えた一時的住宅も建設し、その後の状況に応じて用途を変えたり、更に住水準を高めていけるような住宅の建設はできないだろうか。27㎡ワンパターンの応急仮設住宅に入居が決まったお年寄りの中には一人で住むのが不安だと言っていた人もいた。ひとり暮らしのお年寄りや老夫婦が仲間同士集まって住めるような住宅が市場のそばにでもできないだろうか。お昼ご飯は市場で働く人達も一緒にできるような食堂があれば楽しいだろう。

弱者に集中して多くの死亡者が出たのは誰の責任だとは今、言及したくないが、私たちまちづくりの専門家も含めてそれに対応する側に責任のすべてがかかっていたと思う。予想を越える大きな天災だったというが、社会的弱者に対しては人災とも言える側面も大きい。(2月16日記)



きんもくせい

発行:阪神大震災復興
市民まちづくり支援
ネットワーク事務局

■生きる気力を取り戻すために、 高齢者等が共に生きるコレクティブハウスの供給を (その1)

石東・都市環境研究室 石東 直子

大震災から半年が経った。一瞬の偶然で生きながらえた貴重な命なのに、その後の仮設住宅の生活で孤独に死んでいく一人暮らしのお年寄りが後を断たない。生きる気力を失って自ら貴重な命を断ち切ってしまう人も出ている。せっかく生きながらえた人達の命を大切に、生きる気力を呼び戻すのが、無念にも命を奪われて逝った6,000名以上もの人達への供養でもある。

<毎日新聞によると1995年7月15日現在で、仮設住宅での孤独死は8名、自殺者は26名。自殺者の7割近くが55歳以上の中高年者であるが、それらの人数はさらに多いという情報もある。また、震災による直接被害の死者と関連死の人の合計は6,038名である>。

被災した下町に住む人達の多くは他所へ移り住んでは生活できない居住地限定階層である。特に高齢者は長年住み慣れた地域から切り離されては生きていけない。高齢者が生きる気力を取り戻せるような住宅の供給が必要である。仮設住宅の建設は入居者と立地場所、住戸形式のミスマッチという決定的な問題を持ってしまった。仮設住宅の入居者が恒久住宅としての震災復興公営住宅に移り住む時、また二度目のミスマッチを犯さないためにも、仮設住宅供給の問題点をしっかりと把握する必要がある。既に周知のことであるが、主たる問題点をあげると、高齢者は長年住み慣れた地域から切り離されて住めないということ。住戸の供給とともに日常生活に必要な居住環境条件の供給が求められる要件としてあるということ(例えば、身近な日常品商店、医院、銀行、郵便局、交通駅等)。しかし、市街地での用地確保の難しさから、多くの仮設住宅はこれらの点が配慮されず、遠隔地に大量建設された。住戸形式の問題では、今まで下町の長屋やアパートに住んでいた人達は狭小で老朽した住まいであったが、近隣の人達との触れ合いがあった。地域で育まれて生活が成り立っていた。それがバス、トイレ付きの2Kの仮設住宅に移り、居住水準は上がったように見えるが、隣同士の人の触れ合いは失われた。高齢者、障害者、母子家庭等の優先入居を採ったのに、居住者に対応した最低限のバリアフリーも配慮されていない。トイレへの段差が30センチもあり、浴室の手摺りもない。出入口に軒の庇もない。恐怖を体験した後では、ひとり住むのが不安である。怖いと訴えている人も少なくない。

今後、多くの人々が仮設住宅から恒久公営住宅に移り住むことになる。その時また、同じミスマッチを繰り返さないために、コレクティブハウスの供給を提案したい。生きる気力が失せて将来の生活に不安をもつ高齢者等は、とにかく毎日の人との触れ合いとおしゃべりが必要である。

●海外のコレクティブハウスの例
-フェルドクネッペン(スウェーデン)



施設の外観。ストックホルムの旧市街地に立地する



コモンドイニング

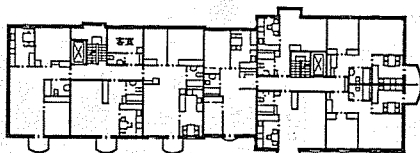


多目的室にある図書コーナー。奥に見えるのがコモンドイニング

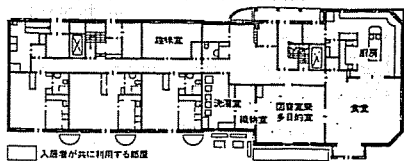
名称:コレクティブハウス・フェルドクネッペン
戸数:43戸(36~76m²)
規模:地下1階、地上7階
共用室:食堂、厨房、多目的室、ランドリー、木工室、サウナ、写真暗室、ルーフトラス、ゲストルーム、事務室
入居年度:1993年
所有形態:賃貸
運営主体:居住者組合フェルドクネッペン

コレクティブハウスとはコ・ハウジングとも呼ばれる協同居住型集合住宅で、北欧諸国ではあらゆる世代を対象に、住宅政策の中に位置づけられて供給されており、高齢者用のコレクティブハウスもある。数世帯から20世帯位が集まって、共に生きる集合住宅での住まい方である。各々の世帯は居室とトイレ、浴室（またはシャワー）、キッチンを持ち、住宅としての個人の自由とプライバシーの確立はなされているが、共同の大きな台所、食堂、居間、応接室、洗濯室、浴室等々がある。生活の共同化とそれに必要な機能とスペースの共有化である。生活の共同化(例えば食事等の家事の分担)の程度は、居住者同士の取り決めでさまざまなパターンがあるが、それぞれ独立した住戸で暮らしながら、COMMONルームを核に共同生活が展開されることにより、安全性、一緒に住む楽しさ、心理的な安心感が生まれることのメリットがあげられている。

高齢者等は住み慣れた地域に戻って気心知れた人同士と一緒に住めるのが一番いい。ひとり暮らしには8帖程度の居室にトイレ、浴室(またはシャワー)、キッチンとたっぷりめの押し入れを、二人、三人世帯は2居室を持ち、後は上述したようなCOMMONルームがあればいい。最低限の共同生活のルールを供給主体が示し、後は居住者相互で助け合いながら生活していくルールを作っていく。元気な人、体力的に弱い人、それぞれ得意の分野を分担して、生活を営むようなルールが必要である。



2階平面図



1階平面図

*写真、図面は小谷部育子氏(日本女子大学助教授)より提供

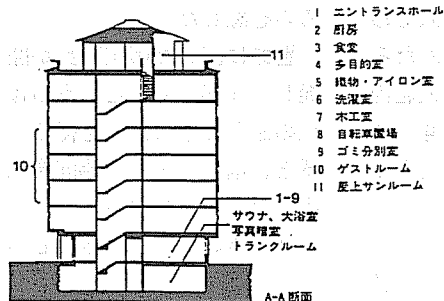
見知らぬ人同士が住みはじめても大丈夫。共同生活スタイルの特定目的の住宅ということで募ればいだろう。もちろん高齢者に絞る必要はない。多世代の家族が集まって住み、世代間交流があれば、生活はより楽しい。

神戸市が復興のシンボル事業と位置づけた「神戸市東部新都心」は高齢化社会に配慮したモデル都市として期待されている。然らばコレクティブハウスの導入は不可欠のはずである。

公的住宅での供給だけでなく、特定優良賃貸住宅制度の特目住宅での供給も考えられるし、民間でのシニアコレクティブハウスのグループ建設も可能性はある。今、震災を体験して、共に生きるという気運も高まっている。下町に人を呼び戻すためには、まず商店街や市場の復旧が必要であり、その際にも小規模単位のコレクティブハウスが建設できるような公的助成制度を創設してほしい。日常生活に必要な施設がセットで供給されれば、生きる気力は取り戻せる。

実現までにはクリアしなければならない検討項目が幾つもあるが、仮設住宅での悲劇を繰り返してはならない。

具体的なモデルは、北欧のコレクティブハウスに止まらず、お隣の中国で古くから続く伝統的民家、客家の集住体の住宅(円楼や方形住宅等)、わが国のグループホームの住宅形式にもそのアイデアとイメージを見ることがができる。 <1995年7月17日 記>



■ コレクティブハウジングが根づく確かな芽が育まれつつある (その2)

< 芦屋市ケア付き仮設住宅訪問記 >

石東 直子 (石東・都市環境研究室)

「今、この仕事をしていて、本当に楽しいんですよ」と、のっけからに市川禮子さんは言う。

7月末の炎天下、芦屋市呉川町のケア付き仮設住宅を訪ねた。ここ呉川町には8棟(95戸)の仮設住宅が軒を接して建てられている。その一角の3棟がケア付き仮設住宅で、平屋建ての1棟に14人(14居室)が共に住まうコレクティブハウジングである。わが国ではケアを必要とする人たちが共に生活する場をグループホームと呼び、福祉施策にもり込まれた施設だが、北欧諸国のコレクティブハウジング(多世代の多様な家族が集まって住む共同住宅)の親戚みたいなものである。

(芦屋市では呉川町の3棟と高浜町の1棟のケア付き仮設住宅の運営を、「尼崎喜楽苑」の市川禮子苑長に委嘱している)。

1居室は16m²の広さで、6帖(和室と洋室があり選べる)にトイレと洗面スペース、押し入れ、ゆったりした入口スペースである。それに14人の共同生活のためのダイニングキッチン(約45m²)、2つの浴室と職員詰所がある。

一人に一室なので二人世帯の場合は二室が使える。居住者の多くが住宅が全壊し、長時間倒壊家屋の下に埋もれていた人たちで、極限の恐怖を体験している。中には、1938年の阪神大水害と第2次大戦をも体験している人もあり、「わたしの一生は何だったんだろう」と呆然としていたという。入居当初は話を始めると、すぐ涙がふきでくる人たちがばかりで、生きる気力もなく一日中自室に閉じこもりがちの人も多かったそうだ。

市川さんをはじめとするスタッフ13名が、昼間は各棟に1~2人、夜間は4棟で2人になって、24時間勤務している。スタッフの主な仕事は、入浴介助などを必要とする人の手助けで、通常は目配り、気配りでもって話し相手や生活相談にのり、買い物や通院への付き添いなどと、てんてこ舞いである。食

事は原則として自炊ということだが、希望者には月、水、金の昼食づくりはボランティアの支援があり、居住者やスタッフも一緒になって食事を作る(居住者は食材の実費を負担する)。夕食は31人が芦屋市福祉公社の配食サービスを利用している。スタッフは、居住者が生きる気力を取り戻すために何をしたらいいか頭を痛めているというが、時間が経つにつれて、気力の蘇りを確実に感じているという。各室に閉じこもりがちだった人が、談話室に出て来て交流することにより、入居当初ひどかった精神障害が落ち着き、ここまで良くなると思わなかった程に快方に向かっているという。また、沈みがちの日々を送っていた人が、夕涼みパーティの後、「わたし自分の家を建て直すわ」と言い出し、皆を驚かせたという。刺しゅうの得意な85歳の婦人は見事な作品を仕上げ、額に収め談話室に飾った。市川さんは浴室の前に吊るす巾の暖簾の制作を頼んだ。

わたしが訪れた木曜日は、特別のボランティアが来て、ザルソバ、わらびもち、煮豆の昼食を全員のために用意された。自室で食べる人、食堂でみんなで一緒に食べる人、好き好きである。かいま見た居住者たちの生活の一部であるが、共に住まうという楽しさと安心感、人に対する優しさが育まれているのを感じた。

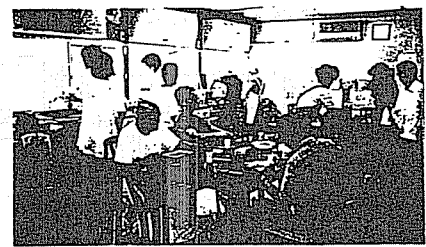
冒頭に記した市川苑長が開口一番に発した「楽しい」というのは、協同居住の確かな手ごたえを得ることの充実感と自信だと思う。協同居住の確かな手ごたえが日を追うごとに、居住者の生活に現れてくる。居住者の多くは避

難所や福祉施設の一時入所、一般仮設住宅、親戚宅などから移ってきたが、ここに入居してみたら案外このような住まい方もいいものだと思いつつあるという。

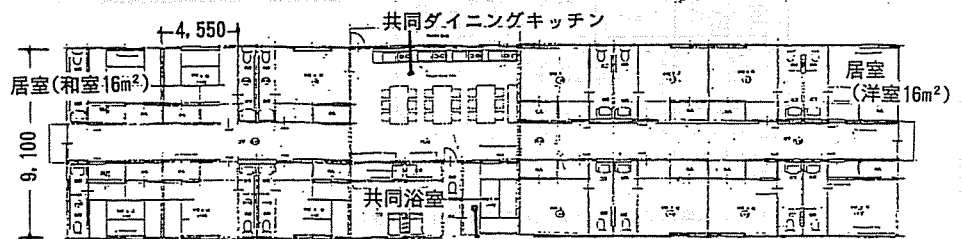
このケア付き仮設住宅の入居対象者は、入浴、炊事、衣服の着替えなどに一部の手助けを必要とする程度の高齢者であるが、一般の仮設住宅も同様な手助けを必要とする人は少なくない。また身体的に元気であっても、生きる気力も失せて途方に暮れている人、将来の生活に不安を持つ人が多い。仮設住宅の中で孤立無援の状態におかれていることが一番つらい。生きる気力を取り戻すには、この共に生きるコレクティブハウジングの住まい方が適しており、日本の土壌にも育まれつつあることが、ここを訪ねて実証された思いである。それぞれ独立した住戸で暮らしながら、コモンルームを核に協同生活を展開していくことは、安全性、共に住む楽しさ、心理的な安心感が生まれる。

わが国にも少し前から北欧のコレクティブハウジングの先進事例が紹介され始め、そのニーズの社会的気運も出てきつつあるが、震災というつらい体験を得て、そのニーズの加速度が増したといえよう。

今、阪神間の復興まちづくりのために、コレクティブハウジングを供給する時が来た!(8/20記)



● 共同リビングでの昼食



● 芦屋市呉川町ケア付き仮設住宅平面図

■ ミニ・コレクティブハウジングの供給が始まっている (その3)

<岡山県サニーハウス鴨方～ひとりぐらし高齢者協同居住～訪問記>

石東 直子 (石東・都市環境研究室)

●岡山県は1994年度に「ひとりぐらし老人共同生活支援事業」を創設し、事業を実施する市町村に、施設及び設備、並びに運営に要する費用の補助を行っている。94年度に4地区(入居開始)と95年度に2地区(計画中)が事業化されている。県は事業の背景として、ひとりぐらしの生活は淋しさ、孤独感、急病や事故等の緊急時の不安や、食事、風呂等の家事や、家屋を維持するための労働的、経済的負担が大きい。これらを支援するためにホームヘルパー派遣等の支援事業があるが、加えて、高齢期における生活の仕方の選択肢のひとつとして、地域のふれあいの中で、一つ屋根の下で互いに助け合い共同で自立した生活をするにより、ひとりぐらしの淋しさや不安、負担の大幅な解消を考えた。大字位の顔見知りの範囲を対象とする。

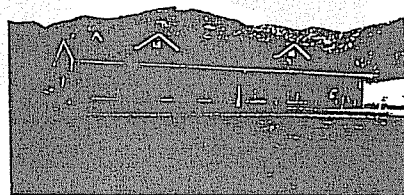
●共同生活施設の内容は、概ね6人程度の協同居住で、プライバシーが確立した居室と共同スペース(厨房、食堂、談話室、浴室、洗濯室、倉庫等)があり、空家等利用型と小規模ホーム新築型ある。既に入居が始まっている4地区の特色は次のようである。

加茂町は、豪雪地であり、特に冬季における共同生活にメリットがある。料理教室等を実施して、地域の高齢者との交流を図ったり、園芸作物の共同栽培を行う。夜間を中心に共同生活をし、昼間は気ままに自宅と行き来する。

中央町は、旧村の中心地で、役場支所、駐在所、郵便局に近接し、診療所と一つの建物として整備。両山寺の参拝客等を対象に特産品の生産、販売、観光案内を行う。

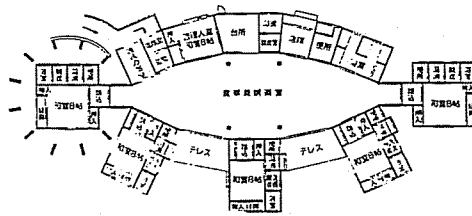
川上町は、高齢者福祉のむらづくり

●サニーハウス・鴨方



外観

事業の一環として取り組み、入居者を地域ぐるみで支援する。生活しやすい楽しい建物(下図)。ゲートボール場や家庭菜園も整備。夜間を中心に共同生活をし、昼間は自宅と行き来する。



「しあわせ荘」平面図

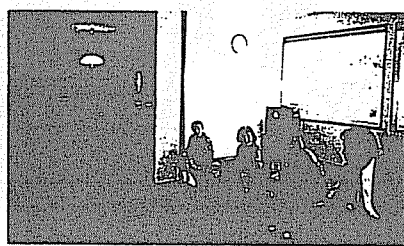
鴨方町は、都市部におけるひとりぐらし老人に対するモデル施設として整備し、全町を対象とする。地域の高齢者と座談会、ゲートボール等による交流や野菜の共同栽培を行う。

●10月半ばすぎ、サニーハウス鴨方を訪ねた。鴨方町は倉敷市からJR山陽本線で西へ20分、福山市にも近く、両市のベッドタウンとしての性格もあり、人口は2万人強である。建物はレンガ色の平屋(建築面積約360m²)で、内部は南側に6つの居室が並び、幅広い廊下をはさんで北側に共用スペースがある。居室は25m²程度で6帖の和室と広縁にキチネット、便所、押入れ、床の間がある。共用スペースは、厨房、台所、畳コーナーをもつ交流室、風呂、洗濯室、倉庫、援助者室、玄関ホールである。一人当たり面積は約60m²である。女性3人と男性2人が住んでいたが、つい先だって89歳の男性が引越して行かれた。高齢のため共同生活の役割分担に負担を感じるようになったという。ここでは一人で食事当番と一週間を通しての掃除当番を分担していたが、一人が引越された後、食事

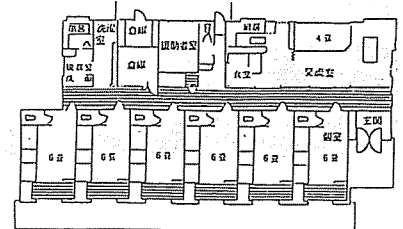
は各自で作ることにした。数人程度の小規模単位での協同居住の課題であろう。余りにも小人数では共同生活の役割分担に負担がかかり過ぎる。一人での家事分担はしんどい(精神的にも重圧である)。チームでの分担作業であれば、カバーし合えるし、その人のできる役割を分担すればよい。協同居住はある程度の単位規模が必要なようである。午前中は地元の人が生活支援者として、共同生活のアドバイスや相談ごとに対応しており、その運営費は県からの補助がある。共同生活を始めて半年で日が浅く、居住者にはまだ戸惑いがあるように見えたが、玄関ホールに置かれた大きな月下美人の鉢植えがご自慢で、見事に咲いた花の写真をプレゼントしてくださった。玄関の棚の上には住人の手作りの紙細工の花瓶が並んでいる。サニーハウスは全町を対象として公募したため、馴染みのなかった人たちが共同生活を始めたので、まだ共に暮らす楽しさを十分に味わえる程には親密になっていないようだ。また、5人という小規模単位は、長らくひとり暮らしで気ままに暮らしてきた人たちの個性や年齢的な差異がもろに影響し合い、共同生活の楽しさが醸成されるには、もう少し時間がかかりそうだ。夕食後は各自が居室で自由な時間を持ち、談話室で皆で過ごす時間は多くないとのことだが、ひとり暮らしで不安だった夜が安心して過ごせることは快適であると言われた。

高齢者は住み慣れた地域で、気心知れた人同士と一緒に住めるのが一番言い。生き生きした生活が再スタートできる。震災地での住宅復興の貴重なモデルがあった。(10月26日 記)

(資料等は岡山県保険福祉部提供)



交流室・食堂



平面図

■ ストックホルムのコレクティブハウジング

— フェルドクネッペンの夕食をよばれて — (被災地にコレクティブハウジングを！/その4)

石東・都市環境研究室 石東 直子

9月ある夕刻、雑誌の写真からのコピーを頼りに、フェルドクネッペンを訪ねた。正確な住所は知らないが、国鉄ストックホルム南駅のすぐそばと聞いていた。友人の小谷部育子さんが親しい住人に、わたしが訪ねていくので夕食も一緒にできるようにと連絡してくれていた。住居を中心に再開発された駅周辺の新市街地と、100年、200年も前の建物が続く旧市街地との接点にそのアパートはあった。1階に豊かな共有スペースを取っているため、連続したアパート群の町並みにアクセントを添えている。入居者は12歳以下の子供と同居していない40歳以上という条件があり、現在の住人51人(43戸)は、40歳から86歳で平均年齢は55歳だそう。このうちの何人かはこのプロジェクトの計画段階から参加しており、5年かかって計画をつめ、コーポラティブ形式で建設したコレクティブハウジングである。ここでの生活はそれぞれ独立したアパート(36~76m²の9タイプの住戸)での普通の暮しと、多様な共有スペースでの住人同士の豊かな交流がある。協同居住のメインの義務は6週間に一度巡ってくる5日間(月曜から金曜の夕食)の食事づくりである。数人がチームで食事を作り、住人が一緒に食事をする。食事当番の義務は負うが、食べる食べないの自由はある。夕食時間は5:30~7:00PMで、私が訪ねた日の夕食人数は32人だった。32枚のスープ皿が用意されて、残ってい

るお皿の枚数でまだ食べに来ていない人数が分かる。食事のクーポン券はまとめて買っておき、食事の都度もってくる。食事の雰囲気実に楽しい!

三々五々にやってきて、セルフサービスで食事をよそって、好き好きにテーブルに着く。4、5人のグループもあれば、10人以上のグループもある。テーブルごとにおしゃべりに花が咲き、いろんな世代、職業の人たちの情報交換がすすむ。大家族のような雰囲気でもあり、学生食堂のような賑やかさでもある。魅力的な時間である。

E & E 夫妻と私のテーブルには今週の食事当番の一人がいて、本日のスープの作り方、食材の買い出しのことなど話してくれた。今日のメニューはとも味のいいスープがメインディッシュで、じゃがいも、ラディッシュ、青野菜などが入ったポタージュ風の濃いスープで、大きなスープ皿が用意された。それに滋養のありそうなブツツした乾パン(クネッケボード)とバターが2種。チーズを削って好きなだけ挟む。デザートは食パンの上にリンゴを乗せて焼いたものとコーヒー。ワインやビ

ールは各自で持参。E夫人は私のために赤ワインを1本抱えて食堂に降りた。テーブルには捨て難いすてきな空き瓶を利用して、冷たい水が用意されている。

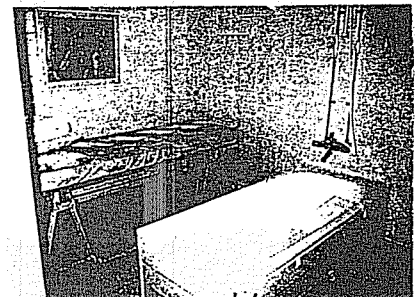
食事中、私のテーブルでは、珍客の私のために、ここの生活の様子をいろいろ聞かせてくれた。食事当番の彼女は建築家で、スウェーデンでのコレクティブの推進にさまざまな活動を展開してきた。スウェーデンのコレクティブはデンマークから学び、自分たち流のルール等を検討したという。コレクティブでは住人の年齢層のミックスがととても大事で、それが協同居住の無理のない運営、共同生活の楽しさを生み出すという。私がかが震災復興住宅にコレクティブの提案をしていることを話すと、日本独自の生活文化に合ったコレクティブの検討がととても重要であるとアドバイスされた。

食事がすむと、各自で食器を厨房に続くカウンターまで運び、また三々五々にひきあげて行く。まだ話し込んでいるグループもある。Eさんは7時からメンテナンスグループのミーティングがあるので早めに引きあげ、7名が屋上のサンルームで会合を始めた。廊下や階段、共用のトイレ等の共有スペースの掃除、植木や庭の手入れ等は本来管理会社がやるのだが、居住者組合(住人の自治組織)が住宅供給公社から請け負って行うことで、家賃の一部として払った管理費をペイバックさ

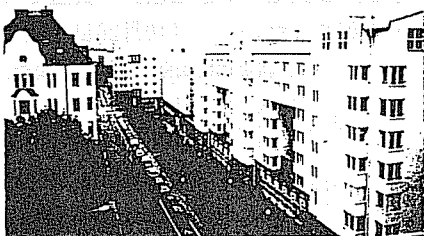


共同ダイニングでの食事

厨房におかれているレシピ集



共同浴室。浴槽の周辺には介護スペースが十分にとられている



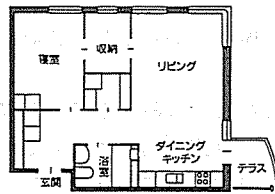
フェルドクネッペンの屋上から見たストックホルムの街なみ

れる。それで共同生活に必要なものを買い替えたり住人同士の活動資金に当てるといふ。E夫人は7時半から来週の食事当番のミーティングがある。8～9人が1チームで食事作りと後片付けの共同作業をするが、それぞれができる範囲で作業をやればよく、高齢で調理作業が少ししんどい人は軽い作業を分担する。食事チームが決めた週間メニューは、1週間前に掲示される。住人の中に著名な栄養学の元プロがいて、15人単位、20人単位でレシピを書き上げておいてくれるという。厨房にはぶ厚いレシピのファイルが何冊も置かれていた。

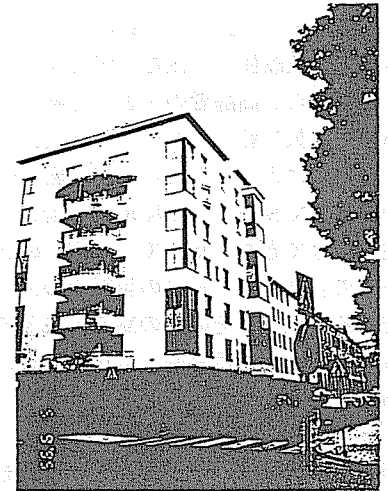
共同のリビング、洗濯室、アイロン室も食堂のそばにあり、自然な形で出会いの場となり、住人たちのコミュニケーションがとれる。趣味室やサウナ等の豊かな共有スペースもあり、さまざまな人たちが一緒に暮らし、共同生活のルールは自分たちで決めていく。

日常的なコミュニケーションを通して相互扶助が生まれ、安全で安心した生活が保障される。自分たちで決めた共同生活のルールによって、自由とプライバシーが守られる。私にとっても憧れのライフスタイルであるが、震災後の復興住宅供給にぜひ取り入れてほしい。後を経たない仮設住宅での孤独死を防ぎ、被災者の不安、孤独を忘れることができる。悩みや心配事も語り合うことによって糸口が見つかり、生きる気力が取り戻せる。

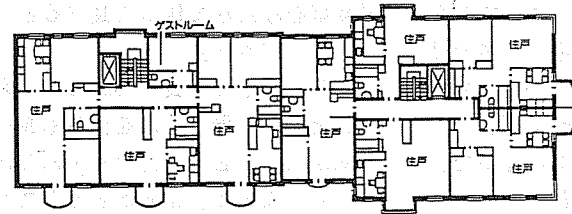
共に住まう、共に生きる、相互扶助のライフスタイルは、安全で、安心して、共に生きることの楽しさがあると確信した、フェルドクネッペンでのひとときであった。(11月20日記)



代表的な1住戸平面図(55.5㎡)

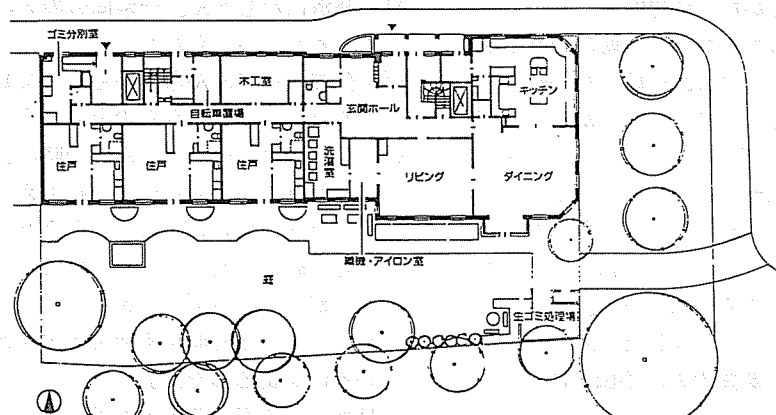


フェルドクネッペンの外観



標準階平面図(住戸標準プラン)

フェルドクネッペンの建築概要は、「きんもくせい」14号(8月17日)参照



1階平面図・配置図

図面資料は「TOTO通信」1995. 9-10月号

■「そんな住宅、理想的や。そやけどわたしら5年も待たれへん！」

—長田区のひとり暮らし高齢者のすまいを考える集い— (被災地にコレクティブハウジングを！/その5)

コレクティブハウジング事業推進応援団 石東 直子

12月半ば、長田区二葉老人いこいの家で、仮設住宅に住むお年寄りの“ひとり暮らし高齢者のすまいを考える集い”が久二塚6まちづくり協議会・住宅部会によってもたれた。出席者は地震前まで長田区久二塚地区の借家に住み続けてきた人たちで、72歳~85歳までの女性11名と地区の世話役の方々である。以下にその日の話を再現してみよう。聞き手は森崎、太田、小林、石東である。

*

◇「コレクティブハウジングという聞き馴れへん言葉やけど、みんなで集まって住もうという住宅についてPRにきました。自分の住宅は小さいけど台所やお便所もついていて、共同の大きめの台所、食堂や談話室、お風呂などがあるという共同住宅で、住む人がみんなで共同部分を使って、管理していくという住まい方です。」

◇「そういう住宅ええけど、入れてもらえるんかな。理想的や。」

◇「動けるもんがして、助け合う生活、これからは相互扶助せなあかん。」

◇「それ建つのにどれ位かかるん、5年もかかるんやったらわたしら待たれへん。」

◇「2年位やったら待っとけるかなあ。」

◇「たとえば廊下を広げて椅子なんか置く。そこをみんなで掃除できるか。」

◇「自分ができる間はやる。できんようになったらどうしたらええんやろか。」

◇「町内の友愛の人が手伝いに来てくれるよ。」

◇「当番制にしたらええ。」

◇「できる人とできへん人もいるので、文句が出るのちがう。」

◇「これまでのような日本的なグチグチ言うたらあかん。」

◇「この地震から人間切りかえなあかん。」

◇「仮設住宅のお風呂はこわい。高いので入りにくい。」

◇「銭湯の方がええ。人と知り合える。」

◇「そんな住まい方やったら気分悪うなっても、誰かにすぐ分かってもらえる。」

◇「地震の後、西区で老人ホームに入ってた時、そこでは相互扶助が当たり前やった。」

◇「ひとり暮らしいうても、娘がひとりいるというのと、全くひとりというのは違うわな。」

◇「身体が弱いので人に気をつかう。参加したいけど、何もできなかつたら人にしてもらおう方が多くなって気兼ねする。」

◇「趣味の部屋なんかどう？ 使われるかな。」

◇「編みもんなんかはみんなで一緒にもするけど、自室でもやっている。」

◇「長楽の仮設は一棟に24戸入っていて、風呂がひとつしかない。どうしても2つは必要。風呂は大と小があればええ。」

◇「食事をみんなで作って食べるというの、どう？」

◇「いろんなものを食べられるのでええ。ひとりやと同じもんを何日も食べなあかんし、自分の好きなもんしかつくらへんので、栄養がどうしても片寄る。」

◇「食事を作るのは運動にもなる。」

◇「不経済にならへん。一週間分のメニュー考えたらええねん。」

◇「自分で作ってみんなで持ち寄って食べるというのええんのとちがう。」

◇「元気な時はいいが、しんどい時は食事を助けてもらえるのが一番ええ。」

◇「男と女と一緒にいうのは、どう？」

◇「ほら一緒にええ。テレビ見ても考え方がいろいろ聞けてええ。」

◇「釘打ったりする時でも男の人の手がある時があるわな。」

◇「指導する人がいるやろか？」

◇「身体が不自由になった時リーダーがいる。」

◇「老人はわがまま言う人が多いので、そんな住宅は無理やと思う。」

◇「いやな人は入らんでもええんのとちがう。」

◇「同室型より、そのコレクティブとかいうのがええね。」

◇「家賃は3万円ぐらいしかよう出さな一。」

*

晦日とお正月の新聞には、中高年の被災者の自殺や孤独死の記事が多かった。お正月を前にして、孤独に耐えら

れない被災者は少なくなかっただろう。記事によると、震災後の自殺者は6月以降は仮設住宅居住者が目立っているという。(毎日新聞によると、1月半ばで、自殺者33名、独居死51名、室内で意識不明に陥った人12名。)一日中誰ともふれ合わんと、部屋の中で孤独に過ごすのはあかん。明日への気力がわいてけえへん。

《いつでも誰かと会えるし、いつでもひとりになれる》、《ひとりで食事するよりも、たまには大家族のように集まって食べよう》というコレクティブハウジングが理想的やと思う。

今、仮設住宅に住んでいる人の中には、自力で住宅を確保して移り住む人もいるけど、多くの高齢者や母子世帯などは災害公営住宅の入居を待たざるをえない。そうすると災害公営住宅では、今の仮設住宅よりももっと高齢者や母子世帯などの割合が多くなるだろう。行政としてはいろんな懸念もあると思うけど、とにかくモデル的にコレクティブハウジングの供給を早急にやってみて！長田区のしたたかなおばあちゃんたちの応援があるやん。初期に建てる住宅に実験的にとりくんでみて、問題点があれば修正していけばいい。躊躇していると孤独に耐えきれないで、人知れず亡くなっていく人の記事が、今後何年も何年もの間報じられて胸を締めつけられる日々が続くよ。

被災した人たちは人間が変わった。変わろうとしている。変わって新しい生活を始めようとしている。行政システムも変わってほしい。人々が仲良くしていける地域をつくるのが防災である。

《共に住む、共に生きる、共に創る、相互扶助の暮らし》、《集まって住む安全性と安心感、集まって暮らすことの楽しさをもつ住宅》の供給が、待たれている。

昔のように元気な生活をとりもどした下町のニュースを、一日も早く目にしたい。そして、そこから、本格的なコレクティブハウジングが発展していくのを願っています。(1月20日 記)

■「友達は自分でつくれるけど、こんな住まい方は自分でつくれへん」

—協同居住を軌道に乗せるためのサポート体制—

(被災地にコレクティブハウジングを！/その6)

コレクティブハウジング事業推進応援団 石東直子

●「ドアを開ければ誰かがいる。こんな住まい方はほんまにええ。今まででは寂しかった。友達は自分でつくれるけど、こんな住宅のこんな住まい方は自分でつくれへん。死ぬ前に幸せつかみたい。こんな住宅を建ててほしい。」
尼崎市小田南ケア付き仮設住宅に住むMさんはつぶやいた。彼女の部屋には沢山の友達が訪ねてくる。私がおじやました時も友達が帰ったばかり。6帖程の洋室にトイレと洗面スペース、押し入れ、踏み込みスペースで約17㎡。この個室が中廊下をはさんで14室あり、中央に共用スペースをもつ。約80㎡の共用スペースには、台所、食堂兼談話室、風呂と洗濯スペース、援助員室がある。まさにコレクティブハウジングであり、小田南には2棟（14室型と10室型）がある。<尼崎市にはもう1カ所、三反田ケア付き仮設住宅があり、市は特別養護老人ホーム「喜楽苑」

（小田南）と「園田苑」（三反田）に運営を委託している>。芦屋のケア付き仮設住宅も含め3カ所とも建物形式やケアサービスシステムはほぼ同じであるが、雰囲気は地域性がある。小田南は下町の長屋住まいのような親しみがあり、食堂はat homeで、さすがここは尼崎という気分になる。96歳のAさんは、ここは尼崎の競艇に出かけるのに都合がええと言う。時には尼崎センタープールにとどまらず、住ノ江ポートまでにも足を伸ばす。町中の小さな協同住まいは交通の便利もよく住みなれた地域なので、つらい震災にあったけど元のライフスタイルを取り戻している。ここには4グループの食事ボランティアの支援があり、ほぼ毎日、昼食か夕食がサポートされる。ボランティアが前もって立てたメニューの食材を買ってきてくれる。入居者は300円程度の実費を払う。食事づくりには入居者も準備や後片付けに加わり、全員が集まって食事をし、時にはそのまま食後の団欒を楽しむ。夫婦ものは自室で食事をする時もある。食堂を使う時は、

必要な私物をバスケットに入れて持って来て、また持ち帰る。私物を共用スペースに放置しないという協同居住のルールができています。しかし隣の棟はそうはっていないとのこと。1カ所ある共同風呂の入浴順番も、今では個人々の生活スタイルが把握できたので、トラブルもなくまあ順調。2、3人で連れもって入ることもある。「今まで旅行に行ったことがない。いっぺん行ってみたい」という入居者のつぶやきを若い援助員が聞き、温泉旅行を企画した。悪戦苦闘の準備があったと聞かすが、1泊2日の高原ロッジに6名が参加した。冬に入る前に避難訓練も実施した。火災発生の際の脱出、耳の聞こえない人、目の不自由な人に脱出をどう知らせるのか、屋外と室内との段差が高いので、まず布団を放り出してクッションにし、元気な入居者は相互グループをつくり、大騒ぎをして行った。その結果、防災計画書も作られ、個人は非常袋の準備、各部屋には援助員がすぐ使える位置に消火器を置いてもら

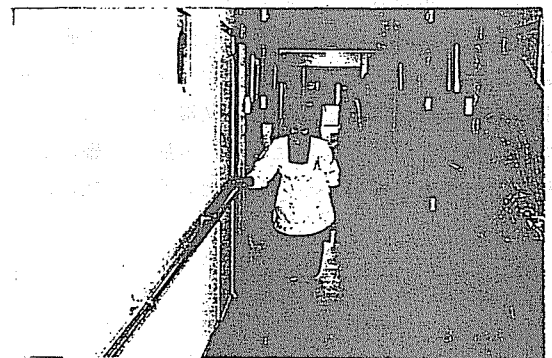
うことにした。ここでは、毎日の食事、緊急時の避難、生きがいづくりが大切な課題だという。

●日常生活にアクセントをつけながら、大家族のように棲み合っている暮らしが、冒頭のMさんがつぶやいた“こんな住宅でのこんな住まい方”であろう。この棲み合いを育んできたものは何なんだろう。震災後4カ月経って共同スペースをもつ仮設住宅が建てられ、そこに入居しただけというのでは、こんな住まい方は育たなかつただろう。ここには協同居住をつくりあげるしっかりした仕掛けがあった。

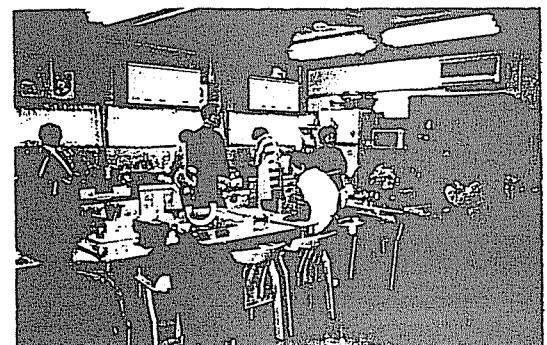
コーディネーターと生活援助員と看護婦の3職セットである。

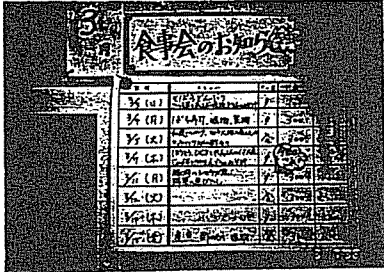
小田南の場合は、コーディネーターにケースワーカーや老人福祉の専門職を経験してこられたベテランの男1名。看護婦は一般病院での看護婦経験のある女1名。生活援助員は20～50歳代の中広い年齢層で、夜勤のみのパート(3名)も含めて8名程いる。これらのスタッフが24時間体制で、1棟に昼は2～3名、夜は1名配置されている。援助

お湯を沸かしに食堂へ

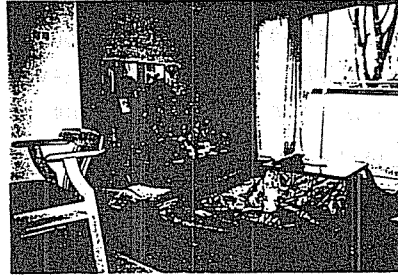


ボランティア・職員たちによる夕食づくりのスタート





食事ボランティアによるメニュー



空室を利用した団らん室に立派なお雛様が

員は入居者の生活をサポートするための、食事づくりの手助け、買物や通院の付き添い、相談や話相手に応じており、介護福祉士の専門スタッフが多い。その中には調理や家庭料理のプロもいて、ずい分恵まれている。援助員自身の悩みは、“どこまでサポートすればいいのか”ということだと言う。例えば、ある入居者が体調をくずした時、一時的に手厚いサポートをすると、回復した後も同じサポートを求めてくる。サポートしすぎると、自立した生活ができにくくなるということにもつながる。若い援助員に対しては入居者の要求も多く、援助員は悩んでしまう。看護婦はここでの看護対応だけでなく、外部からの訪問看護や入居者が通院している医療機関とのつながりも必要となり、総合的な医療・看護の知識をフル回転しなければならない。彼女は一時期援助員も兼務していたので、入居者のニーズもよく分かっているという

のが恵まれている。コーディネーターは援助員、看護婦と入居者の対応でどんな問題が生じているのかを知り、うまくいくように異なった立場から話をきき、調整していく。入居者同士の協同居住のギクシャクも起きるので、それが大きくならないうちに事前にキャッチして、仲もっていくことも大きな任務となる。ボランティアの調整もする。入居者にとって全てが結果オーライでいくためには、この3職のバランスが必要であり、とくにコーディネーターの任務は大きい。バラバラで入居してきた人たちの状態を知り、その個性を尊重しながら協同生活を育てていくまでには、多くの試行錯誤があったようで、入居者の個性、生活歴、健康状態、食事の等を把握するため、アンケートをしたり個人生活カルテも作られている。

●以上のような話をいっぱいしてくれたのは、私の娘のような年代の若い援

助員であったが、話を聞くうちに親世代をはるかに越える職業意識と自信と軽やかな行動力をもっているのに感動した。素敵な人材である。

高齢者・障害者を対象としたケア付き住宅では、この3職セットが欠かせないが、元気な自立した人たちのシニア・コレクティブではここまで望むのは現時点では難しいだろう。コーディネーターだけで十分なのか、その対応期間はどれくらい必要なのか、その人材確保は、入居前に協同居住のトレーニングもいるだろう、等々……検討しなければならない。

今、災害復興公営住宅でコレクティブハウジングの供給が始動しようとしているが、共同スペースをもった住宅の建設というハード面の供給だけでは協同居住は稼働しない。的確なソフトシステムを構築し、その人材確保ができるかどうか、新しい住まいコレクティブハウジングの成否を決めるだろう。生活歴の異なる人たちの協同生活を個性を大切にしながら築き上げていくということは、わが国ではほとんど未知の分野であるが、協同居住は同じライフスタイルを指向する人たちと専門的立場からのほまった誘導との合作であり、ケア付き仮設住宅から学ぶものは多い。〈続く〉（3月23日 記）

神戸新聞1996.2.25

震災から二箇月の春が来る。仮設住宅に暮らすようになった多くの被災者にとっては、そこで迎える初めての春である。春になれば、自室に閉じこもりがちになった人たちが、ちよつと言葉を開けて外へ出てみよう、という気持ちになるはずだ。生きる気力を取り戻してほしい。



都市プランナー

石東 直子

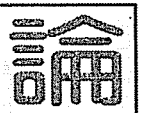
では生活できない居住環境、医療機関、郵便局など日常生活に必要な居住環境の供給が求められていること。先入居をとったのに、入居させていつでもだれかと「合住宅」(コホウタイプ)ハ

復興住宅に協同居住タイプを



いしとう・なおこ 神戸大学大学院修士課程修了。建築コンサルタント会社などをへて、1986年、石東・都市環境研究室を設立。震災後、西宮復興まちづくり支援ネットワークやコレクティブハウジング事業推進応援団を発起。被災地サポートに取り組み。吹田市在住。

住宅として供給されておられる方について、仮設住宅の高齢者と意見交換の場を持つた。「いつまでも待たれては、一人暮らしは八までしかよう出さん」といふ声があったが、「理想的な居室にトイレ、浴



朝日新聞1995.8.3

私の提言

協同居住型住宅の供給を



西宮復興まちづくり支援ネットワーク事務局担当 石東 直子

震災から半年がたち、仮設住宅で孤独に死んでいくお年寄りや、生きる気力を失って自殺する人がでてくる。被災した下町に住む人たちの多くは、よそへ移り住んでは生活できない人であり、特に高齢者は長年住み慣れた地域から切り離されては生きていけない。高齢者が生きる気力を取り戻せるような住宅の供給が必要である。

局、駅)のない郊外に大量に建設された。下町の長屋やアパートに住んでいた高齢者は狭くて古い住まいであったが、近隣の人たちとの触れ合いがあり、地域にはぐまれて生活が成り立っていた。震災の恐怖を体験した後では、一人で住むのが不安である。怖いと訴えている人が少なくない。今、生きる気力がうせて、将来の生活に不安を持つ高齢者には、毎日の人ととの触れ合いが大切である。そこでコレクティブハウスと呼ぶ必要がある。そこでコレクティブハウスと呼ばれる協同居住型集合住宅の供給を提案したい。

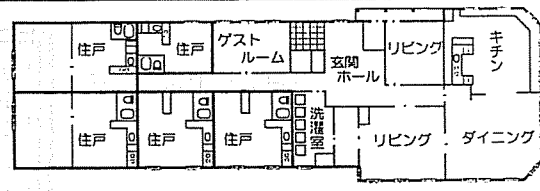
一人暮らしには八畳程度の居室にトイレ、浴室、小さな台所とたつぷりめの押し入れを、二、三人世帯は二居室を持ち、住宅としての個人のプライバシーは確保されているが、共同の大きな台所、食堂、団らん室、応接室、洗濯室、浴室などがある。それぞれ独立した住戸で暮らしながら、共同スペースを核に共同生活することによって、安全性、みんなと一緒に住む楽しさ、心理的な安心感が生まれる。

食事や団らんは一緒に

復興県住に共同居住型

高齢者の相互扶助促進

全国で初 県が方針



兵庫県は六日、神戸市・東部新都心に建設する災害復興県営住宅の一部に入居者の共同生活を前提とした「コレクティブ・ハウス」(共同居住型集合住宅)を採用する方針を決めた。建設費はもとより、県内同ハウジングの決まった定額はないが、集合住宅内に独立した複数の住戸と、入居者が共同利用する台所

の公営住宅で導入されるのは初めて。高齢化社会の進展に伴い、入居者の相互扶助など多様な居住ニーズが求められるなか、全国の自治体に影響を与えたいと、東部新都心の県営(第二期)約二百五十戸の一部に同居住宅を取り入れ、主に高齢者の単身世帯の利用を想定。建設費を住宅・都市整備公団に事実上委託するため、県は仮設住宅の実態調査で入居者の意向を把握しながら、三月までに戸数や仕様・備品を決める。

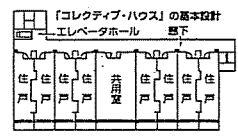
各住戸には浴室兼トイレ

被災者向けに「井戸端」付き住宅

阪神大震災からの復興で、得來の高齢社会を先取りした住宅づくりをめざす兵庫県は、被災者向けの県営住宅の一部に、共同炊事場や住民交流のできる共同居間を設けた「コレクティブ・ハウス」(共同居住型集合住宅)を導入する。全国の自治体では初の試みで、復興のシンボル事業に据える神戸東部新都心など4カ所に計100戸をつくる。また、仮設住宅で高齢者の孤独死が相次いだことを教訓に、すべての高齢者向け県営住宅に、緊急通報や安否確認システムを取り付ける。

コレクティブ・ハウスは、高齢者が小人数で生活する個別の住宅数戸ごとに、食事やたんの時間を一緒に過ごすための共有スペースを設ける住宅。閉じこもりがちな高齢者に配慮したもので、北欧で定着しているほか、国内の福祉施設でも一部で導入されている。

計画によると、40平方メートル程度の独立し



た住宅8戸と、約80平方メートルの台所や居間など共有スペースを一体的に整備する。

一方、県営の復興住宅6200戸のうち約2000戸は高齢者向けで、1戸当たり40〜50平方メートル。これらの住宅に整備する「緊急通報システム」は、ボタンを押すだけで緊急事態を通報する。「安否確認システム」は、一定期間まったく水を使用しないと自動的に通報される。県は両システムの通報先を、最寄りの福祉施設にする方向で検討している。

朝日新聞1996.2.23

神戸新聞1996.2.7

や流し台などの設備を備えるが、本来の専用面積を拠出して共用部分確保すると、各住戸が住まいとしてため、一住戸当たりの面積は専用で四十平方メートルを回り、回覧通し。

建設費住宅整備課による。各住戸が住まいとしてため、一住戸当たりの面積は専用で四十平方メートルを回り、回覧通し。

建設費住宅整備課による。各住戸が住まいとしてため、一住戸当たりの面積は専用で四十平方メートルを回り、回覧通し。

の公営住宅の補助制度で対応できるとしている。

ただ、入居後の管理・運営方法をソフト対策のほかに、入居者募集や家賃設定などの課題が残っており、今後は北欧の事例なども参考にしながら同僚と協議を進める。

神戸新聞1996.3.2

共同居住型の県住を歓迎する

震災復興の最大の課題で、しかも最も急がれるのは住宅問題だ。とくに、今も多数が不自由な生活を強いられている仮設住宅の人たちを、いかに早く、安い公営住宅に移せるかにかかっている。

そんな中で、兵庫県は、神戸の東部新都心に建設する災害復興住宅の一部に、入居者が共同生活をする「コレクティブ・ハウス」(共同居住型集合住宅)を採用することを正式に決めた。

集合住宅内に独立した複数の住戸と、入居者が共同利用する台所や食堂、居間、洗濯室などを配したスタイルが特徴だ。入居者は自由で自立した生活をしながら、自主的なルールで食事や団らんなど、さまざまなことができる。

北欧などでは住宅政策として定着しているが、日本の公営住宅で導入されるのは初めてだ。高齢化社会が進む中、入居者の相互扶助など多様な居住方法が求められる。全国に先駆けての導入は、多くの自治体にも影響を与えるだろう。

この採用は、被災地の教訓を生かした知恵の結晶とも言えない。急いで建てた仮設住宅は、これまで住んでいた人たちの年齢や地域、専業主婦や単身者、入居拒否や病死、孤独死などを生かしたマッチングだ。

公営住宅への移行で、また同じ過ぎを繰り返してはならず、いかに住みやすい形を整えるかが課題だった。そのために、前例や固定観念にとらわれぬ柔軟さが必要で、コレクティブ・ハウジングはその課題にどう対応するかを柔軟に検討して、積極的に進めた。

県では、これまで自主型や単身者、高齢者の単身世帯の利用を想定しているが、現在実施中の仮設住宅の実態調査で入居者の意向を把握しながら、細目を決めるという。神戸市も導入を検討中だ。

共に住みやすい、安心、ふれあいなど

長所が多い住宅だが、初めの試みだけに課題もある。共同の空間を生かすために部屋は狭くなるし、家賃や光熱費などの設定、食事の準備の調整も課題だろう。地域や生活感が同じ人や、気の合う人たちをどう集めるか。入居者の実態に合わせて柔軟な選定が成功のカギだろう。

都内に住むというには、互いに協力する必要がある。マンションなど共同住宅はその典型だが、今までの意識に換えず、互いに狭くても家が家になったり、下町の長を生きかした共同建て替え方式の建設が叫ばれたながら実際に進まないのが現実だ。

その意識変革を震災が迫っている。とくに過半数を高齢者や身寄りのない人が占める被災地の状況はいかに寄り添って生きながらえるかを急がなければならない。意識を変えよう。機会を捉えて、要するところ、コレクティブ・ハウジングはその試金石だ。言葉などのグループホームやモデルの仮設住宅では、いきいきとした交流がある。仮設の高齢者にも賛成が多い。ぜひ成功させた。民間にも広げたい。

iv. コレクティブハウジング 事業推進

応援団 定期ミーティング出席者

鈴木三郎／神戸市住宅局 石東直子／石東・都市環境研究室 奥井容子／環境意匠計画・奥井研究室 小林郁雄／(株)コー・プラン 鈴木洋子／コープこうべ 中川俱子／(株)アルプラン 野崎瑠美／遊空間工房 平山洋介／神戸大学 安原秀／(株)ヘキサ 天川佳美／(株)コー・プラン 石井敬三／(株)GU計画研究所 河村昌平／(株)長大 岡庭淳／(株)長大 赤楚宏幸／(株)長大 大西一嘉／神戸大学 中林泰男／コープこうべ 開発部 太田尊靖／(株)都市・計画・設計研究所 奥井正造／環境意匠計画・奥井研究室 北島道生／北島アトリエ 坂井豊／兵庫県庁 志賀咲穂／県立姫路短大 千葉桂司／住宅・都市整備公団 辻信一／環境緑地設計 野崎隆一／遊空間工房 林まゆみ 牧野考志／神戸市住宅局 宮西悠司／神戸・地域問題研究所 三輪康一／神戸大学 森崎輝行／森崎建築設計事務所 森田博一／(株)シティーコード研究所 山中和博／神戸市 上田耕蔵／神戸協同病院 杉原淳子／消費デザイン研究所 高尾眞／芦屋ケア付仮設 常田正子／芦屋ケア付仮設 西協創一／在宅介護ネットワーク 蓮本浩介／兵庫県社会福祉協議会 長谷川京子／弁護士 服部敬子／垂水福祉事務所 伴年晶／VANS 森尾洋子 柳原ゆき子／兵庫県保険医協会 有賀芳子／THYME設計事務所 飯森恵 弘本由香里／大阪ガスCEL 荒巻正宣／OUR 北村潤／東畑建築事務所 西村陸男／東畑建築事務所 竹内一郎／アトリエIT'S 田中正人／(株)都市調査計画事務所 谷守正康／(株)谷守建築設計事務所 玉置なつ子／住宅・都市整備公団 中廣穰／六甲環境計画 水谷長清／神戸建築設計事務所 花畑敦子／瀬戸本淳建築研究室 浜田恵三／ジア・デザイン神戸 富原敏裕／ジア・環境創造 深谷朋子／REA建築工房 三好康隆／(株)PPI計画設計研究所 木谷公治／(株)新井組 山口雅子／パルパローレ

設計事務所 山本俊貞／地域問題研究所 渡辺直子 廣瀬敦子／大阪市立大学 寺川政司／神戸大学大学院 藤井由香／奈良女子大学 有村奈保子／奈良女子大学 大石恵美子／奈良女子大学 村上ひとみ／北海道大学

(順不同)

執筆担当者

- 被災地にコレクティブハウジングを！
／石東直子
 - コレクティブハウジングとは、
こんな住まい、住まい方 /石東直子
 - 海外事例 (1) 新しい住空間 /平山洋介
 - 国内事例 a. 岡山県ひとり暮らし老人共同生活
支援事業 /奥井容子
b. 江坂シニアハウス /鈴木洋子
 - 仮設住宅とコレクティブハウジング /奥井容子
 - 住宅復興とコレクティブハウジング /鈴木三郎
- i. コレクティブハウジング事業推進 応援団
定期ミーティング議事録

／河村昌平 岡庭淳 赤楚宏幸

編集担当者 石東直子 小林郁雄 奥井容子

コレクティブハウジングの実現に向けて

発行日 1996年3月

発行者 コレクティブハウジング事業推進応援団

神戸市灘区楠丘町2-5-20

(株) コー・プラン 内

TEL 078-842-2311

コレクティブハウジングの実現に向けて

1996年 3月

コレクティブハウジング事業推進応援団